博　多　48

－博多遺跡群第62次調査の概要－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集

1995

福岡市教育委員会

博　多　48

－博多遺跡群第62次調査の概要－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集

1995

福岡市教育委員会

序

現在，福岡市はアジアの拠点都市をめざし，国際都市づくりを進めています。福岡市の都心部，JR博多駅から博多港にかけての一帯の地下に眠る博多遺跡群は，国際都市「福岡」の原点ともいえる遺跡で，古代以来中世を通じて大陸・朝鮮を主とした東アジア各地との貿易で栄えた都市「博多」の地に当たります。

今回報告する博多遺跡群第62次調査地点は，博多浜砂丘の中央部に当たり，周辺のこれまでの調査から，古墳時代から現代にいたる良好な遺構の存在が期待されました。本調査では，古墳時代初めの方形周溝墓・甕棺墓をはじめ，奈良時代の竪穴住居跡群，平安時代の埋葬遺構，中世前半の土葬墓群，中世後半から戦国時代まで続いた道路跡の発見など，当初の期待を裏切らない成果をあげることができました。

本書が，市民の皆様をはじめ，学術研究の場で活用されることを念願しております。また，調査から整理・報告までさまざまなご協力をいただきました東洋開発株式会社・東洋興産株式会社および大成建設株式会社をはじめとする多くの方々に，心から謝意を表します。

平成７年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾花　剛

例言・凡例

1．本書は，ホテル建設に先立って福岡市教育委員会が調査を実施した，福岡市博多区御供所224他に関する発掘調査の成果を報告するものである。

2．本書の編集・執筆は，大庭康時が担当した。

3．本書に使用した遺構実測図は，大庭・小畑弘己・佐藤一郎・山口満・高波信夫・河邊浩征・馬瀬直子が，遺物実測図は，大庭・小畑・森本朝子・井上涼子・上塘貴代子が作成した。整図には，大庭・井上・上塘・藤村佳公恵があたった。銅銭の銹落しは馬瀬直子・大庭智子が，解読・集計・拓本は大庭智子があたった。

なお，遺構実測図中の方位は，すべて磁北を用いている。

また，遺物実測図中の遺物番号は，各遺構ごとに通し番号とした。

4．本書に使用した遺構写真は，大庭・小畑が，遺物写真は大庭が撮影し，萩尾朱美が焼付した。

5．本調査に関わる記録類・遺物の整理には，生垣綾子・井上涼子・今井民代・上塘貴代子・瀬戸満寿江・萩尾朱美・古谷宏子・保利みや子・森寿恵・入江規子・江上由喜子・野田真巨・長谷川浩美・桝屋育子・森純子・菊地智恵があたった。

6．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は，福岡市埋蔵文化財センターにおいて，収蔵管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	8963		遺跡略号	ＨＫＴ－６２	
調査地地番	博多区御供所224他		分布地図番号	49－Ａ－1	
開発面積	2,560㎡	調査対象面積	2,257㎡	調査実施面積	2,257㎡
調査期間	1989年12月18日～1991年３月１日				

本 文 目 次

第一章 はじめに …… 1
1．調査にいたる経過 …… 1
2．発掘調査の組織と構成 …… 1
3．調査地点の立地 …… 2
第二章 発掘調査の記録 …… 3
1．発掘調査の経過 …… 3
2．調査地点の地形と層序 …… 4
3．遺構検出面の概要 …… 5
（1） 第1面…… 5　（2） 第2面…… 5　（3） 第3面…… 10
（4） 第4面…… 11　（5） 第5面…… 16
4．弥生時代の遺構 …… 17
（1） 竪穴住居跡 …… 17
5500・5501号遺構……17　5506号遺構…… 17　5565号遺構…… 17
（2） 土坑 …… 18
1725号遺構…… 18　5562号遺構…… 19　5619号遺構…… 20
5621号遺構…… 20　2766号遺構…… 21
5．古墳時代の遺構・遺物 …… 21
（1） 埋葬遺構 …… 21
2741号遺構…… 21　5630号遺構…… 23　方形周溝墓…… 23
6．古代の遺構・遺物 …… 31
（1） 竪穴住居跡 …… 31
2790号遺構…… 31　2799号遺構…… 32　5784号遺構…… 33
（2） 井 戸 …… 34
2535号遺構…… 34　2775号遺構…… 35　5555号遺構…… 36
5869号遺構…… 37　5887号遺構…… 38
（3） 埋葬遺構 …… 39
5475号遺構…… 39　5476号遺構…… 40　5508号遺構…… 40
7．中世の遺構・遺物 …… 43
（1） 道路遺構 …… 43
第1面道路…… 43　第2面道路…… 43　第3面道路…… 43
（2） 溝状遺構 …… 44
1853号遺構…… 44　1854号遺構…… 46　1902号遺構…… 51
1860号遺構…… 55　3584号遺構…… 57
（3） 建物遺構 …… 65
粘土床遺構…… 65　3846号遺構…… 66　4139号遺構…… 66
（4） 方形竪穴遺構 …… 68
1611号遺構…… 68　1899号遺構…… 68　1932号遺構…… 69
1969号遺構…… 70　1970号遺構…… 70　2745号遺構…… 71
2746号遺構…… 72　5571号遺構…… 72

（5） 井 戸 …… 74
295号遺構…… 74　476号遺構…… 74　1174号遺構…… 77
1579号遺構…… 78　2342号遺構…… 78　2771号遺構…… 81
2978号遺構…… 81　4716号遺構…… 82　4768号遺構…… 84
5248号遺構…… 85　5296号遺構…… 86　5424号遺構…… 87
5477号遺構…… 88　5492号遺構…… 89　5520号遺構…… 89
5521号遺構…… 91　5524号遺構…… 92　5526号遺構…… 93
5527号遺構…… 94　5529号遺構…… 94　5532号遺構…… 96
5533号遺構…… 98　5542号遺構…… 98　5543号遺構……102
5634号遺構……103　5653号遺構……104　5858号遺構……105
（6） 土坑……106
011号遺構……106　012号遺構……111　026号遺構……114
027号遺構……115　029号遺構……118　054号遺構……119
325号遺構……123　369号遺構……123　419号遺構……125
421号遺構……127　561号遺構……129　633号遺構……129
676号遺構……129　710号遺構……130　713号遺構……131
777号遺構……134　795号遺構……136　838号遺構……136
1267号遺構……139　1712号遺構……140　3515号遺構……153
3517号遺構……156　3522号遺構……157　3567号遺構……159
3656号遺構……159　3677号遺構……167　3678号遺構……179
3749号遺構……180　3928号遺構……186　3955号遺構……187
4221号遺構……189　4342号遺構……189　4506号遺構……193
4653号遺構……194　4735号遺構……198　5103号遺構……198
5648号遺構……198
（7） 埋葬・埋葬関連遺構……201
731号遺構……201　1015号遺構……202　1016号遺構……202
1576号遺構……203　1716号遺構……203　1912号遺構……204
1913号遺構……204　1914号遺構……204　2204号遺構……205
5438号遺構……205　5684号遺構……206
（8） 鋳造関連遺構……207
2203号遺構……207
8．近世の遺構・遺物……210
（1） 井戸……210
3502号遺構……210
（2） 土坑……214
2876号遺構……214
9．その他の出土遺物…… 215
10．銅 銭…… 229
第三章 まとめ…… 235
付篇1．博多遺跡群第62次調査で出土した無釉壷破片に付着した
緑色ガラスの化学分析値と鉛同位体比　山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志…… 239
2．博多遺跡群第62次調査出土の古代・中世人骨　中橋孝博…… 245

第一章　はじめに

1．発掘調査にいたるまで

昭和63年（1988年）10月，東洋開発株式会社より，福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して，福岡市博多区御供所町224他について，ホテル建設にかかわる埋蔵文化財開発事前調査願が出された。

申請地は，中世都市「博多」の遺跡である博多遺跡群の範囲内に含まれていた。また，同社による買収前までは，第二次世界大戦の空襲からも焼け残った町家が，近世以来の家並みを伝えている，博多でも残り少ない地域のひとつであった。そのため，既存構築物による地下の攪乱は少ない筈で，遺構の良好な遺存が予想された。

そこで，埋蔵文化財課では同年11月14日，当時民間開発関係の事前調査窓口を担当していた常松幹雄が立会い試掘調査を実施，現地表下150cmから290cmの間に，4面以上の文化層の遺存を確認した。

これを受けた埋蔵文化財課では，発掘調査が不可欠であると判断し，東洋開発株式会社と協議に入り，平成元年（1989）12月18日より調査に着手することで合意を見た。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託	東洋開発株式会社	代表取締役	生野崎哲哉
調査受託	福岡市	福岡市長	桑原敬一
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	佐藤善郎
調査総括	同	埋蔵文化財課課長	折尾　学
		同　第2係長	柳沢一男　塩屋勝利（前任）山崎純男
調査庶務		同　第1係長	飛高憲雄（前任）横山邦継
		第1係	松延好文（前任）吉田麻由美
調査担当		同　第2係	大庭康時　小畑弘己
調査指導	佐伯弘次（歴史学・福岡大学，現九州大学）　中橋孝博（人類学　九州大学）		
	磯望（自然地理学　西南学院大学）　下山正一（地質学　九州大学）		
	中山光夫（冶金学　新日本製鉄）　山崎一雄（金属学　名古屋大学名誉教授）		
調査作業	山口満（調査補助）　河邊浩征（静岡大学）　水町裕　前川修一（以上福岡大学）　井上肇　岩隈史郎　内野弘行　大瀬良省吾　小川太一　片上隆志		
	金澤春雄　金子國雄　熊本交伸　熊本義徳　久木田理　近藤誠一　権藤利雄		
	権藤義之助　四ヶ所道彦　篠崎伝三郎　島田昌彦　下川航也　関義種　高浪信夫		
	留沢正幸　中川敏男　船越賢一　森垣隆視　森山恭助　山崎光一　山本旭		
	脇田栄　馬瀬直子　江越初代　大橋春江　近藤澄江　関加代子　曽根崎昭子		
	津川真千代　中山峰子　濱地フサエ　平本つた江　村崎祐子　村田敬子		
	森山タツエ　柳瀬伸　山崎富子　吉住シヅエ		

この他，発掘調査・資料整理に関わる様々な条件整備・便宜については，東洋開発株式会社・大成建設株式会社を始め，多くの方々の御協力をいただいた。記して謝する次第である。

3．調査地点の立地

博多遺跡群をめぐる歴史的な環境については，本報告書では，紙数の関係から割愛せざるを得ない。これについては，博多遺跡群の他の報告書を参照していただきたい。

ここでは，第62次調査地点に関する点に限って，その地理的条件と歴史的経過について記す。

博多遺跡群は，御笠川と那珂川の河口部に挟まれた博多湾岸に位置する。基盤は，博多湾に沿って形成された３列の砂丘である。内陸側の２列を「博多浜」，海側の列を「息浜」と呼ぶ。これらの砂丘は，縄文海進後の海退によって，出現したもので，「博多浜」では早くも弥生時代中期から集落が営まれていた。そして，平安時代末期には，中国人商人である博多綱首が多数住み着き，中国・朝鮮との貿易で繁栄した。この当時，「息浜」は，まだ海から頭を出しかけた程度の砂丘で，「博多浜」の海に対する障壁の役割を果たしていたものと考えられる。

鎌倉時代初め，宋から帰国した栄西によって，聖福寺が建てられた。これには，博多綱首張国安が関わっていたと考えられている。仁治二年（1241）には，やはり宋から帰国した円爾弁円を迎えて博多綱首謝国明が承天寺を建立した。この二寺は，「博多浜」の東部に現存しており，中世・近世を通じて大きくその場所を変えていないと考えられる。「博多浜」の西部には，1230年頃までには櫛田神社が勧請されていた。これら大寺社やそれをささえた博多綱首たちのもとで，「博多浜」は繁栄を誇るのである。

第62次調査地点は，聖福寺の現在の境内の前面にあたる。また，これまでの発掘調査で確認された博多のメインストリートは，第62次調査地点と聖福寺との間を通っている。さらに，この付近は旧地名を「奥堂」と言い，室町時代に筥崎八幡宮の油座神人で貿易商人でもあった奥堂氏の屋敷があった所とも考えられている。

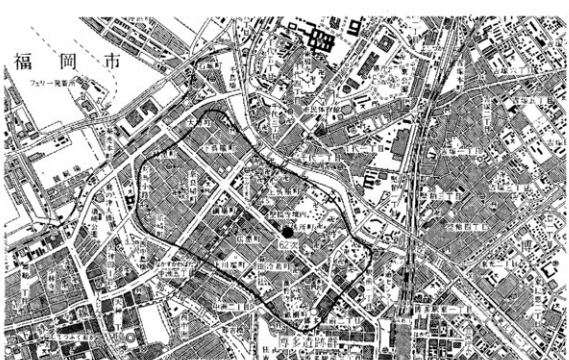


Fig.1　博多遺跡群位置図（1／25000）

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の経過

1989年12月18日，福岡市南区の野多目A遺跡第３次調査現場より発掘調査器材を搬入，発掘調査に着手した。

本調査については，事前協議の中で，残土搬出費用の削減という観点から，調査区を二分し，一方の残土を搬出して調査を終え，もう一方の残土は，この調査済の部分に置くという事で合意が成立していた。また，調査区の南に隣接する土地についても買収交渉中であり，売買契約成立後，調査区に組み込んでほしい旨，申し入れがあり，これを受け入れていた。

この経緯をうけて，鋼矢板で調査区を二分した北東半分をA区，南西半分をB区，さらに買収後調査対象となったB区南の隣接地をC区とし，まずA区の調査に着手した。

以下，調査日誌から，調査の経過を抜粋し，略述する。

1989年12月23日　業者による表土除去（現地表下1.5m）を後の受け，バックホーを導入し，A区内の撹乱物を除きながら，第１面まで掘り下げる（～28日まで）。

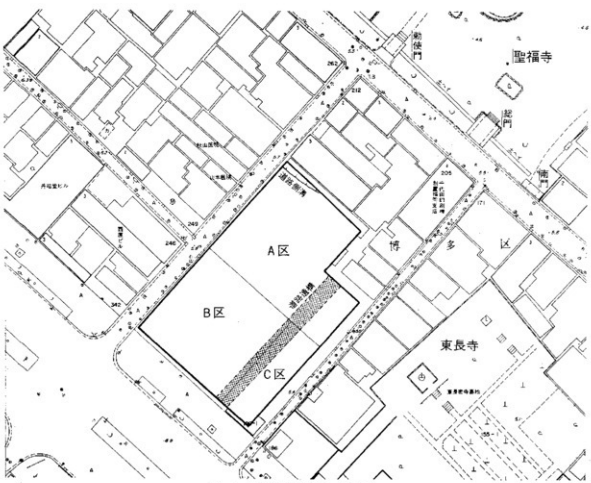


Fig. 2　調査地点周辺（1／1000）

1990年1月8日	A区第1面遺構検出にとりかかる。以降，第1面調査（～3月5日）
1月17日	近くの博多遺跡群第56次調査現場より，レベル移動。
	調査区の中心軸にあわせて，測量基準線を設定する。
	試掘トレンチをT1とし，これと直交するT2・T3のトレンチを新たに設定。
3月6日	バックホーで，第2面に掘り下げ（～9日）。道路遺構部分については，人力で掘り下げる。以降，A区第2面調査（～4月10日）
4月11日	A区第3面まで掘り下げ（人力，～17日）。以降A区第3面調査（～5月29日）
6月5日	A区第4面に掘り下げ（人力，～20日）。以降A区第4面調査（～7月18日）
8月6日	A区第5面に掘り下げ（バックホー）。以降第5面調査（～8月16日）
8月17日	業者により，打って返し（～20日）
8月24日	B区にバックホーを入れ，打って返しの後を均しながら，攪乱除去（～9月6日）
	B区第1面遺構検出開始。以降B区第1面調査（～10月7日）
9月7日	隣地（C区）の買収決定。
9月23日	C区の事前工事（鋼矢板打ち込み等）開始
10月8日	B区第2面に掘り下げ（バックホー，～9日）。以降B区第2面調査（～12月6日）
10月10日	C区，業者により表土掘削（～10月13日）
10月19日	C区第1面検出（バックホー，～20日）。C区第1面調査（11月8日）
11月9日	C区第2面に掘り下げ（バックホー，12日）。C区第2面調査（～12月6日）。
12月7日	バックホーで，B区C区あわせて第3面に掘り下げ（～10日）。
	B～C区第3面調査（～1991年1月11日）
1991年1月12日	B区第4面まで掘り下げ（バックホー，一部人力，～23日）。
	B区第4面調査（～2月13日）
1月22日	調査担当に，福岡市教育委員会埋蔵文化財課，小畑弘己が加わる。
2月14日	C区第4面をほり下げ（バックホー）。C区第4面調査（～2月27日）
3月1日	調査器材撤収。調査終了。

2．調査地点の地形と層序

博多浜を形成する二列の砂丘は，その東側で接合し，両砂丘の間は南西方向に開口した谷状地形となる。第62次調査地点は，この接合部分近くにあたる。

発掘調査の結果，J－P－31グリッドからO－P－8グリッドにかけて，地山砂丘の落ちこみがあることが明らかになった。この部分に関しては，調査終了時にバックホーでトレンチを入れて観察したが，落ちこみは，8グリッド側で浅く，31グリッド方向に深くなっていく。一緒にトレンチの土層を見ていただいた西南学院大学磯望教授によると，堆積した砂の粒度，方向などから，北東方向から南西方向に流れた川の跡とのことであった。この流路は，B区にもうけたトレンチの下部から，丹塗り磨研の弥生時代中期土器が出土したことから，弥生時代にはすでに埋没が始まっており，A区では落ちの下（第5面）から奈良時代～平安時代初めの遺構が検出されたこと，A区第4面上において平安時代後期（11世紀後半頃）の遺構が調査されたことから，平安時代半ば頃までは凹みが残っていたと考えられる。後述する古墳時代初めの方形周溝墓は，この落ち込みをその南東辺に利用した遺地をしている。

砂丘の上部には，厚さ約30cmで暗褐色砂が堆積，その上は，暗褐色～黒褐色のしまりの悪い壌土が堆積している。これは，若干質や色調をかえつつも，現地表下まで続く生活層である。この間に，整地層や焼土層が入り，生活面の存在を示すが，堆積の複雑さと遺構の多さから，鍵層とはなりえない。この生活層中に，平安時代末から現代までの，都市「博多」の遺構，遺物が蔵されている。

3．遺構検出面の概要

（1）第1面

標高4.3～4.5mで設定した遺構検出面である。14世紀前半から近世までの遺構が検出されている。

調査区北角，A－1～C－1グリッドにかけて，斜めに小さい溝が走る。周辺のこれまでの調査例から，中世博多のメインストリートの側溝と考えられる。すなわち，この小溝から調査区外にかけて，中世の基幹道路が通っていたのである。また，O～Q－8グリッドから、N～P－31グリッドに向って，道路がみつかった。2列の断続する溝に挟まれた道路だが，残念ながら路面は表土掘削時にとばしてしまった。しかし，第2面・第3面でも同じ位置に道路が検出されており，2列の溝を道路側溝とみなすことを是としている。

この支線道路に沿って，数棟の掘立柱建物を復元することができる。それに対し，A区の支線道路北西側には，道路に添った掘立柱建物の並びは認められない。基幹道路沿いでも建物遺構は見当らず，むしろ大きな屋敷地の中の空間地部分を思わせる。

第1面の年代としては，14世紀前半があてられる。

（2）第2面

標高3.9～4.1mで設定した遺構検出面である。

A－1～G－1グリッドにかけて，基幹道路の

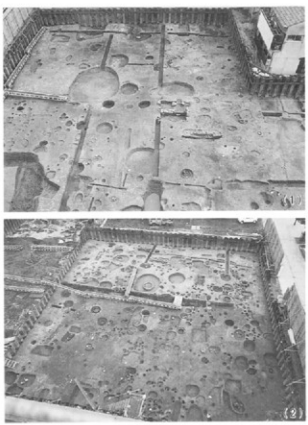


Fig. 3　第1面（1）A区（南西より）、（2）B区（北西より）

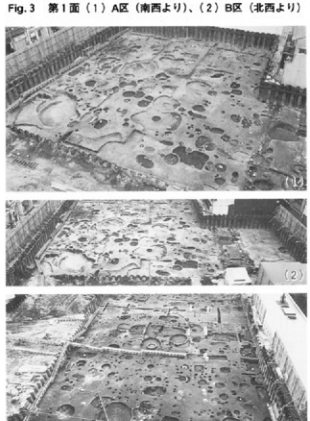
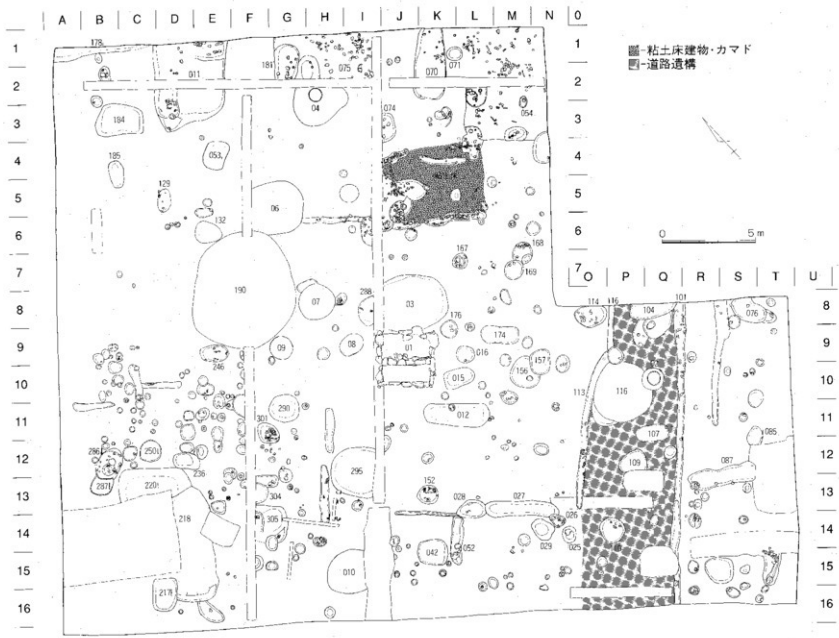


Fig. 4　第2面（1）・（2）A区南西より、（3）B・C区（北西より）


A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16
粘土床建物・カマド
道路遺構
0 5m

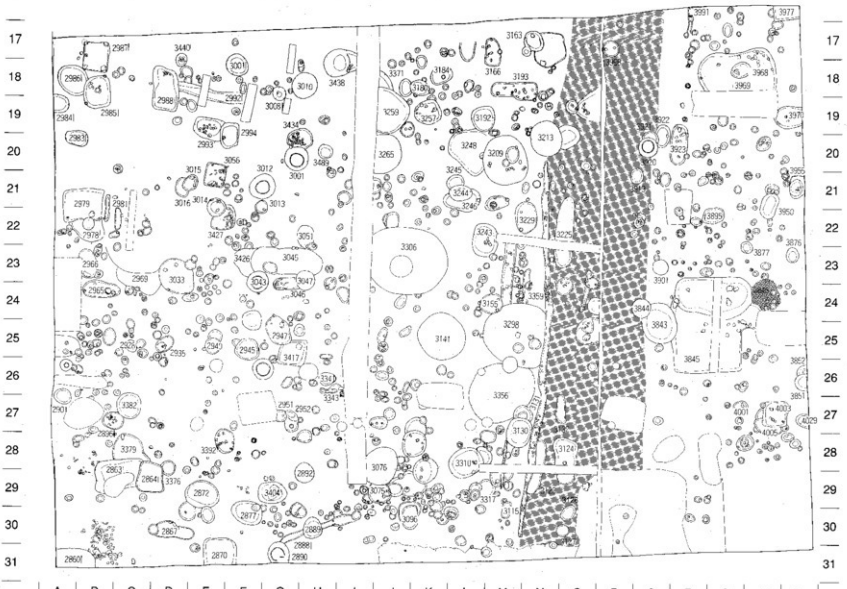


Fig. 5　第1面遺構全体図（1／200）

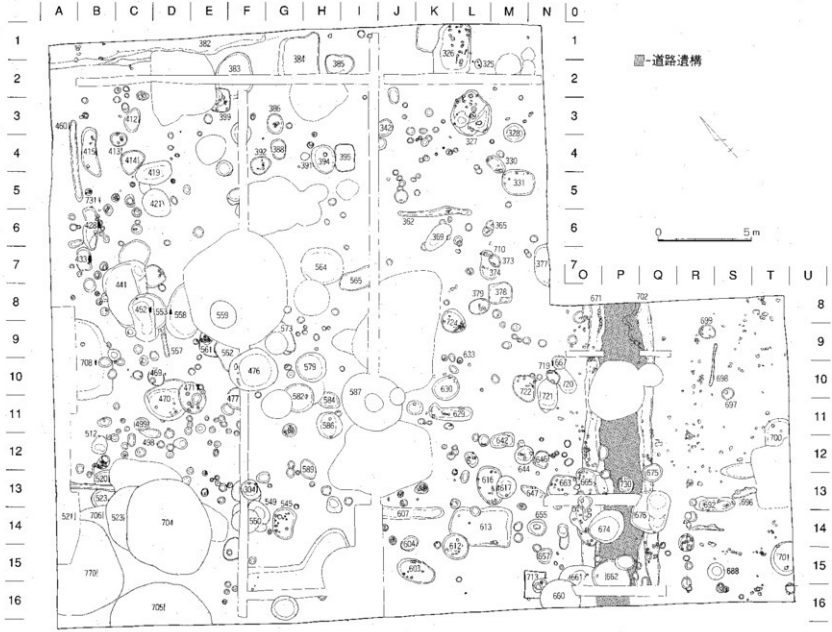

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16
道-道路遺構
0 5m

Fig. 6　第 2 面遺構全体図（1／200）

西側側溝が，かかっている。O～Q－８グリッドからO～P－25グリッドにかけて，支線道路が検出された。幅２m強の路面の両側に側溝を伴うものだが，道路北側の側溝はB区では検出できなかった。

支線道路南側には，第１面同様に数棟の建物跡が想定できるが，A区ではほとんど柱穴が検出されず，礎石が散布していたのみであった。C区側と何か質的な違いが感じられる。支線道路北側では，特にA区において道路方向に規制されない方向を指す建物がある様である。また，B区においては，支線道路に平行して，幅２m程度の溝が走っている。溝の先端は，L～M－21区付近で明瞭に立ち上って終る。溝の道路側と反対側とで遺構を一見しただけでは，差が認められず，溝の性格は不明である。

調査区の西側では13世紀初め頃の遺構が検出されたにも拘らず，東側では13世紀後半の遺構が多く，支線道路も13世紀後半を遡らないと思われる。生活面が，西が高く東で低い傾きをもっていたと考えざるを得ない。

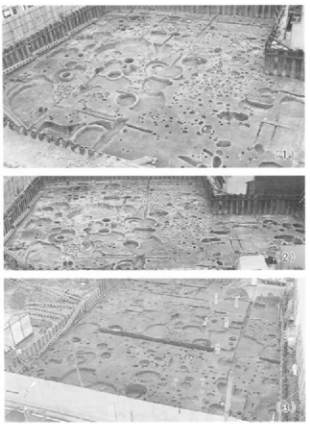


Fig. 7　第３面（１）・（２）A区（南西より）
（３）B・C区（北西より）

（３）第３面

標高3.7～3.8mで設定した遺構検出面である。

C～G－１グリッドに，基幹道路の西側側溝がかかっている。支線道路は，O～Q－８グリッドからO～Q－25グリッドにかけて検出された。側溝は，A区の東側寄りで認められたのみで，A区の西側・B区・C区では検出されなかった。路面である硬化面は，B・C区では確認することはできたが遺存状態が断片的で悪く，A区東側では良好であった。道路自体が本来西で高く東に低かったものと考えられる。支線道路の南側では，特にA区において柱穴が少なく，深い円形の廃棄坑が多い。B区では，まばらではあるが柱穴がみられ，建物が在存してたことを示している。これに対し，A区の支線道路北側では，支線道路に直交する方向で，小溝が平行している。これらの小溝は，素掘りで深さも浅く，延長が短いなど，排水を意図したものとは考えられず，

Fig. 8　第４面（１）A区（南西より）、（２）B区（北西より）

区画溝とみるべきだろう。支線道路に取り付く小溝は検出されなかったが，支線道路に直交する地割りが取られていたものと考えたい。

12世紀後半から13世紀中頃までの遺構が検出されている。第２面同様に，生活面が傾斜していたものと考える。

（４）第４面

標高2.1～3.5mで設定した遺構検出面である。基本的には砂丘上面である淡黄色砂を基盤とするが，前節で述べた様に，調査区のほぼ中央を東から西に旧河川が貫流していた名残りがあり，この部分には，比較的しまった灰色砂が分布していた。A区では，第４面終了後この部分だけを掘り下げて第５面として調査したが，B・C区では時間の関係もあって，バックホーで灰色砂を若干除去したところで第４面とした。B・C区では，トレンチでの観察の結果，第４面に設定した灰色砂中位以下では，遺構が営まれていないことを確認している。

A－１～４グリッドからN－１グリッドにかけて，大小の溝が重複して検出された。12世紀後半から13世紀前半にかけて，相ついで掘られたこれらの溝は，博多遺跡群第35次調査において，基幹道路の下から検出された数条の溝につながるものである。上端で２mを超えるこれらの溝を道路側溝とみるのには無理があろう。しかし，第35次調査検出の溝とあわせて考えれば，基幹道路の直下に，これと方向を同じくして溝が存在していたということは，決して偶然ではあり得ず，当時の町場を区画する機能を持っていた筈である。

ところで，A区第４面では，上の溝に切られ，これと方向を異にする溝も検出された。1922号遺構，1923号遺構がそれで，1922号遺構は11世紀後半に位置付けられる。さらに間が少し飛ぶが，1922号遺構とおおむね直交する方位を指すB区の5468号遺構，これと交差する5474号遺構も同じ11世紀後半代の溝である。これらの11世紀後半の溝を一連のものも見ると，そこに12世紀後半以後の方向性とは全く異なる区画を見出すことができる。

第４面では，A区に集中して，方形竪穴状遺構が検出された。おそらく半地下式の倉庫であろう。また，A区のR－12グリッドから銅の溶解炉を検出した。崩した状態で遺っていたが，残念ながら鋳型・羽口などは伴わなかった。

古代の遺構では，A区B～C－５～６グリッドからは８世紀の井戸（2535号遺構），B区R～T－19～20グリッドでは９世紀の竪穴住居址，H～I－31グリッドでは９世紀末の木棺墓が検出された。A区第５面の８～９世紀の遺構とあわせて，古代前半の集落の一部と考えられる。

さらに遡って，古墳時代では，方形周溝墓が検出された。B区のちょうど北半分にすっぽりと収まった形でみつかった方形周溝墓は，上述した旧河川の浅い谷の肩部を利用したもので，南から見ると実際以上に高く盛り上ってみえる。４世紀初頭頃に位置付けられる。さらに，周溝の外側東裾からは，２基の甕棺墓がみつかった。2741号遺構・5630号遺構がそれで，方形周溝墓と同時期に属する。方形周溝墓に伴なう墓と考えることができる。

この他，弥生時代の竪穴住居址？，土坑などが検出された。竪穴住居址？としたものは，明らかに掘り込みはあるのだが，そのプランが確定できず，したがって掘り終えた形状にも若干の不安があり，竪穴住居址と断言する自信を持てないものである。土坑は，丹塗り磨研土器が出土しており，祭祀的なものと思われる。A区E－12グリッドからは，石鏃了製作時の剥片が集中して出土した。土坑を掘った形跡はなく，そこで原石を粗割りしたものと考えられる（2766号遺構）。

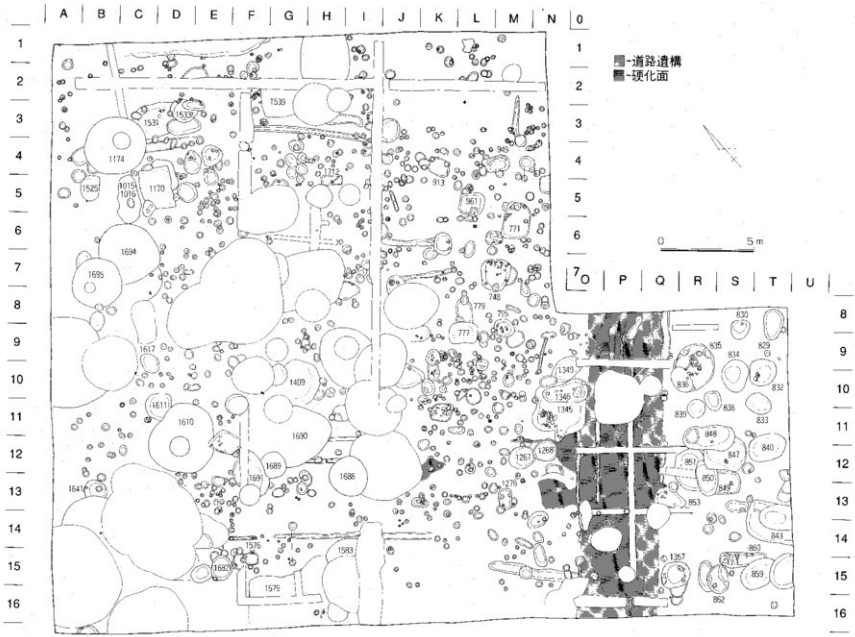
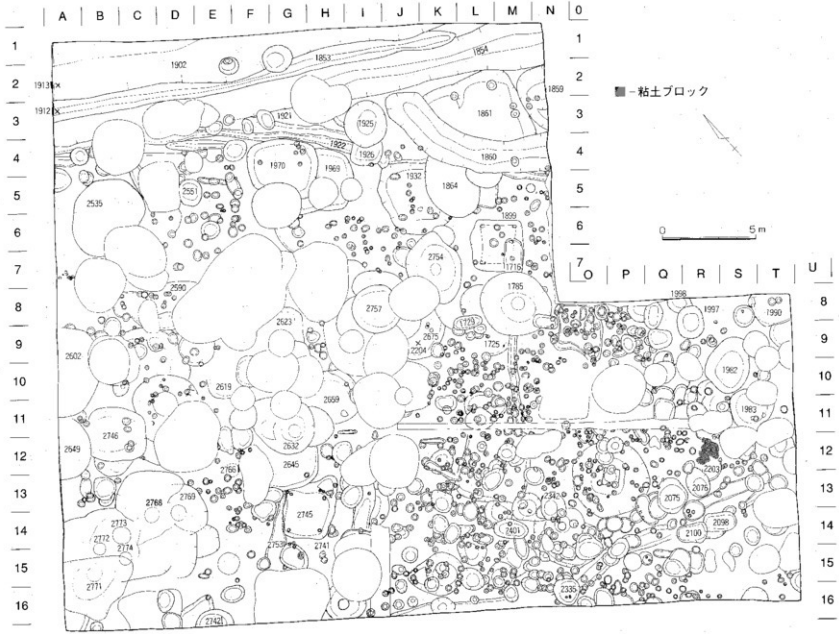

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16
道路遺構
硬化面
0 5m

Fig. 9　第 3 面遺構全体図（1／200）


A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16
■－粘土ブロック
0 5m

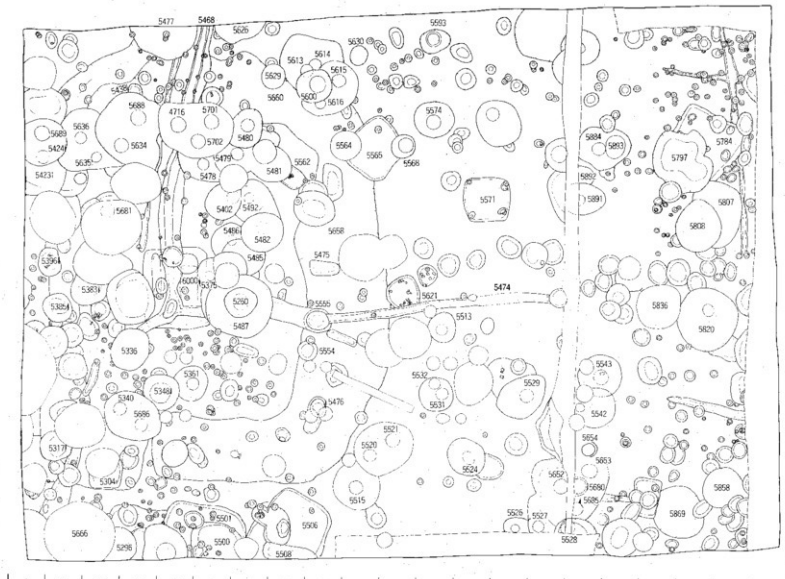


Fig.10　第４面遺構全体図（１／200）

第4面では，弥生時代から13世紀初めまでの遺構を検出した。

Fig.11　第5面（南東より）

（5）第5面

前項で述べた様に，A区第4面上で灰色砂が堆積していた，旧河川の流路部分を掘り下げて設定した，遺構検出面である。標高2.7～2.9mをはかる。

8世紀から9世紀にかかる竪穴住居跡，井戸・土坑，11世紀後半の井戸などを検出した。灰色砂を完全に除去した砂丘砂上面での検出であり，竪穴住居址の壁の遺存状態（数cm程度）から見て，灰色砂埋土中より掘り込まれた遺構であることは，明らかだろう。すなわち，旧流路の凹みの堆積過程において営まれた遺構ということになろう。

なお、第5面の南を斜めに走る溝（2777号遺構）は，第4面の2092号遺構（溝）につながるもので，単一の溝と思われる。遺物の出土は少ないが，8世紀代の溝と考えられる。

第5面の年代は，8世紀から9世紀前半である。

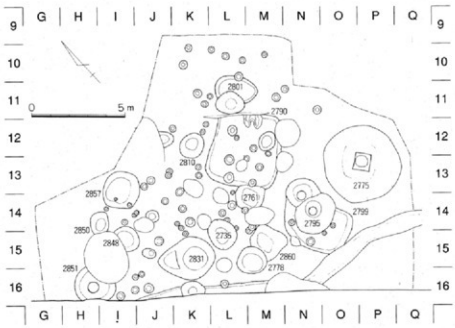


Fig.12　第5面遺構全体図（1／200）

4．弥生時代の遺構・遺物

（1）竪穴住居跡

5500号遺構・5501号遺構（Fig.10，17）

B区第4面E～G－30～31グリッドから検出した。5501号遺構は，東辺で4.4mをはかり，隅丸方形を呈すると思われるが，西側が調査区外となるため，全形は知りえない。5500号遺構は，5501号遺構の床面から一段落ちた部分で，5501号遺構の南半分を占める。プランがはっきりしないが，楕円形となる様で，5501号遺構の屋内の土坑なのかどうか，判断はできなかった。

5501号遺構から，弥生時代後期前半の甕の破片が出土している。

5506号遺構（Fig.10，13）

B区第4面G－I－28～31グリッドから検出した。短辺3.3m，長辺3.6m以上の隅丸長方形になると推定する。

Fig.13に出土遺物を示す。全て弥生式土器の甕である。器壁の調整は，刷毛目調整による。

弥生時代後期前半に位置付けることができる。

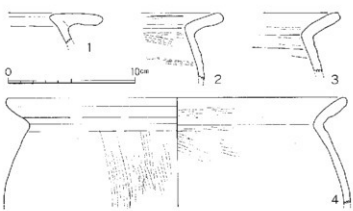


Fig.13　5506号遺構遺物実測図（1／3）

5565遺構（Fig.10，14～15・18）

B区第4面J～K－19～21より検出した。北辺3.0m，東辺2.2m，南辺2.2m，西辺2.5mの隅丸方形を呈する。床面は，北・東・南の三方を幅約32～40cm程残して，一段掘り下げた二段掘り状に作る。

床面に，主柱穴は認められない。

床面中央と，西壁際から，土器が出土した。**Fig.15に出土遺物**を示す。1は無頸壺である。外面はナデ・内面の上半は横ナデで下半は刷毛目を施す。底部は，やや下にふくらんだ平面となる。完形品である。2は袋状口縁の壺である。口縁部は横ナデ・頸部内面は横刷毛・外面は横刷毛に縦刷毛をかぶせる。3は，壺の底部である。1の底部の作りと似る。4は器台である。脚部中程に，小さな穿孔が1ケ所認められる。5は，壺の胴部である。口縁を欠くが，おそらく袋状口縁が付くものと推定する。

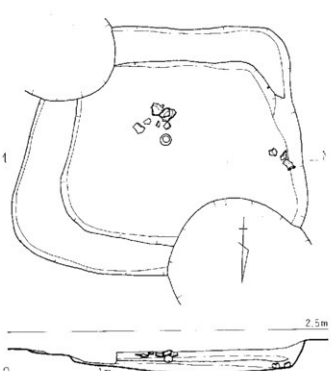


Fig.14　5565号遺構実測図（1／40）

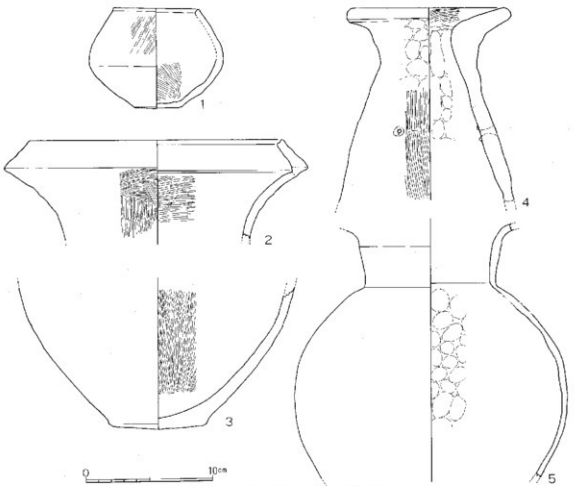


Fig.15　5565号遺構遺物実測図（1／3）

1～3・5は床面中央，4は西壁寄りから出土した。

（2）土坑

1725号遺構（Fig.10，16）

A区第4面L～M－9グリッドで検出した土坑である。井戸・土坑・柱穴・溝の切り合いの激しい地点での検出で，ごく一部を確認したにすぎず，全形は知りえなかった。

出土遺物を，**Fig.16**に示す。1～3は，**弥生式土器**の甕である。1は，体部の先端に，水平に近く粘土帯をかぶせて口縁をつくる。口縁帯は，内側にも突出し，T字がかった逆L字形を呈する。内面はナデ調整，外面は縦の刷毛目調整を施す。

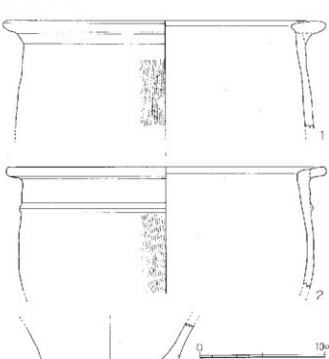


Fig.16　1725号遺構遺物実測図（1／3）

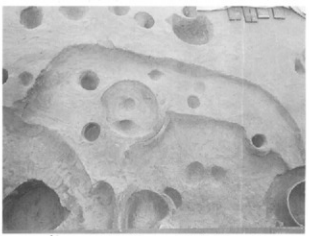


Fig.17　5505号遺構・5501号遺構（南西より）

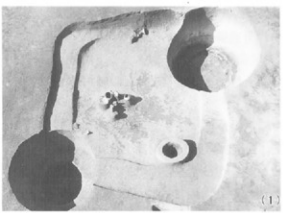


Fig.18　5565号遺構（1）全景（東より）
（2）土器出土状況（北東より）

2は，体部先端に外側から粘土帯を貼り付け，逆L字状の口縁を作る。内面はナデ調整・外面は縦の刷毛目調整を行なう。口縁部下に，断面三角形の突帯を一条巡らせる。3は，底部である。器表はあれており，調整痕は見えない。若干外側に張った平底に作る。

この他，石斧の未製品が，1点出土している。

5562号遺構（Fig.19・20・23）

B区第4面H－21グリッドで検出した土坑である。5481号遺構に切られ，一部を失なうが，全形を推定する妨げにはならない。推定長径135cm，短径120cmの略楕円形を呈し，検出面からの深さは，約30cmをはかる。

土坑中央の埋土中から，壺の口縁部がつぶれて開いたような形で出土した。Fig.20に示したのが，その壺の口縁部である。鋭い屈曲をもつ袋状口縁につくる。口縁部は横ナデ，頸部内面は横刷毛，体部内面は粗い縦刷毛，頸部から体部外面は縦刷毛で，頸部のつけ根に断面三角突帯を1条巡らせる。

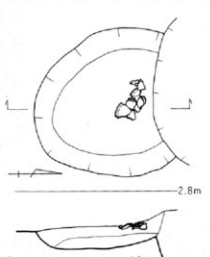


Fig.19　5562号遺構実測図（1／30）

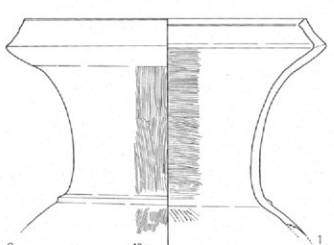


Fig.20　5562号遺構遺物実測図（1／3）

弥生時代後期後半の土坑である。

5619号遺構（Fig.10・21）

B区第4面L−23・24グリッドで検出した土坑である。径110cmの略円形を呈する。

埋土中から，ひさご形土器が出土した。**Fig.21**に示す。胴部上位から頸部にかかろうとする破片で，外面は丹塗りされる。内面には指頭痕をとどめ，外面は密に研磨される。

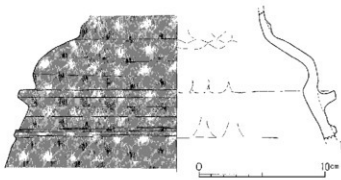


Fig.21　5619号遺構遺物実測図（1／3）

5621号遺構（Fig.10・22・24）

B区第4面K−24グリッドより検出した土坑である。径約160cmの略円形を呈する。検出面からの深さ10〜15cmの浅い土坑で，埋土上位に，土器が散らばっていた。

Fig.22−1は壺である。口縁は外反して直行する。2は鉢である。内弯した体部から，大きく反転して，外反して開く口縁部をつくる。内面は，ナデ調整する。3〜6は，甕である。口縁は，「く」字状に反転して開く。4の口縁は立ち気味で，上方に長くのびる。頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。

弥生時代後期の土坑であろう。

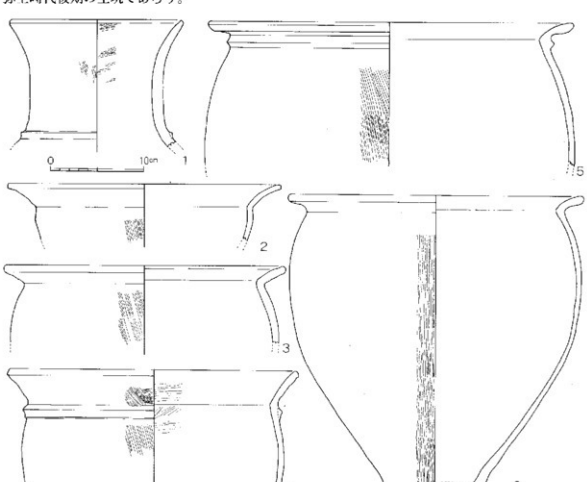


Fig.22　5621号遺構遺物実測図（1／4）

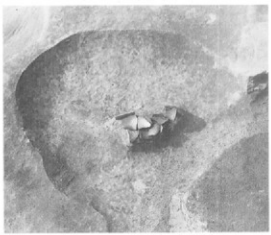


Fig.23　5562号遺構（東より）

Fig.24　5621号遺構（北東より）

2766号遺構（Fig.10・25）

A区第4面E－12グリッドから検出した遺構である。安山岩の剥片が，径80cm程の範囲で，深さ24.5cmにわたって出土したもので，明瞭な掘りかたはなかった。地山の砂丘砂と全く区別がつかない中からの出土なので，特に土坑等に捨てられたものではなく，一定期間ここで粗割りが続けられた結果であると考えたい。剥片の大きさからみて，石庖丁もしくは石鎌の製作に関わるものであろう。

Fig.25　2766号遺構出土剥片

5．古墳時代の遺構・遺物

（1）埋葬遺構

2741号遺構（Fig.26～28）

A区第4面H－15グリッドより検出した甕棺墓である。呑口式で，上甕は口縁を打ち欠いて，下甕にかぶせられていた。

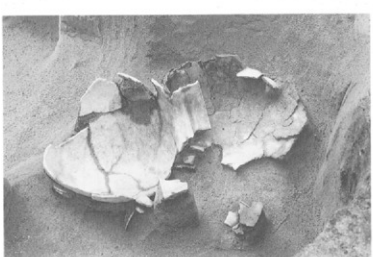


Fig.26　2741号遺構（東より）

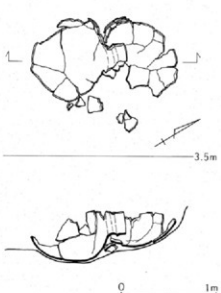


Fig.27　2741号遺構実測図（1／20）

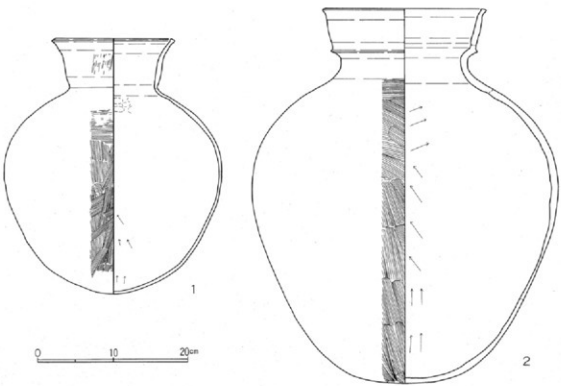


Fig.28　2741号遺構遺物実測図（1／5）

また，甕棺墓の東側付辺から，壺形土器が破片となって出土した。埋葬に際して，割って墓壙内に収めたものか。甕棺は，上半を削られ，失っている。墓壙掘りかたは，明瞭ではない。

Fig.28－1は，墓壙出土の壺形土器である。内面はケズリ，外面は刷毛目で，頸部から口縁部は横ナデする。口径16.5，胴部径29.0，器高29.1cm。2は，甕棺墓の下甕である。内面はケズリ，外面は刷毛目で，頸部から口縁部を横ナデする。口径19.5，胴部径40.6，器高50.1cm。上甕は，口縁を欠き，胴部も全周の2分の

Fig.29　5630号遺構（北より）

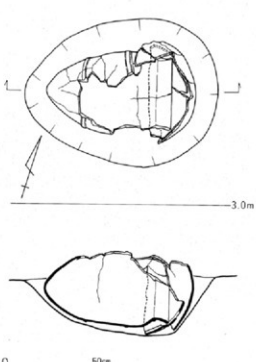


Fig.30　5630号遺構実測図（1／20）

1以下しか残っていないので図化しなかった。下甕とほぼ同形同大と思われる。

古墳時代初頭の甕棺墓であろう。

5630号遺構（Fig.29～31）

B区第4面J－17～18グリッドから検出した甕棺墓である。

単棺であるが，蓋として丸底大型の壺形土器の底部片をあてている。胴部中位から口縁にかけての一部を欠く。

Fig.31に図示したのは，下甕である。やや尖り気味の丸底に作るラグビーボールの様な形の胴部を持ち，頸部はゆるく外反しつつ立ち上り，そのまま口縁部となる。頸部の付け根と肩部のやや下，胴部下位に，それぞれ一条の突帯を貼り付ける。突帯は，低平な台形状の断面形をとる。頸部の突帯を除いて，他の二条には，櫛歯状施文具による沈線が，格子状に施される。中段の突帯では，一箇所だけ右下りと左下りの沈線が重ならず，山形になる部分がある。意識的にしたものと思われる。内外面ともに，ほぼ全面に刷毛目調整を施すが，底部のみ外底でヘラケズリを，内底で指押えを加える。また，口唇部は，横ナデで整形している。口径38.8，胴部径44.5，器高115.5cmをはかる。

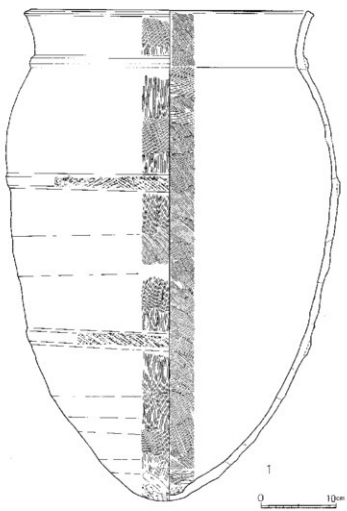


Fig.31　5630号遺構遺物実測図（1／5）

蓋に用いられた壺形土器片は，遺存部分が少なく，実測できなかった。

古墳時代初頭の甕棺墓であろう。

方形周溝墓（5488・5657・5658・5660・5678・6000号遺構，Fig.32～43）

B区第4面A～J－18～29グリッドで検出された方形周溝墓である。ちょうどB区の北西半分を占める大きさとなる。

隅丸長方形を呈し，周溝の外縁で長辺23.2m，短辺15.6m，周溝の内側で長辺16.4m，短辺10.4mをはかる。盛土の有無は確認できなかったが，盛土されていた可能性は考えて良いだろう。

周溝は，ほぼ全周を回むが，南西辺の中央付近で，幅0.2～0.8m程途切れ，この部分は陸橋状となる。周溝の幅は，北東辺でおよそ3.6m前後，南東辺で4.6m前後，南西辺の陸橋南側で3.6m前後，陸橋西側で4.0m前後，北西辺で2.6m前後をはかる。旧地形を勘案するに，南東辺は前述した砂丘の浅い谷状地形に面しており，これとは逆に北西辺は砂丘の盛り上り側となる。周溝の幅に大きなバラつきがあるのは，おそらくこの為であろう。すなわち，方形周溝墓南面の谷地形を利して，実際以上に大

きく見せる効果をねらったもので，谷を隔てた南側から見ることを前提としていると考えられる。その効果をさらに高める為，南から臨んだ際に両側となる北東側と南西側の周溝も，幅広く掘ったものと思われる。実際，Fig.33－（3）に示す様に，盛土を全く失わない、むしろ頂部を削平されていると思われる現在においても，谷状地形を挟んだ南から見ると，結構に盛り上って見えるのである。

周溝内の3ケ所から，祭祀に伴ったと思われる土器が出土した。Fig.32－Aからは，畿内系二重口縁壺が，横向きで出土した（Fig.35－（1）・（2））。単独出土である。Bからも，畿内系二重口縁壺が出土した。これも単独出土であるが，Aが完形品であったのに対し，Bの壺は胴部を打ち割り，さ

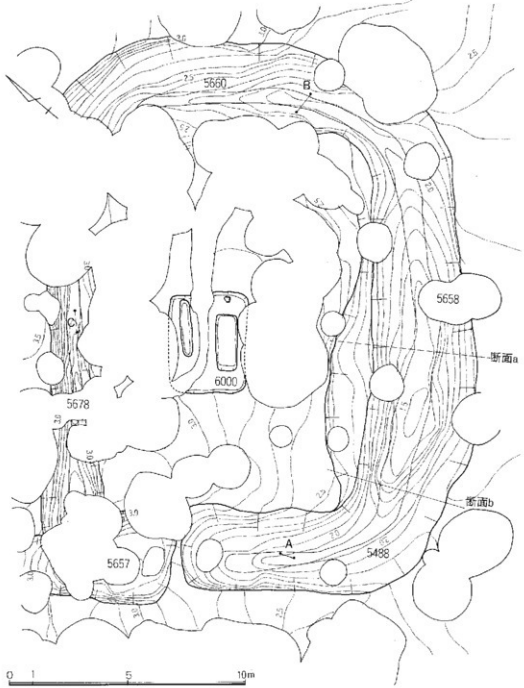


Fig.32　方形周溝墓実測図（1／160）

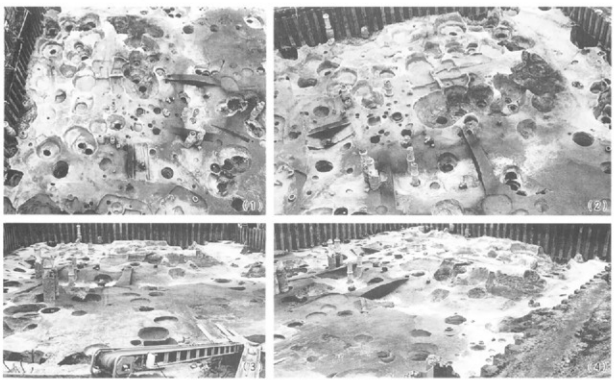


Fig.33　方形周溝墓全景（1）南西より、（2）南より、（3）南東より、（4）東より

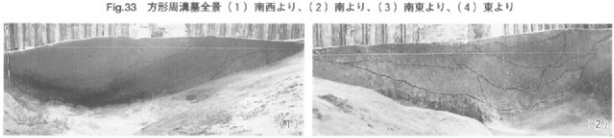


Fig.34　周溝内堆積状況（1）断面a（北東より）、（2）断面b（東より）

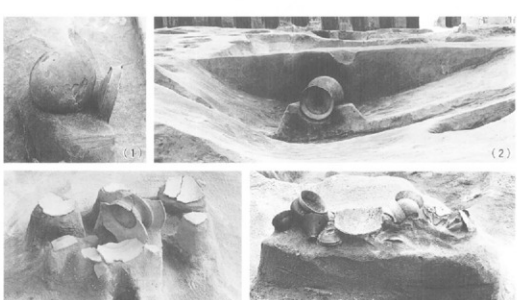


Fig.35　周溝内遺物出土状況（1）A（南西より）、（2）A（南東より）、（3）B（南西より）、4）C（北西より）

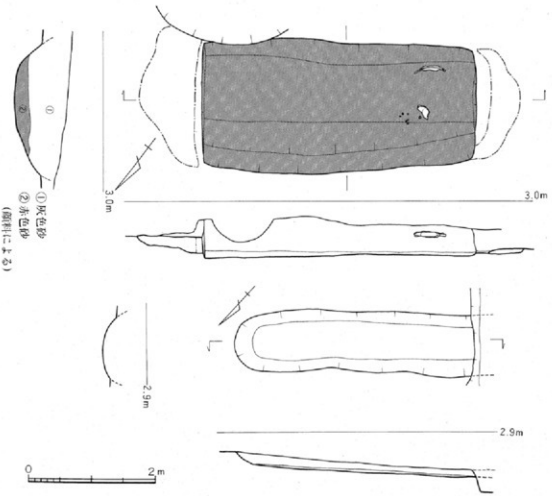


Fig.36　方形周溝墓主体部実測図（1／30）

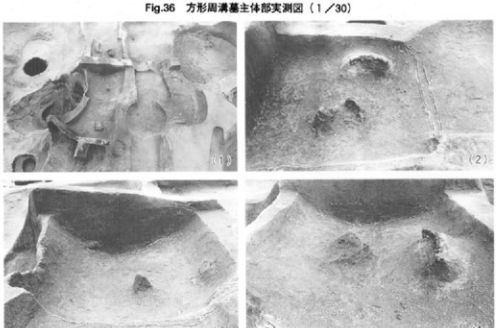


Fig.37　方形周溝墓主体部（1）全景（北東より）、（2）1号主体部人骨・鉄剣出土状況（北西より）、（3）1号主体部断面（北東より）、（4）1号主体部断面，人骨・鉄剣（南西より）

らに口縁の一部も割って，ひとかたまりに置いていた。ただし，この出土状態において，一個体分の破片がすべてそろう訳ではない。一部は，別の所に廃棄されたと考えざるをえない。Cからは，小型丸底壺および器台が一括して出土した。小型丸底壺は6点，器台は1点を数えるが，小形丸底壺2点以外は，すべて破砕されていた。とりわけ，器台はきれいに皿部と脚部の接合部を折っており，これらの破砕も意図的なものと考えられる。A～Cは，いずれも周溝の底から20cm程浮いた埋土中から出土している。これから言えば，周溝墓築造当初の祭祀とは考えがたく，周溝の埋積が一定程度進んだ段階での祭祀を想定しなくてはならない。

主体部は，周溝墓のほぼ中央から検出された。長辺4.4m，短辺3.4mの長方形を呈する掘りかた内に，二基の主体部が平行して並んでいた。

第1主体部は，平行した二基の内，南西のもので，平面的には長方形を呈する。長側は長さ219cm，頭位側の小口（鉄剣及び鋩が出土した側を頭位とした）は87cm，足位側の小口は96cmである。断面は，ゆるく弯曲した，ややいびつなU字型となる。これに対し両小口は，ほとんど直に落ちる。以上の主体部の範囲は，赤色顔料の分布から検出されたものであるが，両小口には，これから若干はなれて，白色の粘土がおかれていた。白色粘土は，特に足位側小口で明瞭だが，赤色顔料から推定された小口の落ちとほぼ平行して，掘りかた内に厚く据えられており，木棺を据えるためのものと考えられる。赤色顔料は木棺内に塗られたものであるから，木棺の内法を示すとすれば，赤色顔料と白色粘土とのすき間は，棺材の厚さを示すということになろう。そこで，粘土と顔料とのすき間をはかると，頭位側で9～12cm，足位側で3～6cmということになる。

なお，木棺は，両小口が直裁され，内面が丸く挟られている点から，割竹型木棺あるいはこれに近い形に作った組合せ式木棺といえる。

第1主体部からは，その南西側で頭蓋骨の一部と，数個の歯が出土した。いずれも遺存状態はきわめて悪かった。また，頭蓋骨の右側（向って左側）には，台形に折り曲げた鉄剣が一振副葬されていた。**Fig.38・39**に示したのが，その**鉄剣**である。屈折を伸ばしたとして，全長28.8cm，刃部長17.4cm，区幅3.3cmをはかる。刃部には明らかに鎬が立ち，断面は扁平な菱形を呈する。区からは，弧を描いて茎につづく。茎は細長く，そのちょうど中程に目釘穴が1孔穿たれている。装具や，布にまかれていた痕跡などは，認められない。

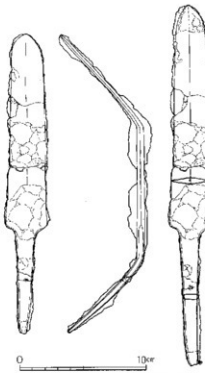


Fig.38　方形周溝墓鉄剣実測図（1／3）

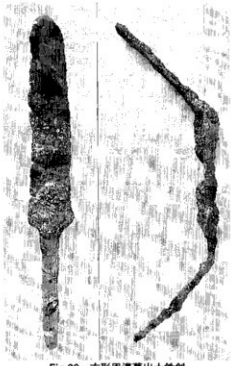


Fig.39　方形周溝墓出土鉄剣

第2主体部は，その南西側を後世の遺構に切られており，全長をうかがえない。第1主体に比べる

とかなり狭長で，棺内には顔料はみられなかった。断面は，第1主体同様に円弧を描くが，小口は丸く，また緩傾斜で立ち上っている。素掘りの埋葬かとも思うが，第1主体の様に小口を粘土でおさえなかった為に木棺小口の痕跡が浅らなかったものとみて，割竹型木棺の可能性を考えたい。なお，第2主体の長さは190cm以上，幅は48cmをはかる。

次に，**周溝内出土遺物**を図示する（Fig.40～30）。**Fig.42－1～7**は，前述した周溝内C地点の出土である。**1～6**は，小型丸底壺である。密にヘラ磨きを施す。**1・5**には底部穿孔がみられる。**7**は器台である。外面は，全面を横位のヘラ磨きする。皿部分の上面は，放射状の暗文を加える。脚部内面は横方向の刷毛目で，接合部近くにはしぼり痕が残る。**8・9**は小型丸底壺・**10**は器台である。**11**は，コップ型土器である。外面は丁寧にヘラ磨きする。器壁が薄く，精品と言える。内面には，ねずみの歯型がみられる。**12～14**は鉢である。**15～16**は甕である。**16**は，口唇の外面の一部に刻みを入れる。**20～25**は，壺である。**20～22**は在地系，**23～25**は畿内系である。**21**は，弥生時代後期の袋状口縁壺である。頸部外面の刷毛目は櫛歯状に施され，さらにその上をヘラ磨きしている。**23**は，前述した周溝内A地点出土の壺である。口縁部と肩の付け根付近に櫛描き波状文を施す。口縁部には，さらに2個を単位とした円形付文を貼り付け，竹管で刺突を加えている。**24**は，小型できわめて作りの良い精品である。頸部および口縁部の内面は，横方向にヘラ磨きされる。体部内面は，板材を用いて，斜め及び横方向に掻き均した様で，目の粗い，くっきりとしたカキ目が認められる。**25**は，周溝内B地点出土

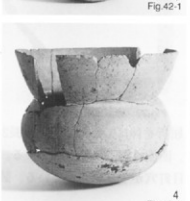
1
Fig.43-23

Fig.40　周溝内出土土器1

1
Fig.42-1

2
Fig.42-2

3
Fig.42-3


4
Fig.42-4

5
Fig.42-5

6
Fig.42-7

Fig.41　周溝内出土土器2

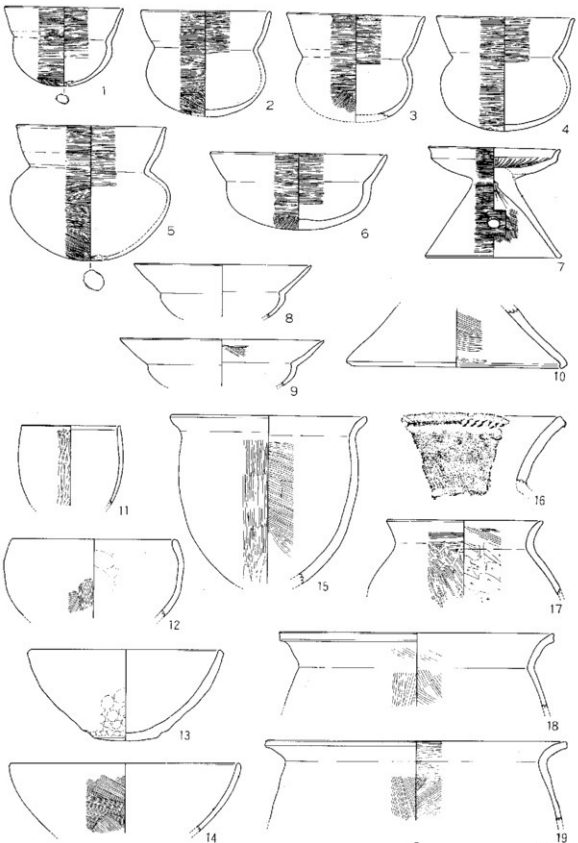


Fig.42　方形周溝墓周溝内遺物実測図1（1／3）

の壺である。鐵内系の二重口縁壺に作るが，胴部はやや丸味が足りず，倒卵形を呈する。あるいは，在地産の模倣土器である可能性も考えられよう。

これらの遺物から，古墳時代初頭の方形周溝墓と考えることができる。

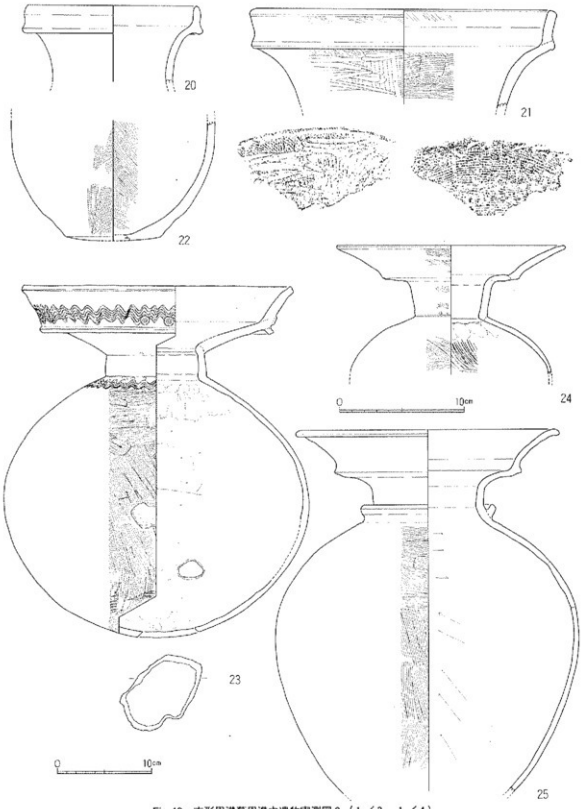


Fig.43　方形周溝墓周溝内遺物実測図２（１／３，１／４）

6．古代の遺構・遺物

（1）竪穴住居跡

2790号遺構

（Fig.44～48）

A区第5面L～M－11～13グリッドで検出した竪穴住居跡である。長辺約4m，短辺約3.5mの隅丸長方形を呈する。

北東壁のほぼ中央に竈がつくられている。竈は白色粘土を用いて作っているが，両袖の一部が残るのみである（**Fig.46・47**）。

床面からは，主柱穴と思われる柱穴が検出され，4本主柱と考えられる。ただし，東角の柱穴は，土坑に切られて飛んでいる可能性もある。

壁溝は，全く認められなかった。

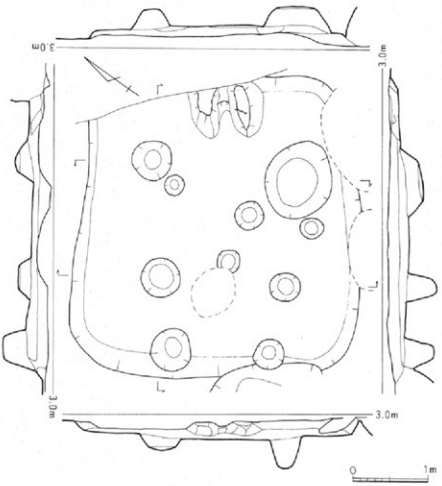


Fig.44　2790号遺構実測図（1／50）

出土遺物を，**Fig.48**に示す。**1・2**は**須恵器**の坏蓋である。ともに器高が低く扁平なつくりで，端部は小さく下方に肥厚させた程度にとどまる。**1**は完形品だが，鉦はついていない。**3～6**は，**土師器**である。**3・4**は坏である。外面は横ナデ調整する。**3**の器壁はあれており，調整が良くわからない。**4**は，内面も横ナデ調整されている。**4**の口縁部は，沈線状にくぼんだ後，若干内傾しておさめる。**5・6**は，甕である。**5**は外面縦刷毛，内面はヘラ削りする。**6**は外面

Fig.45　2790号遺構（南西より）

縦刷毛，内面横刷毛だが，頸部内面は指頭圧痕が並んでいる。この他，竈内から，鉄製刀子が出土している。

須恵器坏蓋の特徴などから，8世紀末頃に位置付けられよう。

Fig.46　2790号遺構竈（南西より）

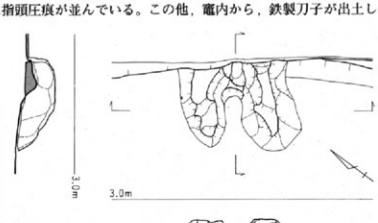


Fig.47　2790号遺構竈実測図（1／30）

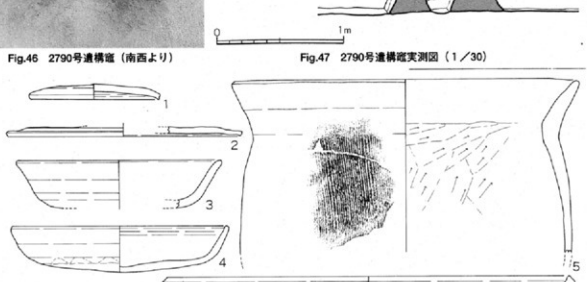


Fig.48　2790号遺構遺物実測図（1／3）

2799号遺構（Fig.49～51）

C区第5面N～O－14～15グリッドから検出した竪穴住居跡である。長辺は推定で3.5m，短辺は2.6mの隅丸長方形を呈する。

床面の半分近くを，2795号遺構（井戸）に切られており，判然としないが，主柱穴に該当する柱穴は見当らない。また，遺存部分においては，竈も確認できない。ただし，竈については，近接する2790号遺構と同じく北東壁に設けたものとすれば，2795号遺構に切られ，なくなっている可能性がある。

出土遺物を，Fig.51に示す。1・2・4は，須恵器である。

Fig.49　2795・2799号遺構（西より）

1・2は坏蓋で，端部をわずかに曲げて，身受けとする。4の外面には，墨書があるが，破片のため知りえない。3・5～7は**土師器**である。3は皿で，内面をヘラ磨きする。5・6は高台付坏である。5は，内外面とも密にヘラ磨きする。7は甕である。外面には，煤が付着する。

9世紀初頭の竪穴住居跡と考えられる。

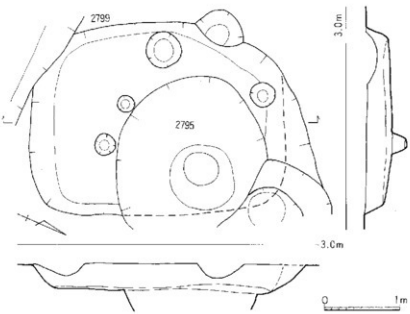


Fig.50　2799号遺構実測図（1／50）

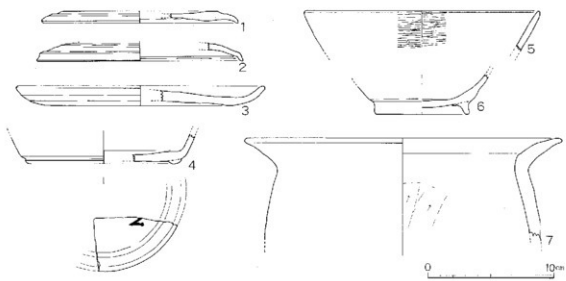


Fig.51　2799号遺構遺物実測図（1／3）

5784号遺構（Fig.52・53）

C区第4面R～T－19－21グリッドより検出した竪穴住居跡である。西壁を5797号遺構に切られて欠くが，おおよその形状は推察できる。長辺は4m前後，短辺は東壁で3.7m，西壁で推定3.2mをはかり，台形がかった長方形を呈する。

床面は3分の2近くを検出したが，主柱穴・竈等確認できなかった。壁溝も設けられていない。**出土遺物**を，Fig.53に図示する。1～6は，**須恵器**である。1は坏蓋で，端部をゆるく折りまげて，下に垂らす。天井部を欠くので，鍔の有無・形状はわからない。2～5は坏である。2は高台付坏で，内外面横ナデ，内底にはさらにナデ調整を加える。高台は，体部と底部との境界から，やや底部側に入った位置に貼りつけられている。断面は低平で，逆台形を呈する。3も高台付坏である。高台は，底部と体部の境界付近に，外方に踏ん張る様な形で貼りつけられている。4は，無高台の坏である。

外底部は回転ヘラ切りする。体部は横ナデし，さらに内底部中央を，ナデ調整する。5は，坏の口縁部である。おそらく，高台付坏の口縁であろう。内外面とも，横ナデ調整する。6は鉢であろうか。内外面とも横ナデ調整する。胎土が精良で，きわめて薄く作られている。7～9は，**土師器**である。7は坏である。口縁端を上方に小さく折りまげる。内外面には，暗文状のヘラ磨きが施される。胎土は比較的良好で，赤茶色を呈する。おそらく，畿内系の土器であろう。8・9は，甕の口縁部である。

この他，土師器の甑の把手が出土している。

以上の遺物から，おおむね9世紀前半代の竪穴住居跡にあてることができよう。

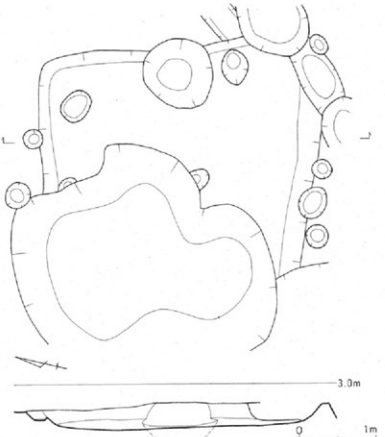


Fig.52　5784号遺構実測図（1／50）

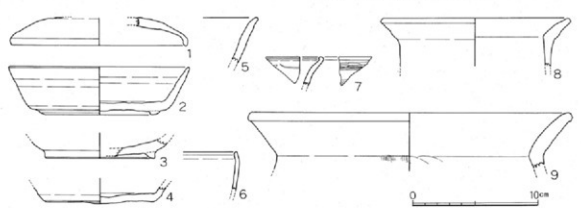


Fig.53　5784号遺構遺物実測図（1／3）

（2）井戸

2535号遺構（Fig.10，54・55）

A区第4面A～C－5～7グリッドから検出した井戸である。湧水にあい，井側を確認することはできなかった。掘りかたは，長径4.4m，短径3.5mの楕円形を呈する。

出土遺物を，Fig.55に図示する。1～5は**須恵器**である。1・2は坏蓋で，端部はわずかに肥厚させる。3・4は高台付坏，5は皿である。6～9は**土師器**で

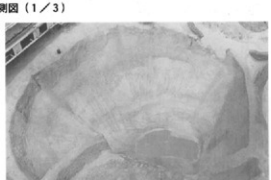


Fig.54　2535号遺構（南より）

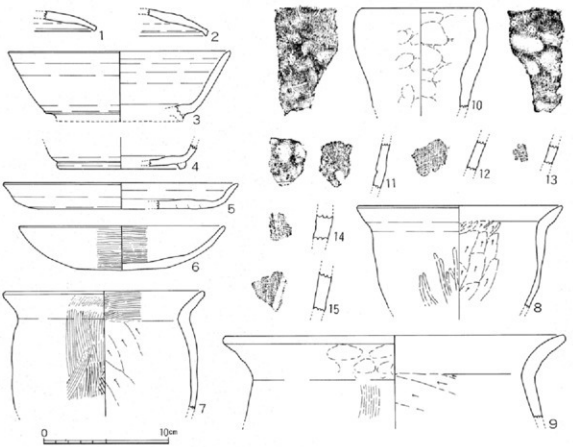


Fig.55　2535号遺構遺物実測図（1／3）

ある。6は皿で，底部はヘラ切りで，体部の内外面には密に横位のヘラ磨きを加える。7～9は甕である。8の体部外面には，あらく縦方向のヘラ磨きが認められる。**10～15は，焼塩壺**である。

2535号遺構は，9世紀初めに位置付けることができよう。

2775号遺構（Fig.12，56・57）

A区第5面O～Q－12～14グリッドより検出した井戸である。径4.2m前後の略円形の掘りかたの中央に，一辺92.5cmの方形に板を組んで井側とする。井側の内側には，径62.5～67.5cm，高さ32.5cmのやや楕円形を呈する曲物を据えて水溜とする。井側と水溜の間に，頸部を欠いた須恵器の壺が置かれていた。

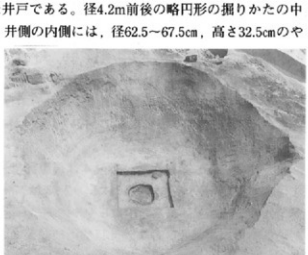


Fig.56　2775号遺構（北西より）

Fig.57－1～4・8は，須恵器である。**1・2**は坏蓋，**3・4**は皿，**8**は壺である。**1～3・8**は，井側と水溜との間から出土した。**5～7は，土師器**である。**5**は全体に浅く開く器形で，鍋とするべきか。外面には煤が付着し，調整痕が見えない。**6・7**は甕である。

8世紀末に位置付けられよう。

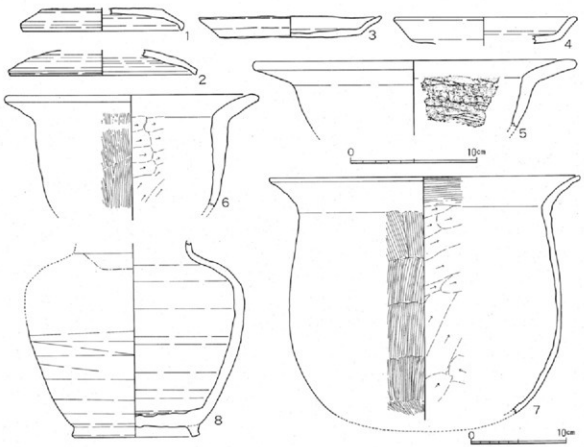


Fig.57　2775号遺構遺物実測図（1／3）

5555号遺構（Fig.58～60）

B区第4面I－25グリッドより検出した井戸である。第4面上で確認しながらも，掘りかたが小さかったために土坑と誤認し，結局方形周溝墓の周溝（5658号遺構）の底で調査することになった。

掘りかたは，第4面上で長径1.5m，短径1.3mの楕円形を呈する。井側は，一辺76cmの方形に板を立てたものであるが，木質の遺存状態が悪く，北西辺の板材しか残っていない。それによると，木目は縦に通っている様で，板材を縦に使って組んだことがわかる。井側の四隅には杭が打たれていた。ただし，南隅の杭は，割板状で，大分と内に入りこんでおり，隅を押えた杭とみるには疑問もある。

水溜は，くり抜き材である。長径76.0，短径66.0cm，深さ24.0cmの楕円形の鉢状を呈しており，底を抜いた木製容器を転用したものと思われる。比較的遺存状態の良い部分と，腐朽して紙状になっている部分があり，取り上げられなかった。

Fig.58　5555号井戸井側・水溜（南東より）

出土遺物をFig.59に示す。1～4は**須恵器**である。1は皿で，若干底部がひずんでいる。2・3は，高台付坏である。底部と体部との境からやや内側に，断面方形の低い高台を貼り付ける。4は甕の口縁部である。体部外面には，小さい格子目のタタキ痕が，内面には若干間をおいて指頭痕が並ぶ。5は，**丸瓦**である。上

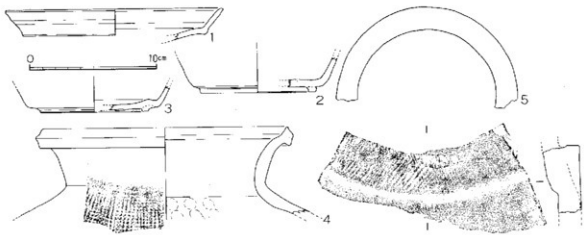


Fig.59　5555号遺構遺物実測図（1／3）

面は丁寧に削られ，下面には布目が残る。須恵質の焼成で，灰色を呈する。

8世紀後半代の井戸であろう。

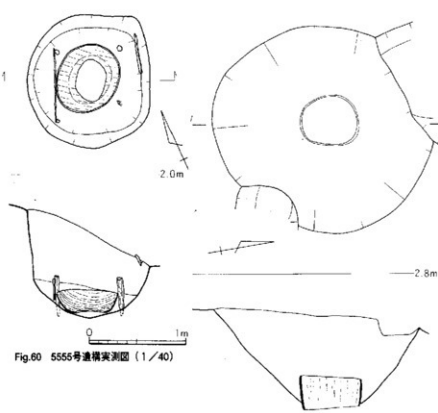


Fig.60　5555号遺構実測図（1／40）

5869号遺構（Fig61・62）

C区第4面R～S－29～30グリッドで検出した。掘りかたは，直径2.9mの円形を呈し，その中央に長径77.5cm，短径67.5cm，高さ45cm以上のくり抜き材の井側をすえる。くり抜き材の肉厚は3～4cmと，比較的厚い。

Fig.61　5569号遺構実測図（1／50）

出土遺物をFig.62に示す。1～4・11～14は，須恵器である。1は高台付杯，2は皿である。3・4は蓋で，文字と思われる墨痕がみえるが，読みとれない。14は壺であるが，高台が剥離している。5～10は**土師器**である。5～7は内黒土器椀で，内面は密にヘラ磨きし，炭素が吸着して漆黒色を呈する。外面は横ナデで，磨きを加えない。8は坏である。底部をヘラ切する。9は高台付坏である。10は，壺であろうか。内面は密にヘラ磨きされる。外面は横ナデ調整である。15・16は**平瓦**である。15は上面に布目，下面は縄目叩きだが，両面ともカキメ調整が加えられる。16は，上面布目，下面は斜格子叩きである。

おおむね，9世紀後半に位置付けるのが妥当と考える。

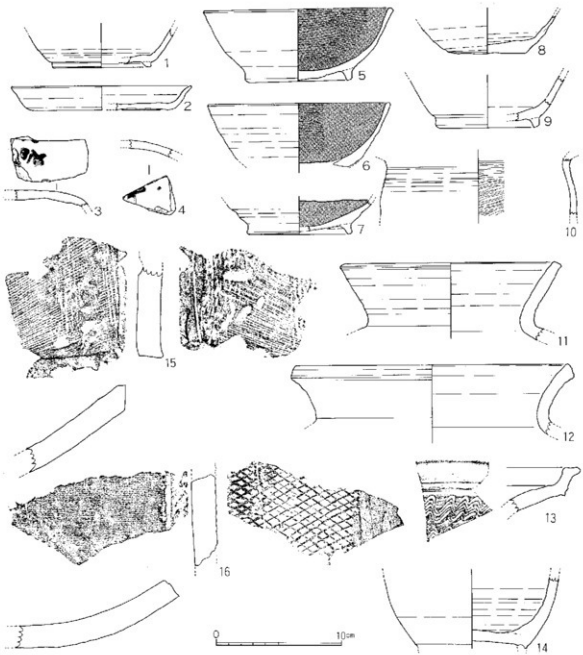


Fig.62　5869号遺構遺物実測図（1／3）

5887号遺構（Fig.10、154）

B区第4面A－B－20グリッドで検出した井戸である。5424号遺構，5689号遺構に切られ，これらの井戸の掘りかたの下から検出したものである。そのため，5887号遺構にともなう掘りかたは，すっかり失われており，また井側の一部を認めただけで，井側・水溜ともにほとんど残っていなかった。

井側は，板材を方形に組んだもので，東角付辺が残っていた。木質の遺存状態はきわめて悪く，南辺で約40cm，東辺で24cm，高さ6cmを確認したにすぎない。

遺物も，きわめて少量である。小片のため図示できないが，須恵器片が出土している。

遺構の形状も考えあわせて，8～9世紀頃の井戸とみるのが妥当であろう。

（3）埋葬遺構

5475号遺構（Fig.63～66）

B区第4面I－23グリッドから検出された土壙墓である。長辺140～158・短辺36～90㎝の，隅丸不等辺四角形を呈する。深さは，17㎝程度が残っていたが，出土人骨の状況からみて，少なくともこの2倍以上はあったものと思われる。

墓壙内からは，人骨と供献された黒色土器椀が出土した。人骨は遺存状態が悪く，頭蓋骨と下肢骨しか残っていない。仰臥して軽く立て膝をした屈肢葬である。

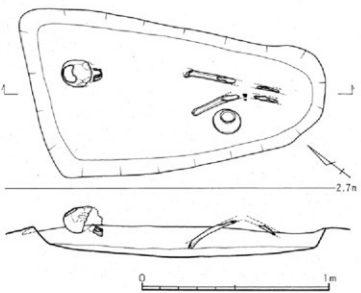


Fig.63　5475号遺構実測図（1／20）

供献された**黒色土器椀**（Fig.64・66）は，内外面に炭素を吸着させたB類である。内外面は，きわめて密にヘラ磨きされる。胎土には，若干の徹砂（石英・長石粒）が混るものの総じて良好で，炭素吸着のため漆黒色を呈する。口径14.6㎝～15.0，高台径7.4～7.7，器高6.6～6.7㎝の深椀型である。

10世紀後半に位置付けられよう。

Fig.64　5475号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.65　5475号遺構（南東より）

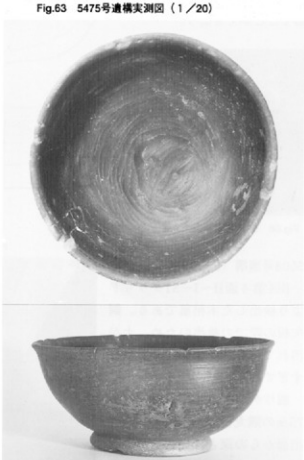


Fig.66　5475号遺構出土黒色土器椀

5476号遺構（Fig.67～69）

B区第4面I－27～28グリッドより検出した土壙墓である。土壙は長辺180㎝，短辺70㎝の隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは16㎝をはかる。人骨の出土状況からみて，土壙の本来の深さは，さらに深かったものと推測できる。土壙ほぼ中央を，既存の建築物の基礎杭が貫通している。

人骨は，極めて遺存状態が悪く，頭蓋骨と下肢の一部（脛骨または腓骨）しか確認できなかった。仰臥伸展葬であろうか。

供献・副葬遺物はなかったが，埋土中出土土器片から，10～11世紀頃とおくことができよう。

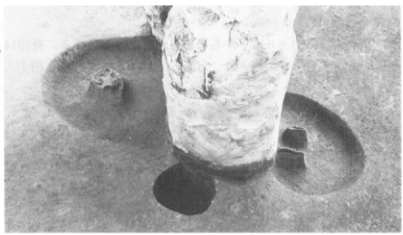


Fig.67　5476号遺構（北西より）

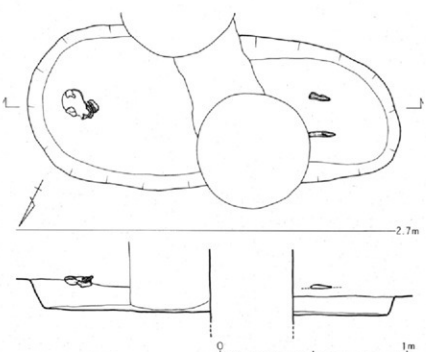


Fig.69　5476号遺構実測図（1／20）

Fig.68　5476号遺構出土人骨

5508号遺構（Fig.70～74）

B区第4面H～I－31グリッドより検出した木棺墓である。鋼矢板の際での検出のため，土が汚れており，足位側で若干掘りすぎてしまった。

掘りかたは，長辺220㎝，短辺75㎝の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは13㎝をはかるが，本来の深さではない。土壙埋土中より点々と鉄釘が出土し

Fig.70　5508号遺構（北東より）

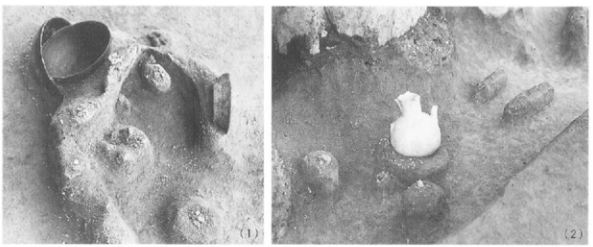


Fig.71　5508号遺構（1）頭蓋骨・供献土器出土状況（南東より）、（2）水注出土状況（南東より）

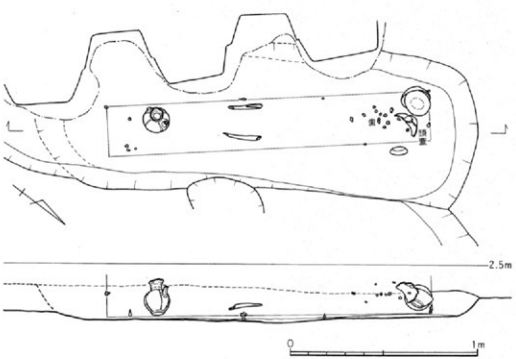


Fig.72　5508号遺構実測図（1／20）

ており，木棺墓と知れた。鉄釘の配置から推測すると，木棺は，長側170㎝，小口26㎝で，挟長な箱型になる。深さは不明だが，出土人骨からみて，22㎝を下ることはありえない。

木棺範囲内からは，人骨が出土している。人骨は，遺存状態がきわめて悪く，頭蓋骨の頭頂部付近，歯，左右大腿骨を検出したにとどまる。おそらく，仰臥伸展葬であろう。頭蓋骨の出土位置が，木棺の底面から，5㎝程度浮いている。推測を支持する証拠は全くないが，有機質の枕を敷いていた可能性を考えたい。木棺内に木製枕をおいて，被葬者の頭をのせた例は，博多第26次調査出土木棺墓（12世紀後半～13世紀初）にも見ることができる。

頭蓋骨の左右及び，足先から供献遺物が出土した。頭の右側（向って左側）には，内黒土器椀2口，左には土師器坏2枚，足先には青磁水注が置かれていた。出土状況からみて，内黒土器椀は棺の蓋の上に2口重ねておいてあったものが，蓋材の腐朽によって，棺内に落ち込んでずれたもの，土坏器皿は，当初蓋上に供えられていたが，土壙を埋めた際に，投げ込まれた土砂と共に木棺の横に落ち込ん

だ様子を示している。水注は，底部を木棺床につけて正立しており，初めから棺内に置かれていたものと知れる。

供献遺物を，Fig.73に示す。1・2は**土師器**の坏である。外底部はヘラ切りする。体部は横ナデで，内底部にナデ調整を加える。3・4は，**内黒土器**椀である。外面は横ナデ・内面は密にヘラ磨きする。3のヘラ磨きは，体部を横位のヘラ磨き，内底はジグザグのヘラ磨きを重ねる。4では，体部・内底それぞれ四分割してヘラ磨きする。5は，**青磁**水注である。白化粧を施した

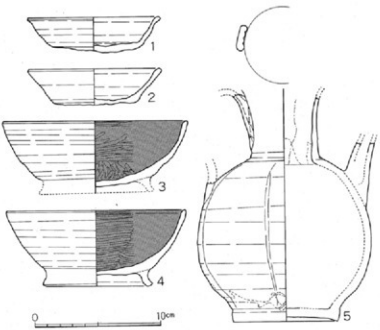


Fig.73　5508号遺構遺物実測図（1／3）

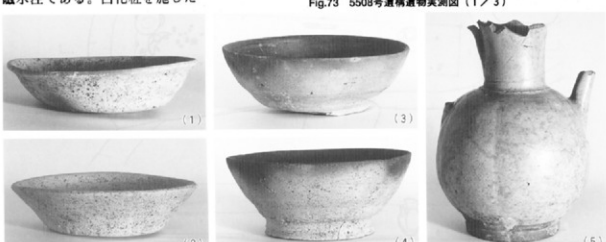


Fig.74　5508号遺構出土遺物（番号はFig.73と一致する）

上に，灰オリーブ色の半透明釉をかける。底部は露胎である。体部は，瓜形にへこませる。把手・注口先端・口縁部を欠く。中国の閩江流域，福州を中心とした唐代の窯で焼かれたもので，懐安窯の製品に類似している。

供献された土師器，内黒土器等から，9世紀末頃の木棺墓と考えられる。

7．中世の遺構・遺物

（1）道路遺構

調査区南側，O－R－8グリッドからN－Q－31グリッドに向けて検出された道路について，各面ごとに概要を記す。

第1面道路

表土剥ぎに際して削られ，路面は残っていない。断続する溝列によって確認される。道路北側の溝がA区からB区まで通る様で，これを基にするとN－47°－Eを示す。O－R－8グリッドで道幅をとると，溝の内側で約3.2mをはかる。

第2面道路（Fig.75－（1）・（3））

平行する2列の溝と，これに挟まれた硬化面によって確認される。道幅は，2m前後で，道路の中軸ではかると，N－44°－Eをとる。

第3面道路（Fig.75－（2）・（4）・（5））

平行する数列の溝と硬化面とで確認できる。溝は浅く，断続的で，A区の東側でしか検出できなか

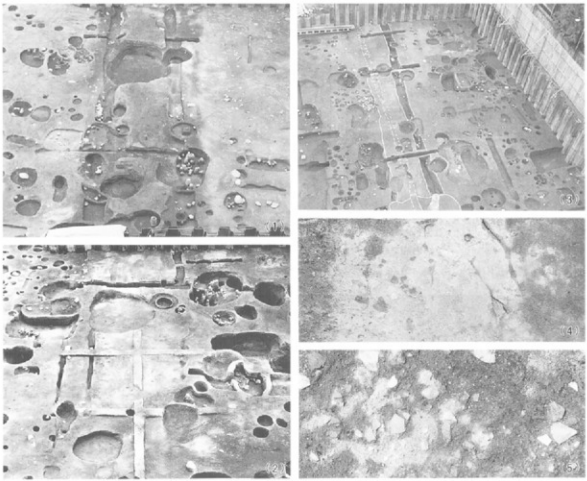


Fig.75　道路遺構（1）A区第2面道路、（2）A区第3面道路、（3）B区第2面道路、（4）・（5）A区第3面道路路面

った。硬化面もA区を主に，B区の一部でみられるのみである。総じてA区の方が遺存状態が良く，これは，前述した様に本来の生活面（＝道路面）が傾斜していたのを，第3面設定時にほぼ水平に切ってしまった為と思われる。

A区東側で硬化面を検討すると，鉄分が沈着して表面が板状になった箇所や，小石・土器・陶器片を敷き込んで簡易舗装状を呈する部分がみられ，かなりしっかりとした道路があったことが，うかがえる。それでも溝状の凹凸が部分的にあり，わだちの痕跡の可能性も考えられる。

道路幅3.6～4.0m，中心線でとってN－43°－Eを指す。

（2）溝状遺構

1853号遺構（Fig.10，76～30）

A区第4面，A－3グリッドからK－1グリッドにかけて検出した溝である。後述する1902号遺構（溝，P51）に切られ，1854号遺構（溝，P46）を切る。溝幅約90cm，検出面からの深さ約50cmをはかる。素掘りで，断面実測図にみる様に，一度掘り直しされている。主軸方位を，N－59°－Wにとる。

出土遺物を，Fig.80に示す。1～3は，**土師器**である。1・2は皿である。1は底部をヘラ切りする。内底部にはナデの痕跡がみられる。口径8.8，器高1.7cmで，浅い丸底に作る。2は，底部を回転糸切りする。内底部のナデ調整と外底部の板目圧痕は認められる。口径9.6，底径7.3，器高0.9～1.1cmをはかる概して器壁は薄い。3は，坏である。外底部は回転糸切りする。内底部にナデ調整を加える。口径14.6，底径10.4，器高2.8～2.9cmをはかる。4～9は，**白磁**の碗である。6は目込み

Fig.76　1853・1854・1902号遺構（北西より）

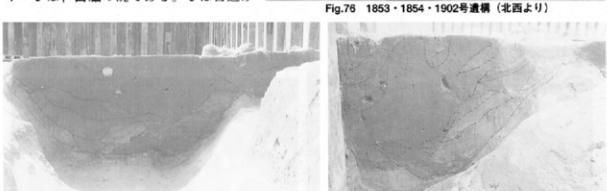
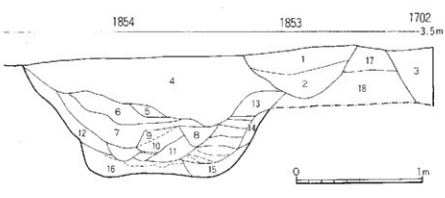


Fig.77　1853・1854・1902号遺構断面（1）B－1～4グリッド（北西より）、（2）K－1・2グリッド（南東より）

の釉を，輪状にかき取る。8の内面には，櫛描文がみとめられる。9は見込みが茶溜り状に凹む。外底の高台内に，墨書が記されている。漢数字の「二」である。10は，**青磁**である。龍泉窯系青磁の椀で，高台内の露胎部に墨書がみられる。花押であろう。11～14は，**陶器**にある。11は，無頸のラッキョウ形の壺である。口縁部付近の破片で，「ノ」字形の耳を，縦に貼り付ける。外面には，暗茶色の釉を施す。12・13は，壺の底部である。14は，鉢である。大きく開いた体部を内弯させ，逆L字形に折り曲げて口縁を作る。

この他，青白磁蓋小片，越州窯系青磁片，滑石製品片，瓦片などが出土している。

12世紀後半代の溝であろう。



1・2…1853号遺構埋土
1－黒色壌土
2－黒褐色壌土
3…1902号遺構埋土
3－灰褐色砂質土
4～16…1854号遺構埋土
4－暗褐色砂質土
6－暗褐色砂質土
7－褐色砂質土
8－黄色砂
9－褐色砂質土
10－黄色砂
11－暗灰褐色砂質土
12・16－灰黄色砂
17－暗褐色砂質土
18－淡黄色砂＝地山砂

Fig.78　1853・1854・1902号遺構土層実測図，B－1～4グリッド，北から（1／30）

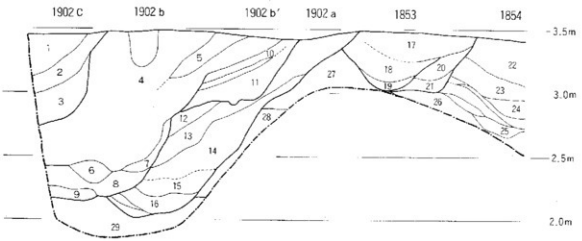


Fig.79　1853・1854・1902号遺構土層実測図，K－1・2グリッド，南から（1／30）

1～3…1902c埋土
1－濃灰色砂まじり土
2－濃灰色粘質土
3－濃灰砂まじり土
4～9…1902b埋土
4－灰褐色砂まじり土
5－黄灰色粗砂
8－灰褐色砂質土
9－濃灰褐色粗砂
10・11…1902b'埋土
10・11…明灰褐色砂質土
12～16…1902a埋土
12－灰褐色砂質土
13－黄褐色砂・灰色砂等の互層
14－黄褐色砂・白色砂・粗砂・灰色砂等の互層
16－炭まじり暗褐色土
17～21…1853号遺構埋土
22～26…1854号遺構埋土
27～29…地山砂層
27－淡黄色砂
28－黄色粗砂
29－白色砂・灰色砂・黄褐色砂等の水平方向の互層

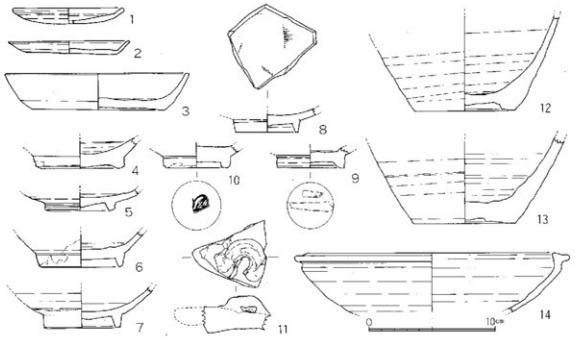


Fig.80　1853号遺構遺物実測図（1／30）

1854号遺構（Fig.10，76～79・81－85）

A区第4面，A－B～4グリッドからN－1グリッドにかけて検出した溝である。幅約2.4m，検出面からの深さ約0.95mをはかる。主軸をN－60°－Wにとる。前項の1853号遺構に切られる。

素掘りで，逆台形の断面を呈する。何度かの掘り直しがあるが，最終的に深さ60cm弱の溝となる。

出土遺物を，Fig.81～85に示す。**1～18**は，**土師器**である。**1～6**は皿である。**1～3・6**は外底部を回転糸切り，**5**は回転ヘラ切りする。**4**は回転台を使用しない手捏ねの土器で，外底には掌紋及び指頭痕がつく。**4**以外は，体部を横ナデ調整した後，内底部にナデ調整を加える。法量は，口径－底径－器高の順にそれぞれ8.7－6.9－1.4，8.8－6.8－1.4，9.0－7.2－1.3，9.0－5.1－1.5，9.3－7.0－1.45，9.7－7.5－1.45cmをはかる。**7～14**は，坏である。**7～13**は外底部回転糸切り，**14**はヘラ切りする。**7～13**は，体部を横ナデした後，内底部にナデ調整を加える。**14**は，内面にコテをあてて平滑に整える。法量は，口径－底径－器高の順で，それぞれ，14.7－10.8－2.8，14.8－11.4－2.4，15.4－8.9－3.4，15.2～15.5－10.2－3.05，15.5－9.6－3.1，15.7－16.4－10.3－3.7，16.0－9.9－3.05，16.0－8.3－3.7cmをはかる。**15～18**は，椀である。**15**は，高台が剥離している。内面は，コテをあてて平滑にする。**19～22**は，**瓦器**の椀である。**19**は深椀タイプで，腰に丸味が強く，体部はやや直線的に深く立ち上る。内面のヘラ磨きは，幅広で浅く，痕跡がはっきりしない。外面には，横位の暗文が施される。**20**は，浅椀タイプである。やはりヘラ磨きの単位は見にくく，はっきりしない。**21**は，薄手で，見込みに暗文が施される。幅が狭く，はっきりした磨きである。**22**は，**19，20**同様，不明瞭なヘラ磨きが施される。**19・20・22**は**筑前型瓦器**，**21**は**楠葉型瓦器**であろう。**23**は，**高麗青磁**の碗である。見込みに目痕が並ぶ。濃灰色の胎に，青緑色の不透明釉を施す。**24～27**は，**越州窯系青磁**である。**28～31**は，**青磁**である。**28**は同安窯系，**29～31**は龍泉窯系である。**30**の高台内は，円形の調整痕が花弁状に重なっている。また高台の露胎部には，墨書が書かれている。はっきりとは見えないが，花押であろう。**29～31**の龍泉窯系青磁は，龍泉窯でも初期の製品に属する。**32・33**は，**青白磁**である。**32**は小壺の蓋である。上面に菊花文様を型押しする。**33**は，長頸壺の頸部である。**34～68**は，**白磁**である。**34・35**は合子の蓋で，上面に沈線文が刻まれる。**36～40**は，平底の皿である。

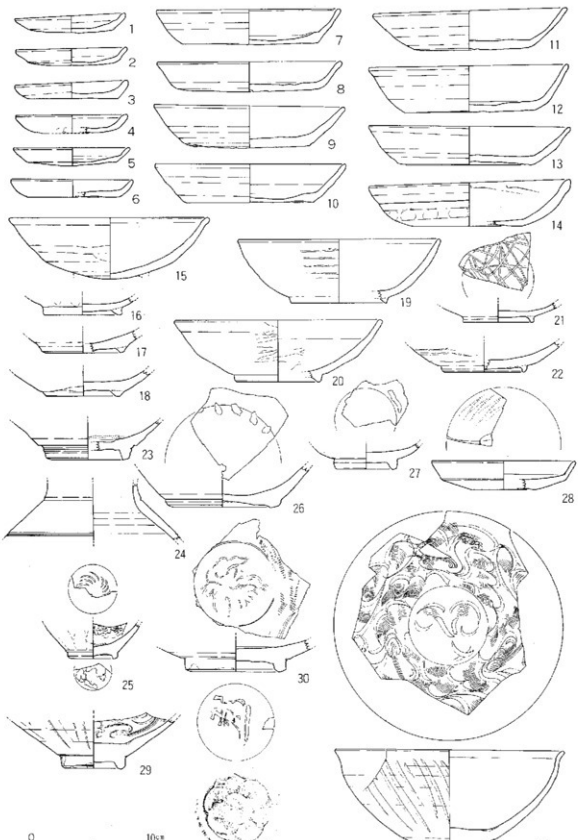


Fig.81　1854号遺構遺物実測図1（1／3）

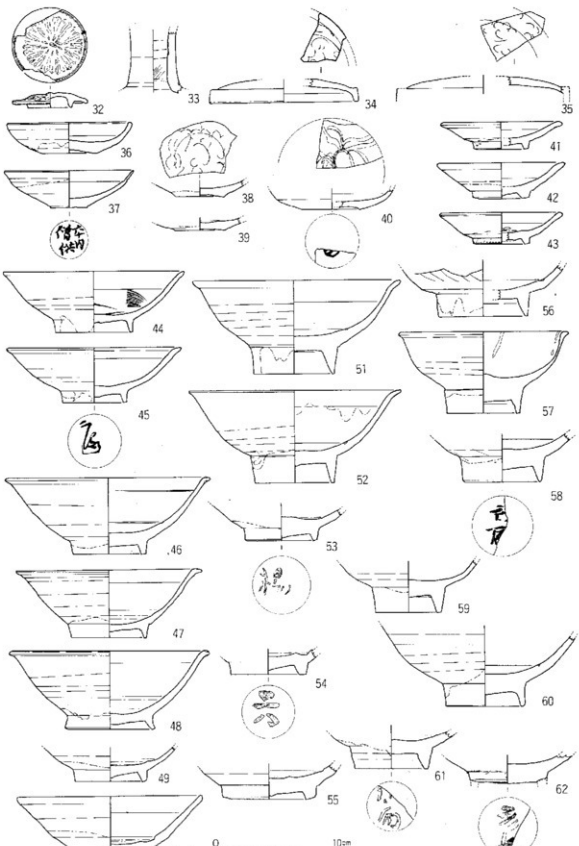


Fig.82　1854号遺構遺物実測図2（1／3）

36〜39は，整形後釉を施し，体部外面下位を露胎として残すが，40は全面施釉の後，底部を若干抉り込む様に削り取り，露胎にしている。37の底部には，「六十内　僧供」の文字が二行書きされる。40の見込みには片切り彫りで花文が描かれる。外底に墨書があるが，判読できない。41〜43は，高台付皿である。43は，見込みの釉を，輪状に掻き取る。44〜68は，碗である。44〜48は，細く高い輪状高台を持つものである。44の内面には，櫛描き文が施される。45の高台内には，花押が墨書される。51〜63は，径が小さく高い筒状の高台を持つ。56の外面には，沈線文が弧を描いて垂下する。57の内面は，白堆線を縦に入れて，輪花とする。58・61〜63の高台内には，墨書がみとめられる。58は漢字二文字，解読不能，61も二文字で「圖ヵ」，62も二文字だが読めない。63は「捷」であろう。47〜50・53〜55は，見込みの釉を輪状に掻き取る。49・50・54・55の高台は厚く，角張る。53・54に墨書がみられ，53は「楊」，54は「六」と読める。64は細い輪状高台を持つが，高台の削り出し方が前述の44〜48とは異なり，高台内を肉厚に削り残し，高台部分は極めて薄い。墨書があるが，読めない。66・67は，玉縁口縁に作る。69〜78は，陶器である。69は褐釉の小壺である。胎土はきわめて精良で，作りも薄い。茶入であろう。70は，黒褐釉の瓶である。胎土は灰白色，緻密で，磁質となる。71は，褐釉の鉢である。72は，灰オリーブ色の不透明釉を施した行平鍋である。把手は中空で釉を差し込む様になっており，釉を留めるための小孔が，上下に穿れている。73は，黄釉褐彩の盤である。74は，緑黄色の釉を施した鉢である。75は，黄釉の鉢である。釉下に化粧土がみとめられる。76は，茶褐色釉をかけた壺の底部である。77は，青黄釉を施す。78は，無釉の長胴壺である。焼き締めとなる。79は，フイゴの羽口である。下端には溶けた鉄滓等がベッタリと付着する。

Fig.83　1854号遺構出土遺物1

80・81は石鍋の転用品，82は石鍋である。83～87は，瓦である。83は軒丸瓦で，花弁文が型押しされる。84～87は平瓦である。85は格子叩きを持つもので，前代の混入品である。

以上の遺物から，おおむね12世紀後半代を考えている。

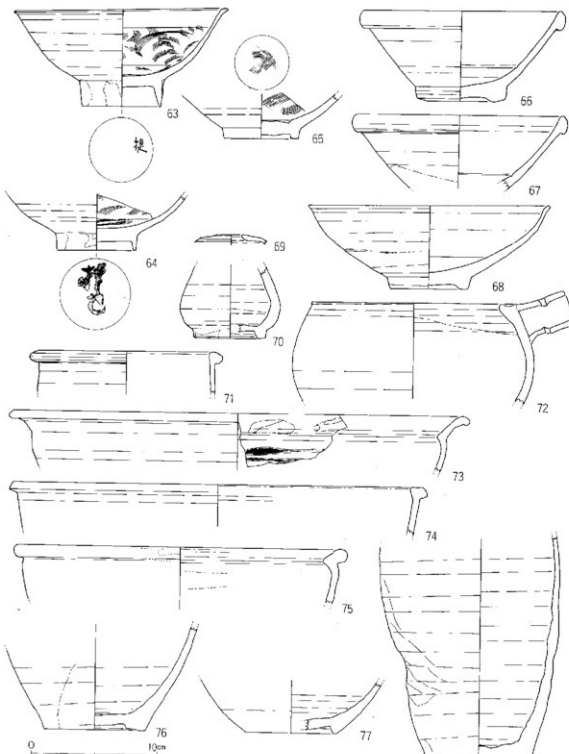


Fig.84　1854号遺構遺物実測図３（１／３）

1902号遺構（Fig.10，76～79，87～88）

A区第4面，A－1～2グリッドからK－1グリッドにかけて検出した溝である。Fig.79の土層断面に見る如く，掘り直しというよりもむしろ2本の溝が重なっている様だが，調査段階で両者を区別することはできなかった。調査区外にかかるため溝幅は不明であるが，1902aの断面から，底を中心として折り返して復原すると，1902aは，溝幅3.3m程度となる。検出面からの深さは，aで1.5m，bで1.3mをはかる。方位は，N－58°－Wにとる。

出土遺物を，**Fig.87～88**に示す。**1～8**は，**土師器**である。**1～7**は皿，**8**は坏で，すべて底部を回転糸切りし，内底部にナデ調整を加える。法量は，口径－底径－器高の順でそれぞれ7.6－5.3－1.4，8.65－6.5－1.7，8.8－6.8－1.3，8.8－7.6－1.35，8.9－6.1－1.1，9.0－6.2－1.3，9.4－5.9－1.15，13.8－9.7－3.1cmをはかる。**9・10**は，**青白磁**の合子の身である。**11～27**は，**白磁**である。**11・18**は小碗である。体部下位を露胎とする。**12**は高台付皿で，見込みの釉を輪状に掻き取る。**13～15**は，口ハ

1
Fig.81-31

2
Fig.81-31

3
Fig.82-37

4
Fig.86-83

5
Fig.82-32

6
Fig.82-54

Fig.85　1854号遺構出土遺物2

ゲの皿である。16は，施釉後外底部を削って露胎とする。この露胎部に墨書がみられるが，判読できない。17～27は，碗である。17は，口ハゲにつくる。21の高台内には墨書が認められる。「俊」かと思うが，下半部分が黒く汚れており，確認できない。22も墨書を持つが，内容不明。25は，見込みの釉を輪状に掻き取る。26は玉縁口縁である。27は，断面方形の厚い高台を持つ。畳付には，耐火砂が付着する。見込みは，釉を輪状に掻き取る。高台内に墨書が残るが，不明。28は，**高麗青磁**の碗である。灰色のやや粗い胎土に，緑色の不透明釉をかける。釉表は，砂をかぶりザラザラになる。見込みに耐火土の目痕がつく。29～35は**青磁**である。29～34は龍泉窯系青磁で，29・30は鉢，31・

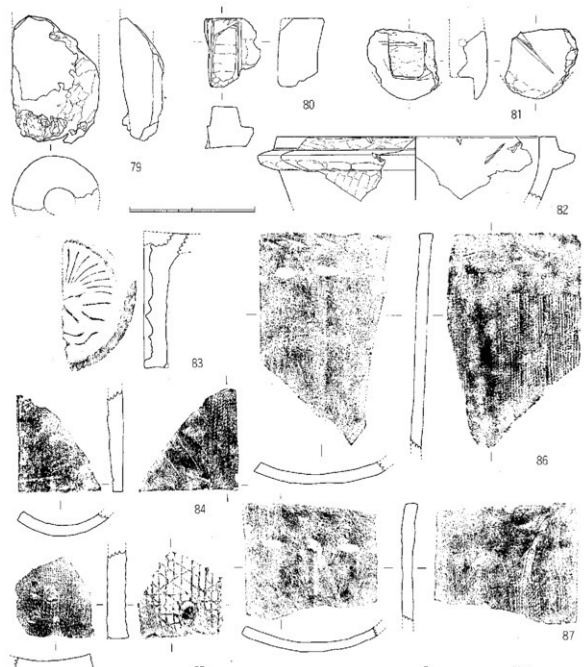


Fig.86　1854号遺構遺物実測図４（79～82…１／３，83～87…１／４）

32は小碗，33・34は碗である。30は，全面に施釉した後，畳付のみ釉を削り取り露胎とする。31は，鏡蓮弁文をあしらう。34は，同安窯系青磁碗である。36～45は，陶器である。36は，天目茶碗であ

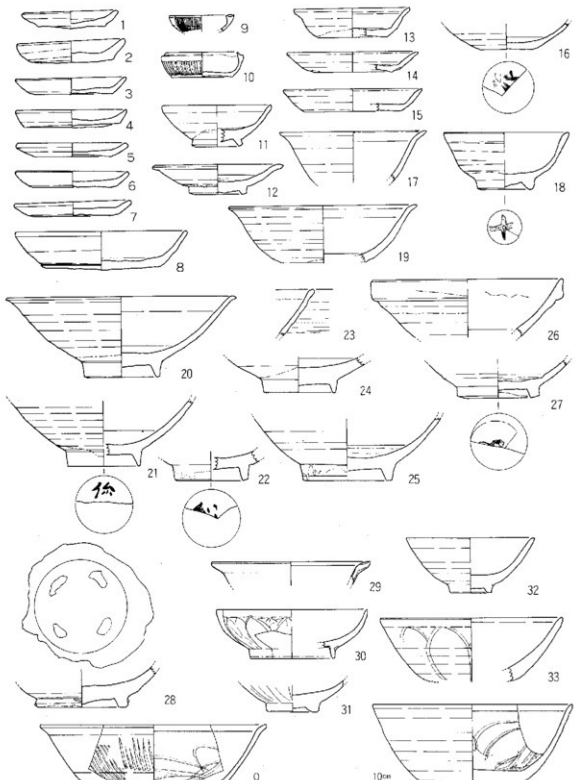


Fig.87　1902号遺構遺物実測図1（1／3）

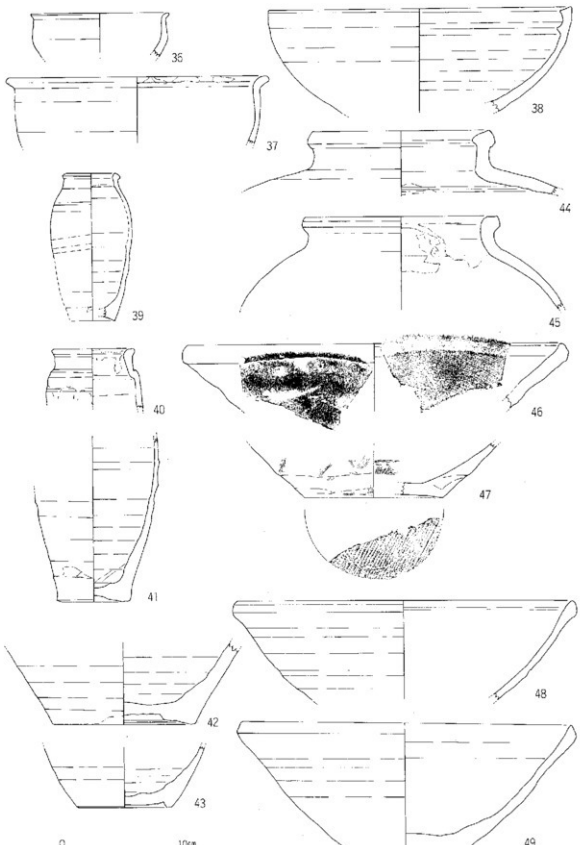


Fig.88　1902号遺構遺物実測図２（１／３）

る。黒褐色の釉を施す。**37**は，褐釉の鉢である。口縁部には，目痕が確認できる。**39**～**41**は長胴瓶である。**42**・**43**は壺の底部である。**38**は，無釉焼き締めのこね鉢である。内面は使用のため，磨耗する。**44**・**45**は，大型の壺の口縁である。**46**・**47**は，**瓦質土器**のこね鉢である。内面は刷毛目調整するが，**47**では使用のため磨滅し，刷毛目が消えている。**48**・**49**は，**東播系須恵器**のこね鉢である。片口であろうが，片口部分は残っていない。**49**の外底には，糸切り痕が残る。

前述した様に，1902号遺構は，少なくとも2遺構の重複と考えられる。当然遺物にも幅があると思われるが，遺物を見た範囲内では，両者を区別できるヒアタスはなく，時期幅としてしかとらえられない。したがって，1902号遺構については，13世紀代とするにとどめたい。

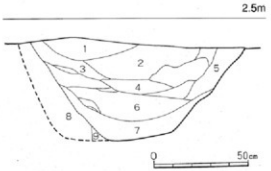


Fig.89　1860号遺構断面実測図（1／30）

1860号遺構（Fig.10，89～91）

A区第4面，J－2グリッドからN－4グリッドにかけて，弧を描いて検出された溝である。堆積状況をみると，砂が流れた様な痕跡がみえるが（Fig.90－（2）），溝はJ－2グリッドで立ち上っており，抜けていない。その弧を描く形状と共に，性格，機能は不明である。

出土遺物を，**Fig.91**に示す。**1**～**4**は，**土師器**である。すべて外底部を回転糸切り，内底部にナデ調整を加える。**1**・**2**は皿，**3**・**4**は坏である。法量は，口縁－底径－器高の順に，それぞれ8.5～8.6－6.0～6.3－1.2，9.4－6.9－1.2，13.2－8.4－2.7，14.0－8.0－2.7cmとはかる。**5**は，**瓦器椀**である。

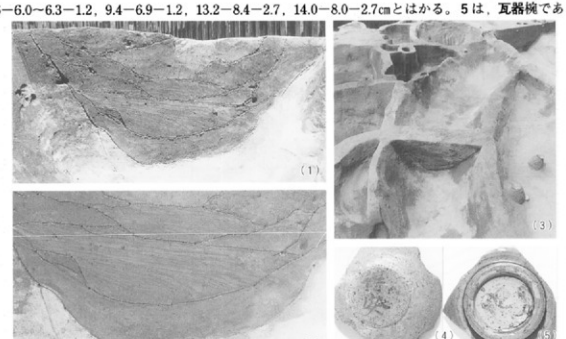


Fig.90　1860号遺構（1）断面（南より）、（2）断面拡大、（3）全景（南より）、（4）・（5）出土遺物

内外面ともヘラ磨きするが，その単位・条線はきわめて見にくく，はっきりとはうかがえない。6～12は，白磁である。6は高台付皿で，見込みの釉を輪状にかき取る。7は平底の皿で，外底部に

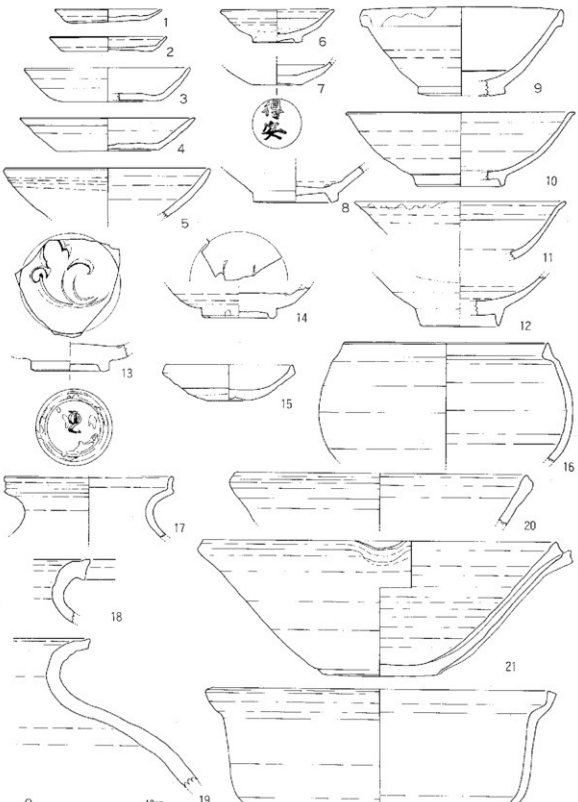


Fig.91　1860号遺構遺物実測図（1／3）

「得安」と墨書する。**8～12**は碗である。**8・10**は見込みを輪状に露胎とする。**13・14**は，**青磁**である。龍泉窯系の碗で，**13**の外底には，花押が墨書される。**15・16**は，中国の**陶器**である。**15**は褐釉の皿である。**16**は茶色の釉をかけた鉢である。**17**は高麗の須恵質陶器壺である。盤口につくる。**18**は，**瓦質土器**の甕である。**19**は，**常滑焼**の甕である。常滑の編年では，第Ⅳ期（1190～1220年）にあてられる。**20～21**は**東播系須恵器**のこね鉢である。**22**は**土鍋**である。口縁は大きく屈曲して内弯する。外面には煤が付着する。

以上の遺物から，13世紀初頭を比定したい。

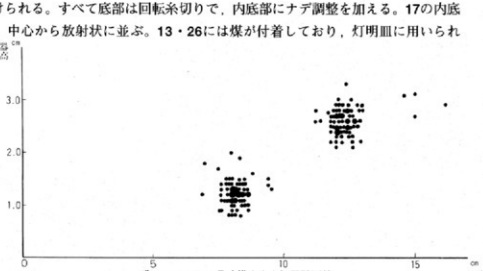
Fig.92　3584号遺構

3584号遺構（Fig. 6，92～100）

B区第２面，L～M－21グリッドからK～L－31グリッドにのびる溝である。L・M－21グリッドで立ち上ってしまい，それ以上東へはのびない。溝幅は，1.8～3.2mをはかる。素掘りで，断面は逆台形がかったU字型を示す。主軸方位は，N－48°－Eで，第２面道路とは，約４m北に離れて平行する。

溝の性格ははっきりしないが，途中で止る点からみて，排水に主たる機能があったとは思われない。堆積土の観察からも，滞水していたり水が流れていた形跡はなく，空濠状となっていたことがわかる。おそらく，屋敷地の区画にかかわる溝であろう。

出土遺物を，**Fig.93～100**に示す。**1～44**は，**土師器**である。土師器は，大量に出土しており，そのすべてを図示することは到底できないので，法量が計測できるものについて計測表を作成し，その結果を**グラフ１**に示した。坏123点，Ⅲ120点を計測した。煩雑になるので，計測値の内訳はいちいち示さないが，大雑把な傾向をグラフから読み取ることは可能だろう。さらに，形態的な特徴を具体的に示すため，計測した遺物の中から，代表的なもの，特徴的なもの等を選び，図示した。まず皿であるが，器高と口径との割合から，３群に分れる。**1～11**は，浅い群，**20～26**は深い群，**12～19**はその中間である。器高の深い群は，さらにその口径から，**20～23**の群（径6.7～7.5cm）と**24～26**の群（径8.4～9.2cm）とに分けられる。すべて底部は回転糸切りで，内底部にナデ調整を加える。**17**の内底には，竹管状の刺突が，中心から放射状に並ぶ。**13・26**には煤が付着しており，灯明皿に用いられたことがわかる。坏は，口径・器高から３群に分かれる。**27～33・34～42**が標準的な群，器高が高い**34**の群，器高が低く，口径は大きい**43・44**の群である。口径だけをみれば，口径14.5cmをこえる一群が，他と隔絶している。調整技法は，すべてⅢ



グラフ１・3584号遺構出土土師器計測値

の場合と同様である。45は，瀬戸・美濃系陶器のおろし皿である。46～50は，青白磁である。46は合子蓋，47は壺の蓋，48・49は皿，50は梅瓶の胴部片である。51～74は，白磁である。51は合子蓋，52も蓋，53は合子身，54は瓜形壺の脚部，55～60は皿，61～68は碗，69～74は壺である。56～

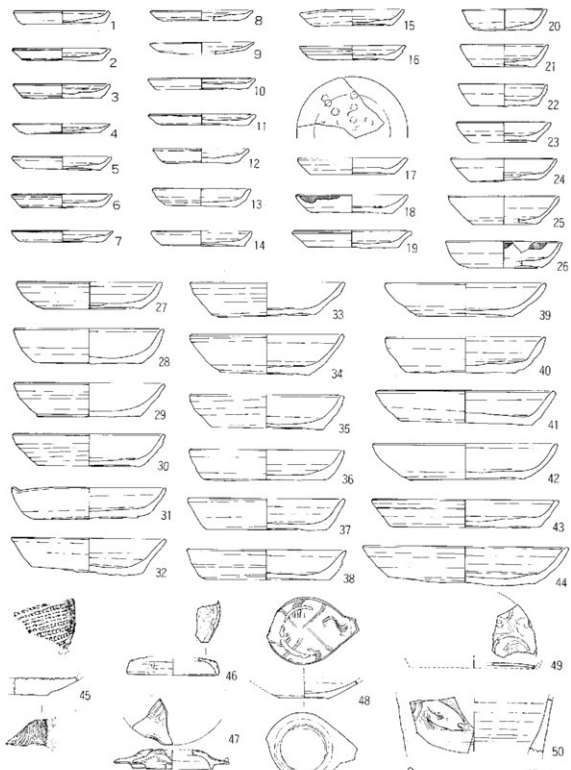


Fig.93　3584号遺構遺物実測図1（1／3）

59・61は，口縁を口ハゲに作る。64～67は，見込みの釉を輪状に掻き取る。60・62～65・73・74の底部には，墨書が見られる。60は不明，61は「王□」，63は花押，64は「六」，65は不明（「□綱」か），73・74は花押であろう。75～88は，青磁である。75～78は鉢，79は小碗，80～86は碗，87は双環壺，88は盤である。75～78は，全面施釉後，畳付の釉を削り取る。78は，薄手の均質な作りの優品で，口縁を数ケ所ひずませて輪花に作る。白色で緻密な胎に淡緑色の透明釉を均一にかける。87の双環は，釉で固めた不遊環である。80・81・85・86に墨書がみられる。80は「吉」又は「十一口」か，81は右に「二十口」，左に漢字二文字か，85は不明，86は「二」であろう。89～125は，**陶器**である。89～92は皿，93・94は天目碗，95は黒褐釉壺，86は盤口壺，97は小口瓶，98～102・122～125は壺，103～113・120は鉢，114・115は盤，116・117は無釉・焼き締めのこね鉢，118・119は甕である。121・124の底部には，墨書がみえる。121は不明，124は「三□」である。126～132は，**東播系須恵器**のこね鉢である。片口部を欠くが，本来は片口に作る。133～137は，**瓦質土器**である。133は羽釜，134は甕，135～137はこね鉢である。135の内面には，うすく摺り目が残る。

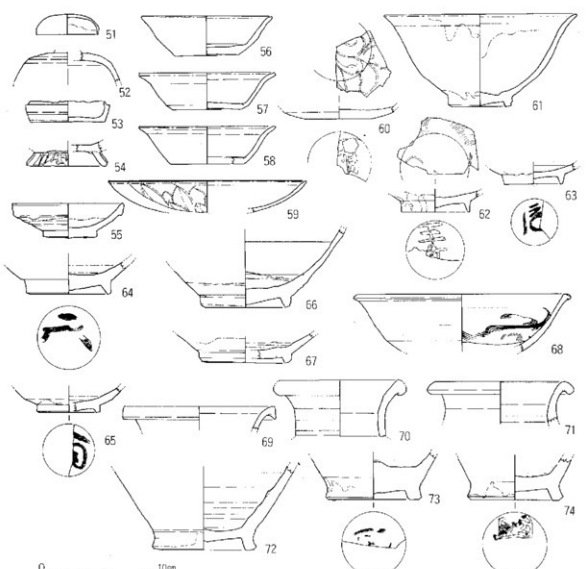


Fig.94　3584号遺構遺物実測図２（１／３）

138は，**土師質土器**のこね鉢である。139～145は，**土鍋**である。口縁形態から，139・144・140～142・143・145の3タイプに分類できる。146・147は，**土師質の脚**である。148～151は，**砥石**である。緻密な粘板岩で，仕上砥である。152は**石玉**，153～159は**瓦玉**である。160・161は滑石の**石鍋**である。162～165は**瓦**である。162～164は丸瓦，165は平瓦。166は，瓦質の**磚**であろう。

この他，**銅銭**が15枚出土している。229ページの「Tab. 2　遺構別出土銅銭一覧表」を見ていただきたい。

13世紀後半から14世紀前半に位置付けられると考える。

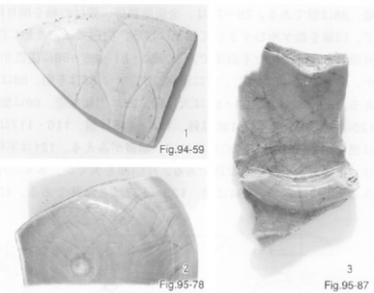


Fig.95　3584号遺構出土遺物

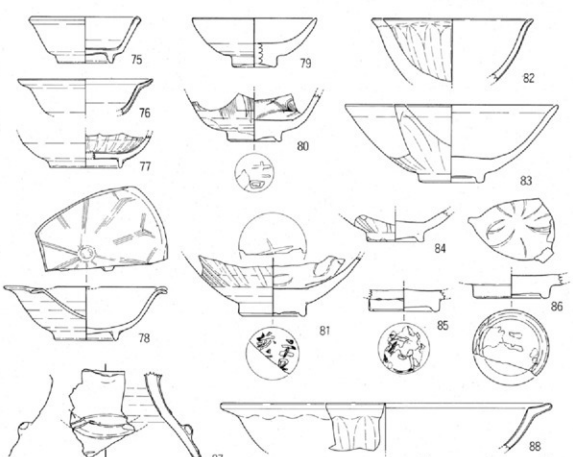


Fig.96　3584号遺構遺物実測図3（1／3）

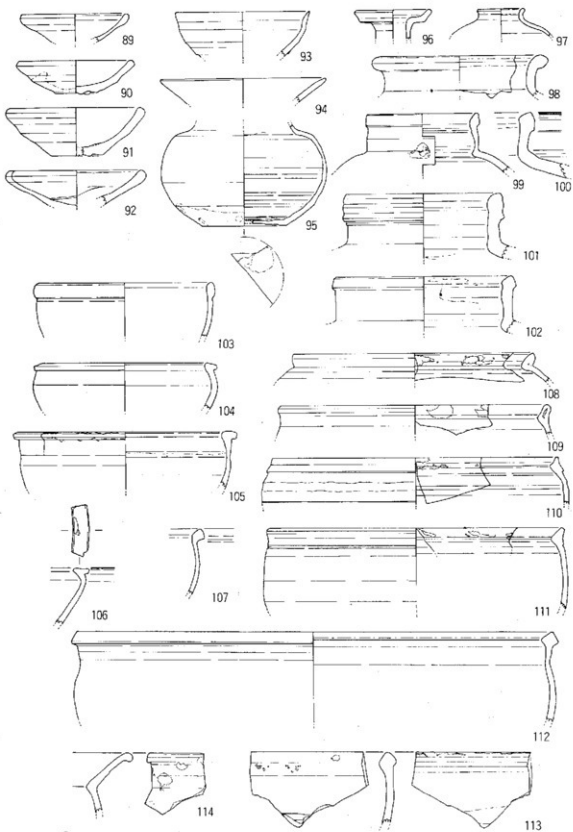


Fig.97　3584号遺構遺物実測図４（１／３）

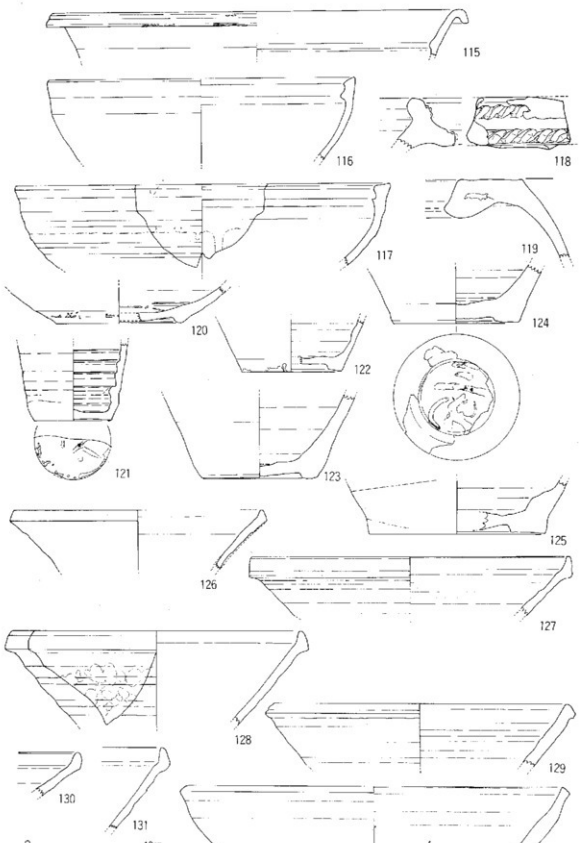


Fig.98　3584号遺構遺物実測図5（1／3）

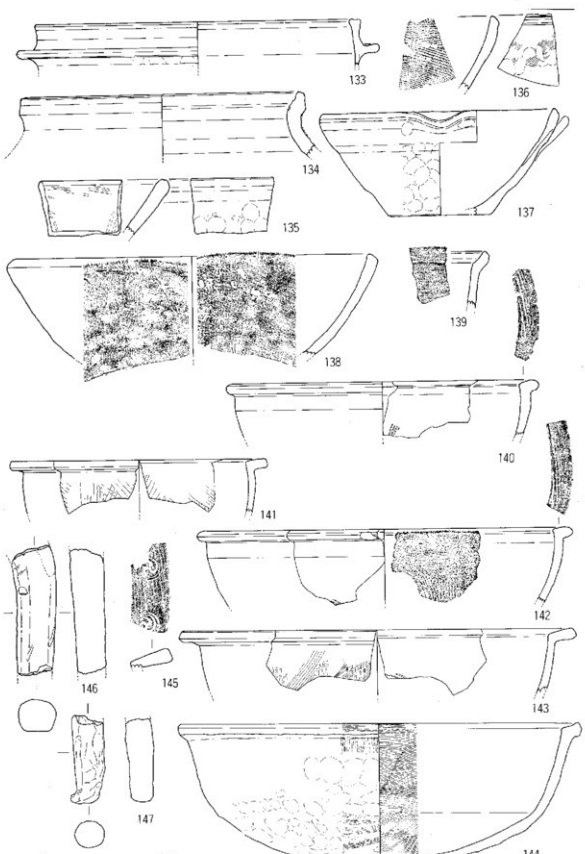


Fig.99　3584号遺構遺物実測図６（１／３）

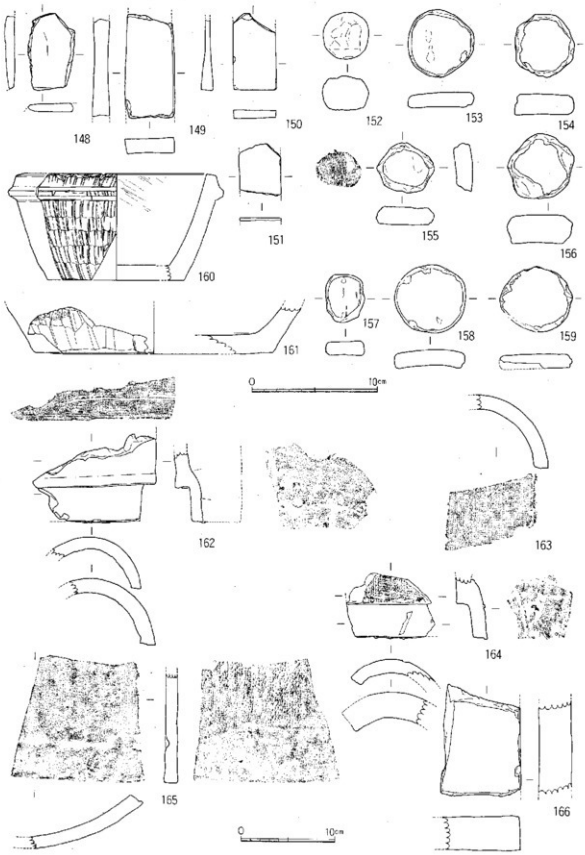


Fig.100　3584号遺構遺物実測図7（1／3　1／4）

（3）建物遺構

各遺構検出面からは多数の柱穴が検出され，高密度な建物の存在が予想された。しかし，切り合いが激しく，井戸等の大型の遺構によって失われた柱穴も少なくはないために，柱穴から建物跡を推定するのは，極めて困難であった。

ここでは，現場で調査段階に確認しえた建物跡を，写真で示すにとどめ，建物に関連すると思われる若干の遺構を取り上げる。その他の推定復原した建物跡については，Fig.5～10の各遺構検出面の遺構全体図中に細実線で示すことにした。

粘土床遺構（Fig.5.101－（5））

A区第1面，J～L－4～6で検出した遺構である。6×4m程の長方形の範囲に，灰白色の粘土が敷かれていた。粘土の分布自体はやや不整形にはみ出していたが，一部粘土に覆われて，長方形に配された集石溝が検出された。粘土は大半がこの溝に規制された形でみられることから，本来集石溝で周囲を画し，その内側に粘土を貼ったものと考えられる。

集石溝は，細い溝中に礫をつめたもので，北東辺を欠いていた。

粘土床の上部構造を窮わせるものはないが，何らかの建物の床または土台とみて間違いなかろう。

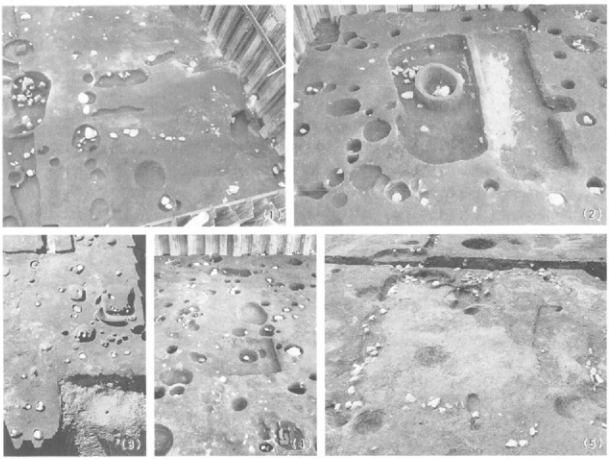


Fig.101　建物遺構（1）A区第2面（西より）、（2）C区第1面（北西より）、（3）同（南西より）、（4）同（北西より）、（5）粘土床遺構（南東より）

3846号遺構（Fig.5.102）

C区第1面S−T−23〜24グリッドで検出した石列である。L字形に曲って出土したが，その北西に接する土坑3845遺構の一辺を囲う様にのびており，無関係ではなかろう。屋内の一段掘りくぼめた場所，おそらくは土間の一隅であろうが，どのような機能，空間を考えたら妥当なのか，現時点では判断できない。今後の類例の増加に期したい。

3845号遺構の出土遺物に準じれば，14世紀後半頃を考えるのが，妥当だろう。

Fig.102　3846号遺構（南西より）

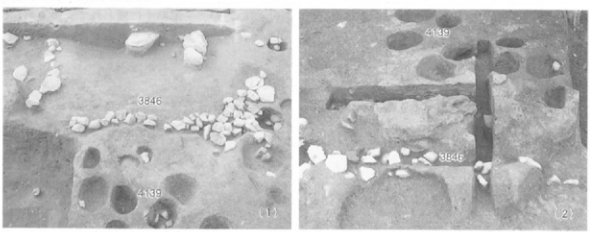


Fig.103　4139号遺構（1）検出状況（南東より），（2）断面（北西より）

4139号遺構（Fig.5，103〜105）

C区第1面T−23〜24グリッドより検出した。竈状の遺構であろう。

径1m程の円形の範囲を浅く掘りくぼめて，灰白色の粘土を敷いたもので，検出面上では，粘土が輪状に露出する。露出した粘土の内側半分程の幅で，火熱のため赤変しており，中央のくぼみで火を焚いたことをうかがわせる。なお中央の浅い凹みには，焼土ではなく，褐色土がつまっていた。

使用状況を復原することは不可能だが，火熱のまわりかたからみて，粘土部分は火を焚いた中央部分を囲む様に立ち上がっており，へっつい状になるものと思われる。3846号遺構に切られる。

遺構周辺，粘土中，たちわりトレンチから出土した遺物をFig.104・105に示す。1〜9は土師器である。底部を回転糸切りする。5の口縁には煤が付着し，灯明皿であったことを示している。10〜12は青白磁である。13〜15は白磁である。13は小皿だが，口縁を花形に削り込む。見込みと外底

Fig.104　4139号遺構出土遺物

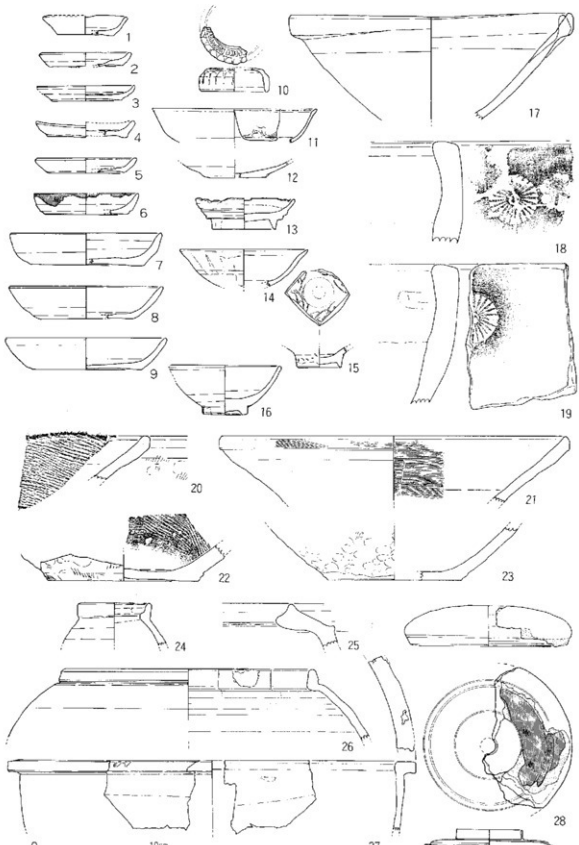


Fig.105　4139号遺構遺物実測図（1／3）

部は露胎とする。16は，**青磁小碗**である。17は**東播系須恵器**のこね鉢である。18～23は，**瓦質土器**である。18・19は火舎，20～23はこね鉢である。24～27は**中国の陶器**である。28は，**鋳型**である。灰白色でスサのまじった粗い胎土で祖型をつくり，その上に真土をぬって，鋳型面をつくる。真土の表面は黒くこげており，鋳造に用いられたことを示している。黒変した真土の形状から，28の下段に示した様な，銅鏡の鈕の鋳型であろう。この他，フイゴの羽口なども出土している。

おおむね，14世紀代をあてたい。

（4）方形竪穴遺構

1611号遺構（Fig.106）

A区第3面C～D-10～11グリッドより検出した遺構で，第4面調査時に方形竪穴遺構と確認した。ただし，プラン的には円形に近く，若干疑問を残す。第3面1610号遺構（井戸）などに切られており，全景は知りえない。

土師器・白磁・青白磁・瓦器・陶器・石鍋・土錘・石錘などが出土している。

遺物からみれば，12世紀代におくことが可能な遺構である。

Fig.106　1611号遺構（北西より）

1899号遺構（Fig.107～109）

A区第4面L～M－6～7グリッドより検出した遺構である。後述する1716号遺構（木棺墓）に切られる。長辺2.7m，短辺2.3～2.5mの長方形を呈し，検出面からの深さは1.1mをはかる。土坑下端は，長辺2.1m，短辺1.7～1.8mの長方形で，四隅と，南東辺の中央付近に1個づつ石が置かれている。

これらの石は，直接柱材を受けたものと考えられる。したがって，少なくとも野ざらしの土坑ではなかったと考えられる。壁体の有無は，確認できなかったが，これまでの調査地点の成果によれば，板壁を立てていた可能性はある。半地下式の貯蔵庫であろうか。

土師器・瓦器・青磁・青白磁・石鍋などが出土した。**Fig.107**に示したのは，**墨書磁器**である。ともに白磁碗で，外底の高台内に墨書している。1は花押である。2は「李太房」と読める。

12世紀後半代の遺構と考えられる。

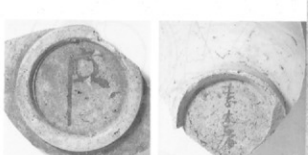


Fig.107　1899号遺構出土遺物

Fig.108　1899号遺構（北東より）

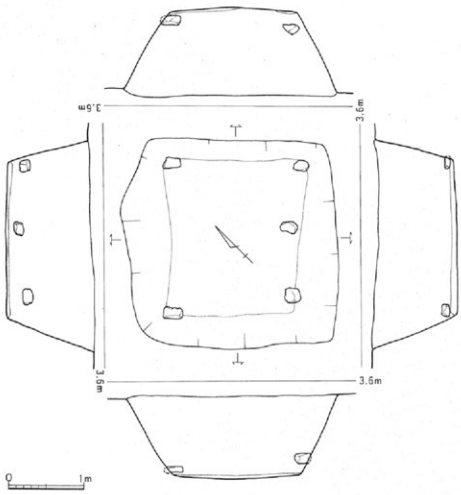


Fig.109　1899号遺構実測図（1／50）

1932号遺構（Fig.110・111）

A区第4面，J・K－4～6グリッドより検出した方形竪穴遺構である。1864号遺構に切られ，南東の一辺を失なう。残った辺から推定して，長辺3.5m，短辺3.0m前後の隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは，1.1mをはかる。土坑下端の角に，柱穴が設けられている。おそらく失われた東角にも柱穴があったと思われる。遺存した3柱穴からみて，柱穴間は，長辺2.25m，短辺1.75mとなる。

土師器（ヘラ切り）・瓦器・白磁・陶器・石鍋などが出土した。

遺物からみて，11世紀後半代の遺構と位置付けられる。

Fig.110　1932号遺構（南西より）

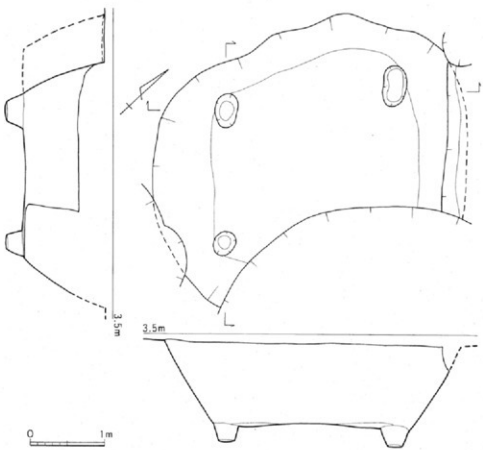


Fig.111　1932号遺構実測図（1／50）

1969号遺構（Fig.113）

A区第4面，G～I－4・5グリッドから検出した方形竪穴遺構で，次の1670号遺構に切られる。一辺の長さしかわからないが，南東辺は約3mをはかる。検出面からの深さは，0.95mをはかる。検出できた範囲では，柱穴等はみられない。

ヘラ切りの土師器・白磁・瓦器等が出土しており，11世紀後半に置かれる。

1970号遺構（Fig.112・113）

A区第4面，E～H－4・5グリッドで検出した遺構である。長辺3.8m，短辺2.2～2.9mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは，1.1mをはかる。床面から柱穴が検出されているが，規則的には並ばない。

土師器（ヘラ切り・糸切り）・瓦器・白磁・青白磁・陶器・瓦などが出土した。

12世紀初め頃の遺構である。

Fig.112　1970号遺構（南西より）

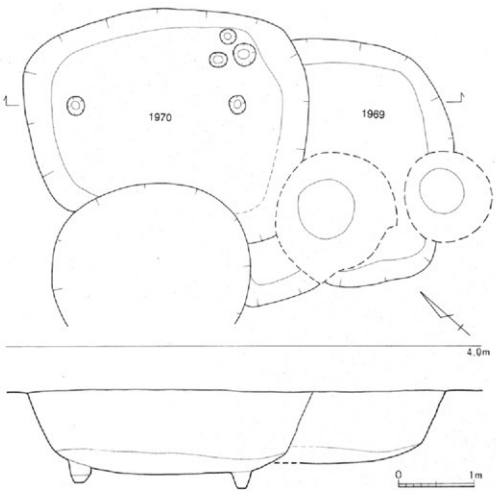


Fig.113　1969号・1970号遺構実測図（1／50）

2745号遺構（Fig.114～116）

A区第4面，G・H－13・14グリッドより検出した方形竪穴遺構である。一辺2～2.5mのほぼ正方形を呈し，検出面からの深さは0.8mをはかる。東角が二段掘り状になるが，埋土からは切り合いとはみえず，一応単一の遺構とした。

床面の四隅に，柱穴が掘られる。柱穴の間隔は，1.7～1.9mである。

Fig.116－1・2は，**土師器**の坏である。底部ヘラ切りで，内面にはコテをあて，平滑にする。**3**は**瓦器**である。内外面とも研磨するが，内面には，研磨以前のコテ痕もみられる。**4**は**須恵器**の鉢である。**5・6**は**白磁**の碗・皿である。

11世紀後半に置くことができよう。

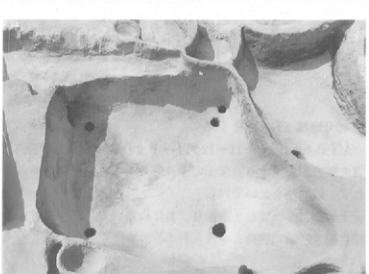


Fig.114　2745号遺構（南東より）

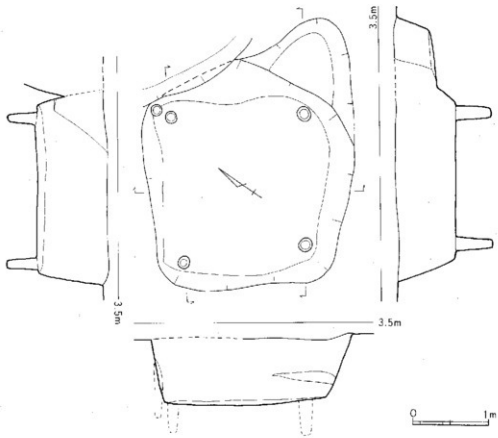


Fig.115　2745号遺構実測図（1／50）

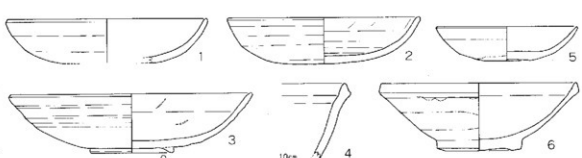


Fig.116　2745号遺構遺物実測図（1／3）

2746号遺構（Fig.117）

A区第4面B～C－11～12グリッドより検出した方形竪穴遺構である。長辺2.8m，短辺2.4～2.6mの隅丸長方形を呈する。床面の南東寄りから柱穴が見つかっているが，これと対面する北西側にはみられず，規則性を欠いている。

土師器（ヘラ切り・糸切り，共に少量）・瓦器・白磁・青磁・天目・石鍋・瓦などが出土しており，12世紀後半頃の遺構と考えられる。

5571号遺構（Fig.118～120）

B区第4面，M～N－20～21グリッドより検出した方形竪穴遺構である。長辺2.4m，短辺2.2mのほ

Fig.117　2746号遺構（北西より）

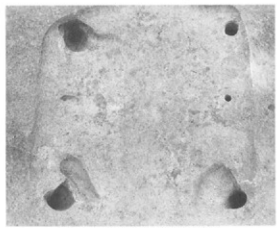


Fig.118　5571号遺構（南東より）

ぼ正方形を呈し，検出面からの深さは，10㎝前後をはかる。B区第4面のこの部分は，砂を深めにはいで遺構検出をしたので，壁の遺存が浅いのには，そのためもあると思われる。

床面の四隅と，北東辺・南西辺のそれぞれ中央に1対の柱

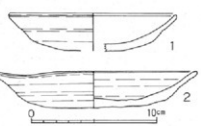


Fig.119　5571号遺構遺物実測図（1／3）

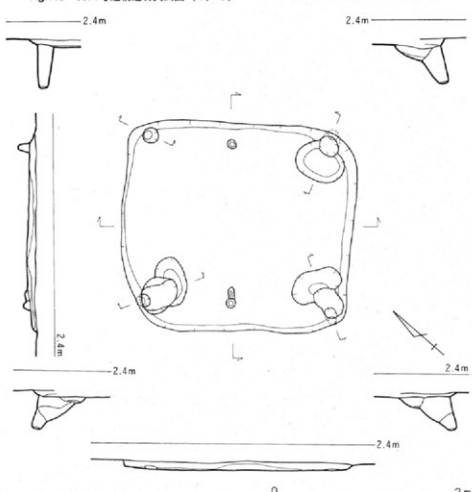


Fig.120
5571号遺構実測図(1／40)

穴を検出した。四隅の柱穴は，中央から斜めに打ち込まれており，この形で柱を据えたとすると，ピラミッドの様な，四角錐の上部構造を考えざるをえない。また北東壁と南西壁の一対の柱穴は，極めて貧弱なもので，柱穴というよりも，坑痕と言ったほうがあたるだろう。四角錐の構造では，壁際の杭は，構造的にはほとんど意味がない。おそらくは，間仕切りの機能を果したものだろう。

土師器・瓦器・白磁などが出土した。**Fig.118**に図示したのは，**土師器**の坏である。土師器は，図示しなかったものも含めて，すべて底部をヘラ切りしたものであった。坏は，底部を押し出して，丸底に仕上る。内面は，コテをあてて，平滑にする。法量を示すと，1は口径13.4cm，器高3.0cm，2は同じく16.6cm，2.9cmをはかる。

11世紀後半代の遺構であろう。

Fig.121　295号遺構（南東より）

（5）井戸

295号遺構（Fig.121～123）

A区第1面，H～I－12～13グリッドより検出した井戸である。径2.8mの略円形の掘りかた中央に，木桶を伏せて据え，井側とする。

出土遺物をFig.123に示す。1～6は，**土師器**である。1～4は皿で，口径6.6～6.8cmの1・2と，8.0～8.2cmの3・4の2タイプがある。5・6は坏である。6は，蛇ノ目高台状に粘土紐を貼り付ける。7は，**瀬戸・美濃窯**の碗である。灰釉を施す。8は宋代の**天目**茶碗で，高台内に「得□」と墨書する。9は**白磁**の碗である。花押を墨書する。10～13は，**青磁**である。12・13の高台内には「井」・「上」と墨書される。14～16は，明代の**染付**碗である。17は，明代の**赤絵**大皿である。鍔状口縁部のみの出土。18は，朝鮮王朝の**象嵌青磁**で壺の胴部片である。白土を象嵌する。19～22は，**瓦質土器**である。19は蓋であろうか。20は羽釜，21はこね鉢，22は鍋である。23～25は，**土鍋**である。厚く煤が付着する。26・27は**備前焼**のすり鉢である。

16世紀後半の井戸である。

476号遺構（Fig.124～126）

A区第2面，F～G－9～10グリッド検出の井戸である。径2.2～2.6mの略円形の掘りかた中央に，木桶を据えて井側とする。**出土遺物**をFig.126に示す。1～12は，**土師器**である。底部を回転糸切し，内底部にナデ調整を加える。1～11は皿で，口径7.4～8.4cm，器高0.9～1.4cmをはかる。12は坏で，口径12.6，器高2.6cm。13～15は**白磁**の碗である。13の高台には「大」

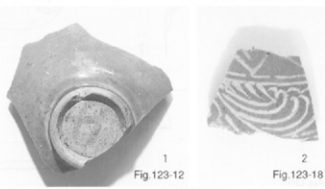


Fig.122　295号遺構出土遺物

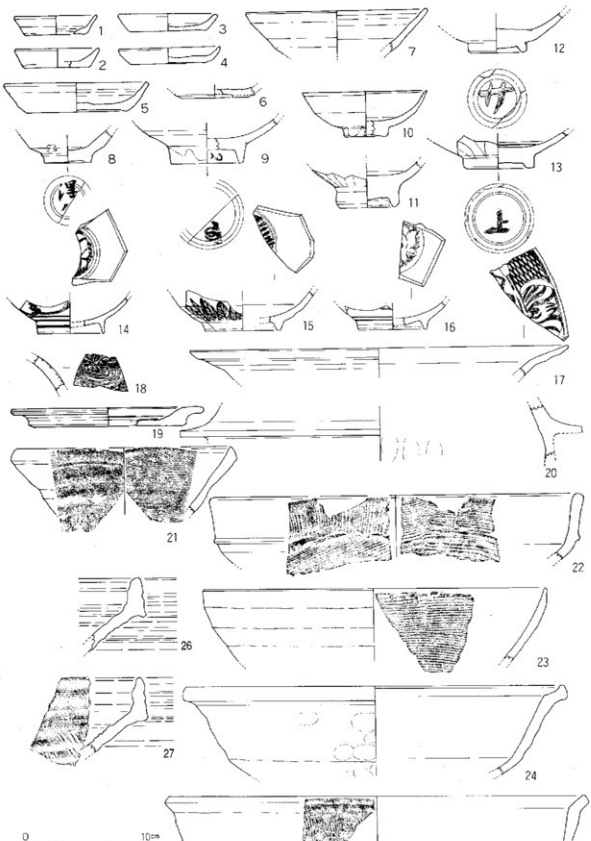


Fig.123　295号遺構遺物実測図（1／3）

と墨書される。14・15は口ハゲに作る。16～19は，**青磁**である。16は鉢，17は小碗，18・19は碗で，いずれも全面施釉した後，高台畳付の釉を削り取るタイプである。20～22は，**陶器**である。20は褐釉の鉢で，口縁上面に目痕が残る。21は，暗灰緑色の釉をかけた甕である。22は褐釉の瓶で，ほりかた埋土中位から完形で出土した。23は，**土鍋**である。外面には煤が付着している。

13世紀後半の井戸であろう。

Fig.124　476号遺構（南東より）

Fig.126-22

Fig.125　褐釉陶器瓶

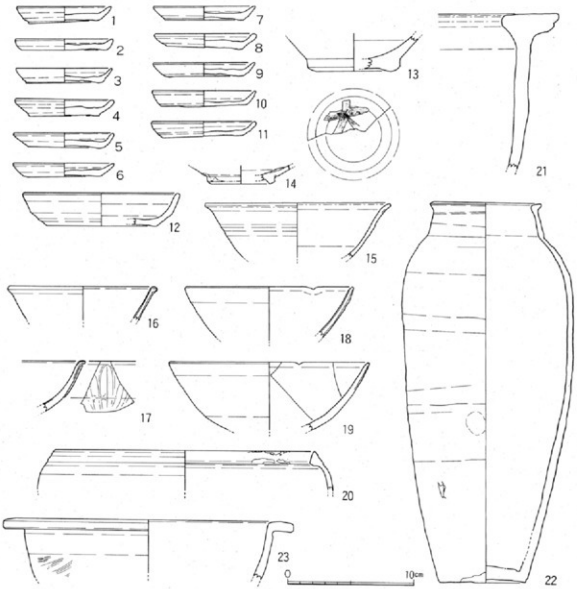


Fig.126　476号遺構遺物実測図（1／3）

1174号遺構（Fig.127～129）

A区第３面B－C－３～４グリッドより検出した井戸である。径3.2m前後の略円形の掘りかたの中央やや東寄りに，木桶を据えて井側とする。

Fig.128－１～16は，**土師器**である。底部を回転糸切りし，内底にナデ調整を加える。**１～14**は皿で**１**が口径6.6，器高1.9㎝，他は口径8.0～9.2，器高1.5～1.7㎝の範囲内にある。**15・16**は坏で，ともに口径12.4，器高2.8㎝をはかる。**17**は，**楠葉型瓦器皿**である。**18**は**土師質土器**で香炉であろうか。国産とも中国製とも判断がつかない。**19**は，**瀬戸・美濃窯**の小壺である。灰色

Fig.127　1174号遺構（南西より）

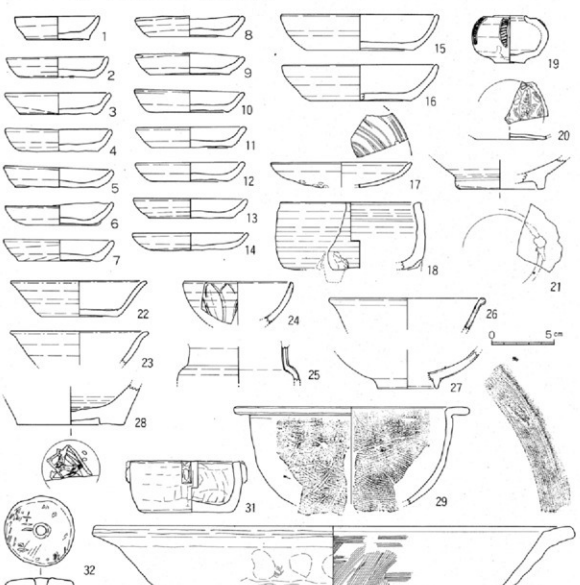


Fig.128　1174号遺構遺物実測図（１／３）

をおびた透明釉を施す。底部には，回転糸切り痕が残る。20は**青白磁**の皿である。21は，**高麗青磁**の碗である。畳付に目痕が残る。22・23は**白磁**の皿で，口縁を口ハゲにする。24～27は，**青磁**である。24は小碗である。鎬蓮弁文を持つ。25は，香炉であろう。26は小鉢，27は碗である。全面施釉した後，畳付のみ露胎とする。28は，**褐釉陶器**の瓶である。外底部に，花押を墨書する。29・30は，**土鍋**である。31・32は**滑石製品**で，31は石鍋のミニチュアである。口径9.0㎝，器高4.15㎝。縦耳タイプを模すが，外底を中心に煤が付着しており，実際に用いられたものである。32は紡錘車であろう。

13世紀後半代を考えたい。

Fig.129　1174号遺構出土古瀬戸小壺

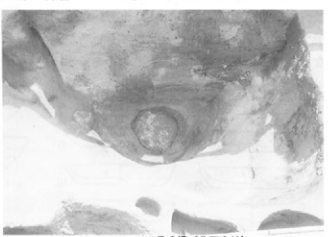


Fig.130　1579号遺構（北西より）

1579号遺構（Fig.130・131）

A区第3面E－H－15～16グリッドで，一部プランを検出したものの全形がわからず，第4面において改めて確認した井戸である。

径4.0～4.8mの不整形の掘りかたに，木桶の井側を持つ。

出土遺物からは，13世紀代の井戸と知れるが，古代の遺物に見るべきものがあり，**Fig.131**に示した。1は**「て」の字状口縁土師皿**である。畿内からの搬入土器。2は**緑釉陶器**である。全体を丁寧に研磨し，淡緑色の釉を施す。土師質だが，硬質に焼成される。3は，**焼塩壺**である。

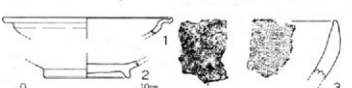


Fig.131　1579号遺構遺物実測図（1／3）

2342号遺構（Fig.132～134）

A区第4面，N－13・14グリッドで検出した井戸である。径1.4～1.5mの楕円形がかった掘方に，木桶を据えて井側とする。

出土遺物は，**Fig.133・134**に示す。1・2は**土師器**である。1は底部を回転糸切りする。2は「て」の字状口縁皿である。京都からの搬入品。3～6は**白磁**である。3は，見込みの釉を輪状に削り取る。高台内に，花押を墨書する。7は**青磁碗**である。8・9は**陶器**である。8は褐釉の壺，9は黄褐釉の大型壺になる。10～12及び**Fig.133**は，**瓦**である。本遺構からは，大量に平瓦が出土した。その内，完形品の平瓦と，丸瓦を

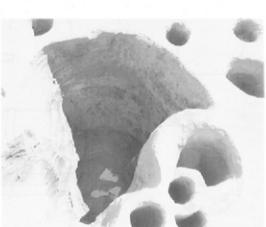


Fig.132　2342号遺構（南西より）

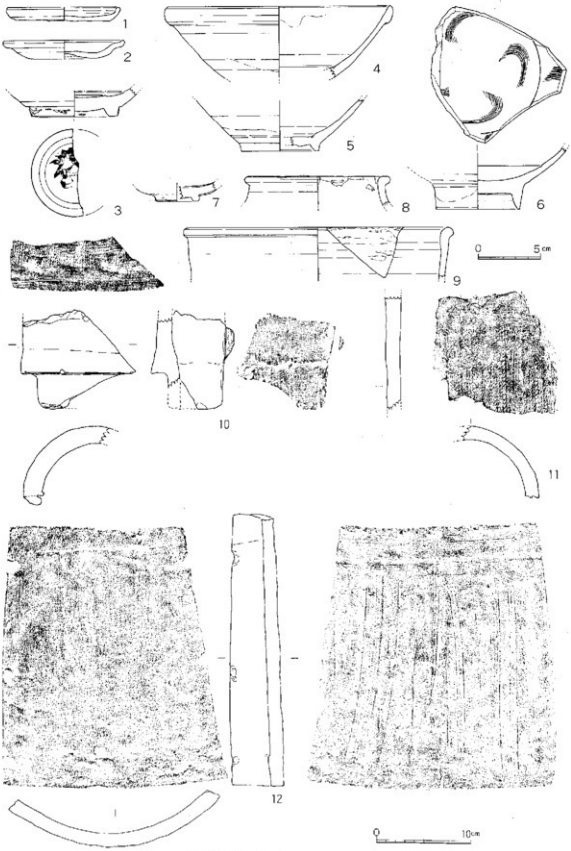


Fig.133 2342号遺構遺物実測図（1～9…1／3，10~12…1／4）

示した。平瓦は，桶巻造りによって作られている。胎土は比較的細かく，須恵質に近く焼成され，灰色を呈する。

12世紀後半の井戸と考えられる。

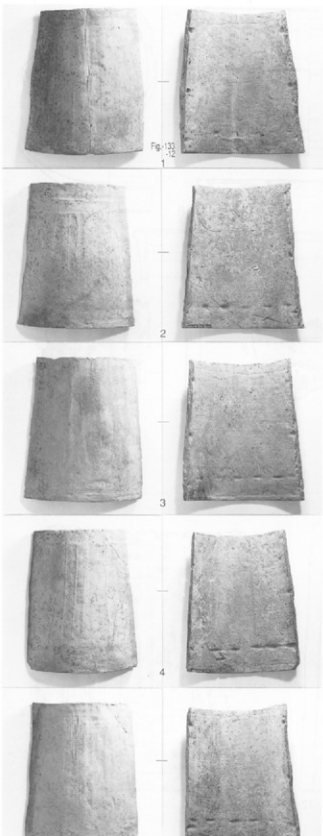


Fig.134　2342号遺構出土平瓦

Fig.135　2771号遺構（南西より）

Fig.136　2771号遺構鏡・椀出土状況

Fig.137　2771号遺構出土和鏡

2771号遺構（Fig.135～138）

A区第4面A～B－15～16グリッドより検出した。A～D－13～16グリッド付近は，井戸が集中して切り合いが激しく，全形を知りえなかった。ただし，ほぼ円形の掘りかたに木桶を用いた井側を持つということは，確認している。

井側内の埋土中より，和鏡と木櫛が出土した。和鏡は，鏡面を下にし，鏡背の上に梳き櫛1枚を乗せていた（Fig.136）。また，これとは別に，解き櫛の断片も出土している。**Fig.138－1**は，**和鏡**である。銅製の鏡で，鏡背全体に草花文を散らしている。面径は，11.4㎝をはかる。保存状態は良好と言えよう。**櫛**は，きわめて遺存状態が悪い。黒ずんで，また汚れが付着しており，漆の有無はわからないが，おそらく白木であろう。梳き櫛は，一方の側縁を欠くが，背の中心から復原して，長さ8㎝程と思われる。

この他，土師器・白磁・天目・瓦などが出土しており，13～14世紀代頃の井戸と考えられる。

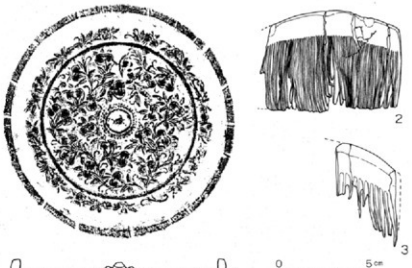


Fig.138　2771号遺構遺物実測図（1／2）

2978号遺構（Fig.139～141）

B区第1面，A～B－21～22グリッドで検出した井戸である。第1面上では，2979号遺構に切られ，掘りかたが明瞭ではなかった。第2面上での掘りかたは，径

Fig.139　2978号遺構（北西より）

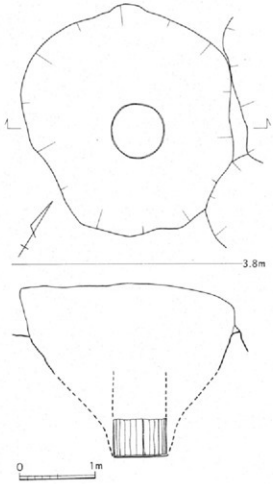


Fig.140　2978号遺構実測図（1／50）

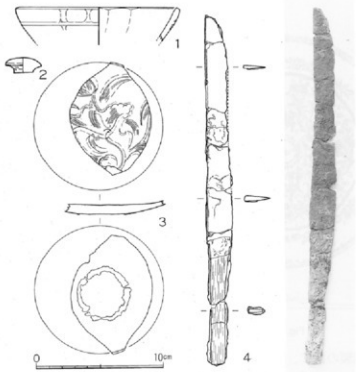


Fig.141　2978号遺構遺物実測図（1／3），短刀写真

約2.7mの円形を呈し，井側には，木桶を用いている（Fig.140は，第4面での実測である）。

Fig.141に，**出土遺物**の一部を示す。**1**は，**青磁**の蕉段皿である。底部を欠くが，底部は碁笥底状になる。**2**は**白磁**の小壺の蓋である。**3**は**高麗青磁**の皿である。見込みには片切彫りと櫛描で花文を画く。全面施釉で，底部には目土が輪状に付着している。**4**は，**鉄製の短刀**である。柄の木質を残すが，鞘の痕跡はみられない。刀身は平造りで，全長27.9cm，刃長18.4cmをはかる。

この他，土師器・白磁・青磁・陶器・石鍋などが出土している。

14世紀後半をあてることができる。

4716号遺構（Fig.142・143）

B区第3面E～F－19～20グリッドで検出した井戸である。掘りかたは，長径3.6m，短径3.2mの卵形を呈する。掘り下げは第3面で行なったが，第2面検出時に掘りかたの輪郭を不鮮明ながら把えており，本来第2面の遺構である。井側は木桶を用い，その中央に曲物を据えて水溜としている。

出土遺物を，**Fig.143**に示す。**1～14**は，**土師器**である。すべて底部は，回転糸切りする。**1～10**は皿で，器高の低い**1・5～7・10**と，器高の高い**2～4・8・9**の2タイプがある。ただし，法量的には**10**が口径9.6cmとやや大きな位で，そう顕著な差はなく，口径7.8～9.0cmの範囲内にある。**11～14**は，坏である。**11・13**の様に器高が高いものが目立つ。図示した4点は，法量的にもバラバラである。法量を示すと，口径－底径－器高の順で，それぞれ11.0－7.1－3.4cm，12.0－7.5－2.6cm，14.4－10.0－3.9cm，15.0－10.8－2.5cmをはかる。**15・16**は，**瓦器**である。**15**は楠葉型瓦器で，内面の暗文がきわめてはっきりとみとめられる。**11**の底部には，回転糸切り痕が残る。**17・18**は，**青白磁**の合子蓋である。**19～22**は，**青磁**である。**19**は蕉段皿，他は碗である。**23～28**は，**白磁**である。**25**は，口ハゲに作る。**27**の底部には「二」の墨書が認められる。**29～47**は**陶器**である。**29・30**は皿で，茶色釉をかける。**31**は，壺の蓋であろう。**32・33**は，黄釉鉄絵盤である。**34**は褐釉長胴瓶，**35**は，褐釉双耳壺である。**36・37**は無釉陶器の

Fig.142　4716号遺構（北東より）

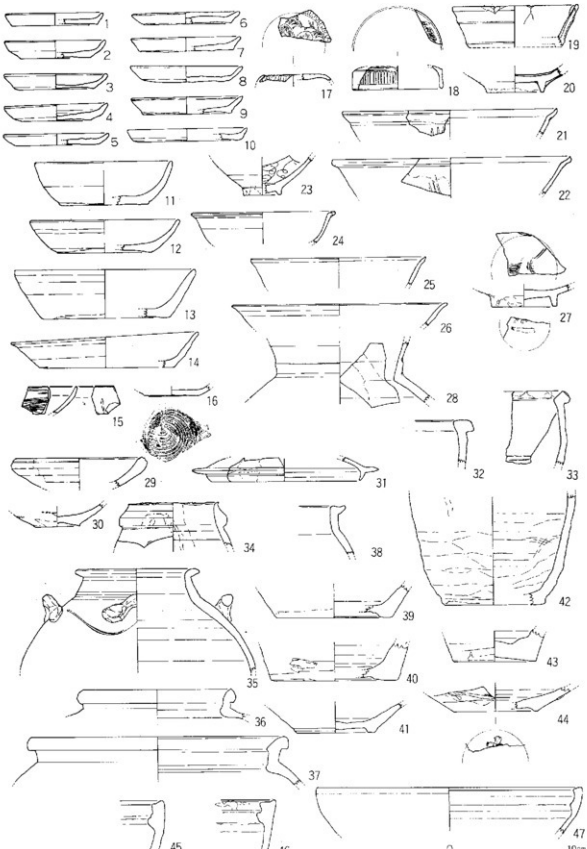


Fig.143　4716号遺構遺物実測図（1／3）

壺である。44は鉢で，外底に墨書があるが，判読できない。45～47は，無釉の焼き締めのこね鉢である。

この他，瓦・石鍋・鉄釘多数・銅塊などが出土している。

14世紀後半の井戸と考えられる。

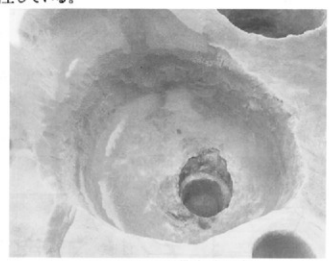


Fig.144　4768号遺構（北東より）

4768号遺構（Fig.144～146）

B区第３面，B～C－27・28グリッドより検出した井戸である。掘りかたは，径2.4m前後の不整円形を呈し，その中央に木桶を置いて，井側とする。

出土遺物を，**Fig.145・146**に示す。**Fig.146－1・2**は，**土師器**の皿である。底部を回転糸切りする。3は**褐釉陶器**の皿である。4は**天目茶碗**である。**5・6**は，**明代の染付**である。皿で，高台の畳付を露胎とする。**7～11**は，**白磁**である。**7・9・10**は皿，**8・11**は碗である。10の見込みは，輪状に釉を削り取る。**8～11**の底には，墨書がみられる。8は「□綱」，**9～11**は，花押と思われる。12は，**青磁**である。龍泉窯系の碗で，底部に「得丸」と墨書する。13は，常滑のこね鉢である。胎土は粗く須恵質で，内面は使用により磨滅している。14は**銅鋺**である。小片からの復元で，口径15.2cmと推定した。

上記の遺物，**5～7**などによる限り，4768号遺構は，16世紀後半をさかのぼることはないだろう。

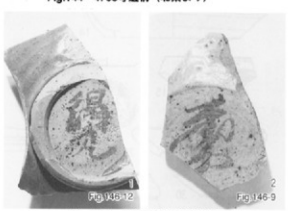


Fig.145　4768号遺構出土墨書

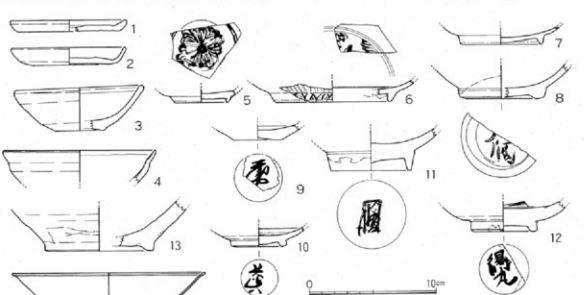


Fig.146　4768号遺構遺物実測図（１／３）

しかし，4768号遺構は，掘りかたの上位の第１面・第２面において，全く検出されない点に注意したい。一方，図面を重ねると，第１面では，4768号遺構の位置にかぶって遺構が検出され，それは第２面まで残っている。上の**５～７**などの遺物が，これら上位の遺構からの混入とすれば，4768号遺構は，大方の遺物の示す年代12世紀後半頃で落ちつくことになる。

5248号遺構（Fig.147～150）

B区第２面J－K－25～26グリッドで検出した井戸である。ただし，第２面上では，4053号遺構としている。5248号遺構とは，第３面調査時の呼称であるが，大方の遺物がこれで取り上げられている為，第３面時の番号を，そのまま使用する。

第２面上では，長径2.9m，短径2.6mの楕円形の掘りかたを持ち，そのほぼ中央に木桶を伏せて，井側とする。なお，Fig.147は，第４面調査時の実測図なので，掘りかたが，径2.0mの円形にまで縮まっている。

出土遺物を，**Fig.150**に示す。**１～４**は，**土師器**である。底部を回転糸切りし，体部を横ナデ，さらに内底部にはナデ調整を加える。**１～３**は皿で，口径－底径－器高は，それぞれ9.4－8.2－0.8，9.5－7.1－1.3、9.5－7.25－1.2㎝と，よくそろ

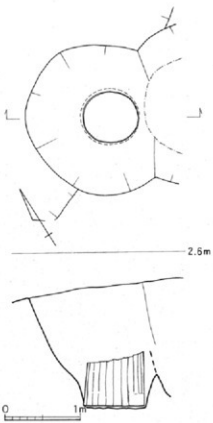


Fig.147　5248号遺構実測図（１／50）

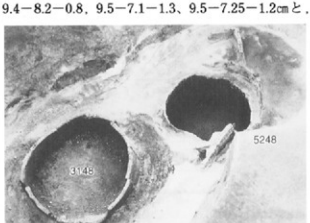


Fig.148　5248号遺構（北東より）

Fig.149　5248号遺構出土白磁碗

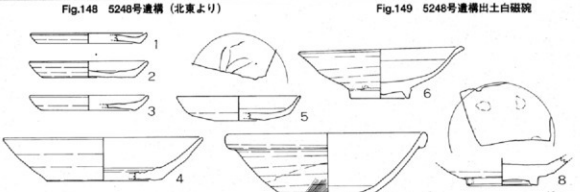


Fig.150　5248号遺構遺物実測図（１／３）

っている。4は坏である。口径15.8，底径9.0，器高3.45cmをはかる。5～7は，白磁である。5は皿で，見込みに花文を線描きする。平底の底部を露胎とする。6・7は碗である。8は青磁である。龍泉窯系の碗で，見込みに重ね焼きの目痕が残る。

この他，瓦器・陶器などが出土した。

12世紀後半代の井戸と考えられる。

Fig.151　5296号遺構（北東より）

5296号遺構（Fig.151・152）

B区第4面，C～D－30～31グリッドより検出した井戸である。近世の井戸である第2面

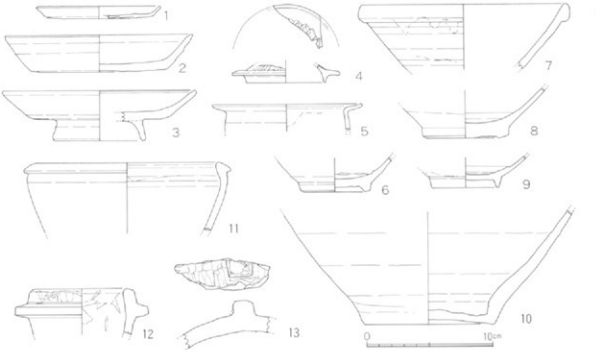


Fig.152　5296号遺構遺物実測図（1／3）

3502号遺構に切られ，また一部は調査区外に出るが，おおよその形状を知ることはできる。掘りかたは，径約2.5mの略円形を呈し，その中央に木桶を重ねて，井側を作っている。

Fig.152－1～3は，土師器である。1は皿，2は坏で，ともに回転糸切り，内底部にはナデ調整を加える。3は高台付坏で，内面を平滑に磨く。4・5は，青白磁である。4は小壺の蓋，5は香炉だろう。6は，高麗青磁の碗である。見込みには，耐火土が細く輪

Fig.153　5424号遺構（北西より）

状に付く。7～9は，**白磁**である。10・11は**陶器**である。10は壺の底部で，褐釉を施す。11は，灰釉の鉢である。12・13は，**石鍋**である。12はミニチュアで，口径8.0㎝をはかる。13は，縦耳型の石鍋片である。

土師器は完全に糸切り底のみとなっているが，青磁が全く含まれていないことから，12世紀中頃の年代を考える。

5424号遺構（Fig.153～157）

B区第4面，A～B－20のグリッドより検出した井戸である。5689号遺構，5887号遺構（ともに井戸）と切り合い関係にあり，ために掘りかたははっきりしない。調査時に，掘りかた埋土中から，円筒形の黒色土を検出，桶を用いた井側を念頭において掘り下げたところ，その下部から方形の板組を検出した。おそらく，方形の板組を水溜とし，その上に桶による井側を組んだのであろう。水溜の板組は，一辺50㎝で，高さ18㎝分を検出している。

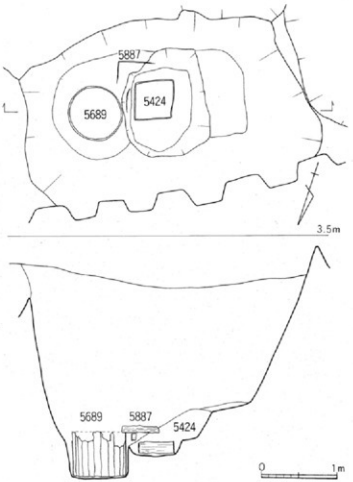


Fig.154　5424号遺構実測図（1／50）

Fig.157に**出土遺物**を示す。1～10は，**土師器**である。外底部は，回転糸切りする。1～8は坏である。すべて井側内から出土したものを図示した。内底部のナデは見られない。口径12.05～13.5㎝，底径7.7～9.5㎝，器高2.75～3.1㎝で，形態的にもそろっている。9・10は皿である。内底のナデ調整を伴う。法量は，それぞれ口径8.3，8.8，底径6.0，6.8，器高1.1，1.05㎝をはかる。11～13は，**白磁**である。11は皿で，見込みを輪状に露胎とする。12は，口ハゲの碗である。13には，「陳」と墨書されている。14・15は**青磁**，16は**天目**茶碗である。17は**和鏡**である。銅製だが，錆がひどく意匠も見にくい。鈕は亀形で，車輪文様（源氏車？）と波の様な浮線がみえる。

14世紀前半頃の井戸であろう。

Fig.155　5424号遺構出土墨書

Fig.156　5424号遺構出土和鏡

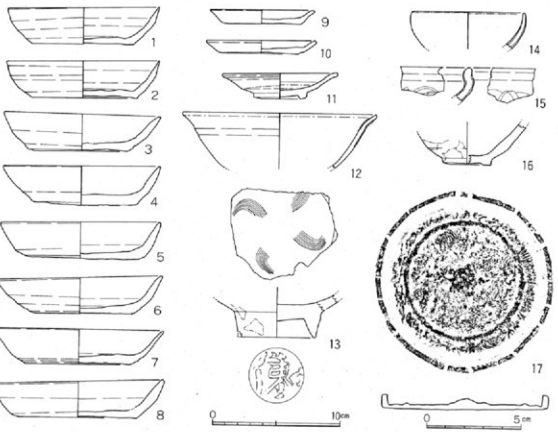


Fig.157　5424号遺構遺物実測図（1／3）

5477号遺構（Fig.158～160）

B区第4面，D～E－17グリッドより検出した井戸である。掘りかたがA区にまたがるのは確実だが，A区側では，これを検出しえていない。そのかわり，妙な土坑の切り合いとして検出しており，明らかに検出ミスである。その辺も加味して，全体をみると，掘りかたは，径約4mの円形を呈している。井側及び水溜は，B区側で約2分の1を検出した。それによると，井側は板材を方形に組んだもので，最下段で一辺78cm，そのひとつ上段で一辺90cmをはかる。さらにその上位の板組は，確認できなかった。水溜は，木質しか残っていないが，おそらく曲物であろう。直径約40cm，高さ約30cmをはかる。

Fig.158　5477号遺構（南西より）

出土遺物を，**Fig.160**に示す。**1・2は土師器**である。底部は，回転ヘラ切りする。1は皿で，横ナデ調整する。2は丸底坏で，内面をコテで平滑に仕上げる。3は，**瓦器**である。椀の底部で，内底はジグザグ状のヘラ磨きを密に施す。高台内には墨書が描かれているが，判読できない。花押であろう。**4～7は，白磁**の碗である。7の体

部外面には，沈線がゆるく弧を描いて垂下している。

この他，若干の陶器・瓦が出土した。

11世紀後半の遺構である。

5492号遺構（Fig.161・162）

B区第4面，G−21〜22グリッドより検出した井戸である。北側を，第1面3012号遺構，4面5402号遺構に，南側を第4面5482号遺構に切られている。遺存部分からみて，掘りかたの径は2.3m，略円形を呈し，中央に木桶をおいて井側とする。井側内側には，木溜として，さらにひと回り小さい木桶を据えている（Fig.161）。

出土遺物を，**Fig.162**に示す。**1・2**は**土師器**である。ともに，外底部は回転糸切りである。体部は横ナデ調整し，**1**ではさらに内底部分にナデ調整を加えている。法量は，口径−底径−器高の順に，それぞれ9.2−7.5−1.15cm，15.0−11.0−2.7cmをはかる。**3・4**は，**天目茶碗**である。**3**は体部で，直線的に開き，小さく屈曲して，口縁部となる。**5**は**白磁**の皿である。**6**は，**須恵器**の甕の口縁である。内外面とも横ナデされる。

この他，ガラスるつぼに転用された陶器の盤口壺が出土した。

出土した土師器には，ヘラ切りのものも混っており，青磁が出土しない点からみて，12世紀前半におくことができよう。

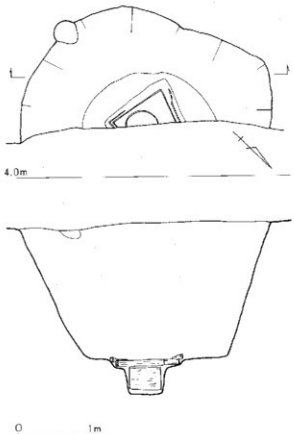


Fig.159　5477号遺構実測図（1／50）

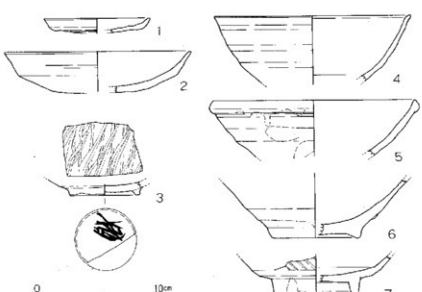


Fig.160　5477号遺構遺物実測図（1／3）

5520号遺構（Fig.163・164）

B区第4面J−28グリッドより検出した（Fig.164）。長径3.3m，短径2.7mの楕円形の掘りかたの中から，次に述べる5521号遺構と並んで検出した井戸で，切り合い関係はつかめなかったが，遺物の年代観からみると，5521号遺構に先行するものと思われる。井側には，木桶を用いている。

Fig.163−1〜20は，**土師器**である。

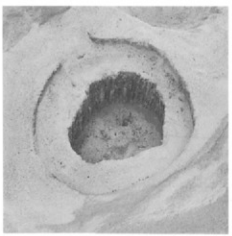


Fig.161　5492号遺構（南より）

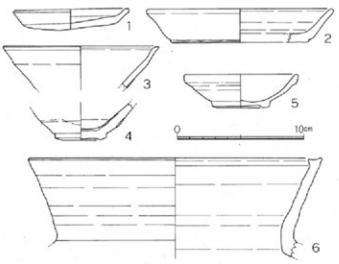


Fig.162　5492号遺構遺物実測図（1／3）

1～13は皿，14～19は坏で，外底部は回転糸切りし，内底部にナデ調整を加える。皿は口径8.4～9.6cm，器高1.0～1.3cm，坏は同じく13.0～14.0cm，2.4～3.1cmをはかる。20は椀で，内外面にうすくヘラ磨きがみえる。21・28は陶器である。21は褐釉の皿，28は緑褐釉の甕である。22・23は青磁である。22は龍泉窯系，23は同安窯系。24～27は白磁で，27の高台内には墨書があるが，判読できない。

出土遺物からみて，12世紀後半頃の井戸と考えられる。

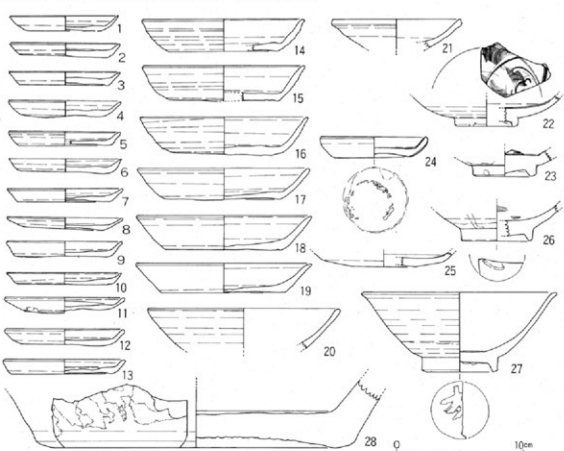


Fig.163　5520号遺構遺物実測図（1／3）

5521号遺構（Fig.164・165）

B区第4面K−28グリッドより，前項の5520号遺構とならんで検出した井戸である。出土遺物からみると，5520号遺構より，若干後出するものと思われる。井側には，木桶を用いる。

Fig.165に**出土遺物**を示す。**1**〜**9**は，**土師器**である。外底部は回転糸切りし，内底部にナデ調整を加える。**1**〜**7**は皿で，口径8.6〜9.3㎝，器高1.0〜1.7㎝，**8**・**9**は坏で，口径13.4，13.8㎝，器高はともに2.9㎝をはかる。**10**は，**瓦質土器**の鍋である。内面は，刷毛目調整する。**11**・**12**は，**青白磁**の皿である。**13**〜**16**は，**白磁**である。**13**は口ハゲにつくる。**14**は，見込みを輪状に露胎とする。**15**は，壺の底部である。**17**・**18**は**青磁**の碗である。龍泉窯系で，**17**は鎬蓮弁文をあしらう。

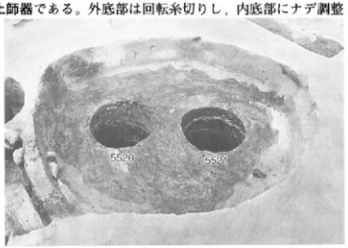


Fig.164. 5520・5521号遺構（南より）

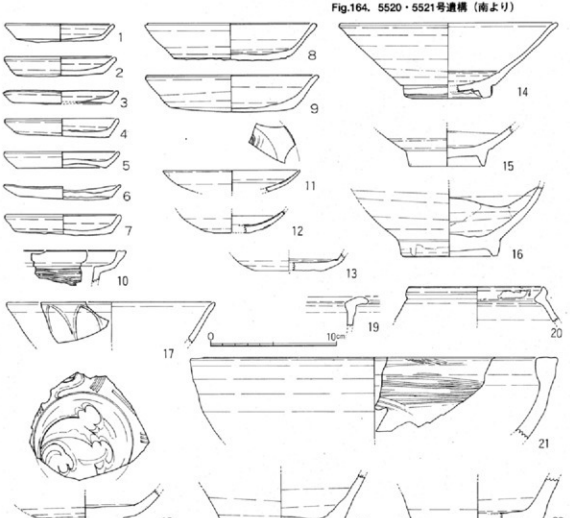


Fig.165 5521号遺構遺物実測図（1／3）

19～23は，**陶器**である。19は黄釉陶器の鉢で，体部内面に施釉する。20は褐釉の壺で，口縁の内傾面に目痕の土が付着する。21は大型の鉢である。内面は粗く刷毛目調整する。22・23は，褐釉の壺の底部である。この他，天目茶碗片，瓦片，楠葉型瓦器片などが出土している。

13世紀前半におくことができよう。

5524号遺構（Fig.166・167）

B区第4面，L～M－28～29グリッドより検出した井戸である。長径2.2m，短径1.9mの楕円形の掘りかたで，中央に木桶をおいて井側とする。

出土遺物を，**Fig.167**に示す。1～4は，**土師器**である。外底部を回転糸切りし，内底部にはナデ調整を加える。法量は，それぞれ口径－底径－器高の順に，9.5～9.7－6.95－1.0cm，9.4～9.6－7.1～7.5－1.5cm，15.2－11.6－2.5cm，15.4－11.6－2.65cmをはかる。5～10は，**白磁**である。5・6は平底の皿で，5には墨書がみられる。花押であろう。8～10は碗で，9の高台内には，「上」と墨書される。11・12は**青磁**である。同安窯系の碗であろう。13は，**黄釉陶器**の盤である。14は**東播系須恵器**のこね鉢である。

12世紀後半に属する。

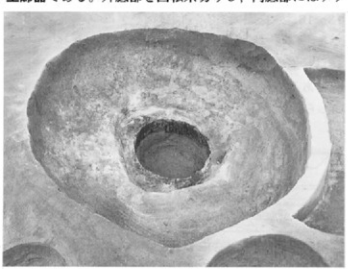


Fig.166　5524号遺構（南西より）

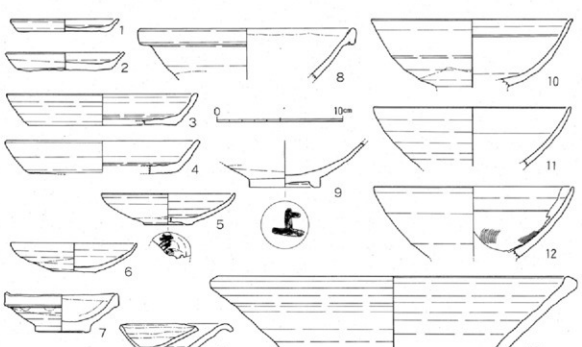


Fig.167　5524号遺構遺物実測図（1／3）

5526号遺構（Fig.168・169）

B区第4面N−30グリッド検出の井戸である。木桶を据えて，井側とする。隣接する5527号遺構に切られる。

出土遺物を，**Fig.169**に示す。**1**〜**3**は，**土師器**である。底部を回転糸切りする。**2**にのみ内底部のナデ調整がみられる。法量は，口径−底径−器高の順に，それぞれ8.3−5.7−1.45㎝，12.6−8.2−2.8㎝，12.8−7.8−2.7㎝をはかる。**4**は滑石製の

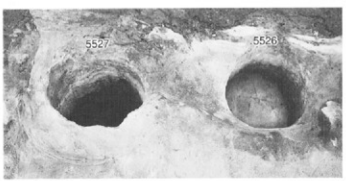


Fig.168　5526号・5527号（北東より）

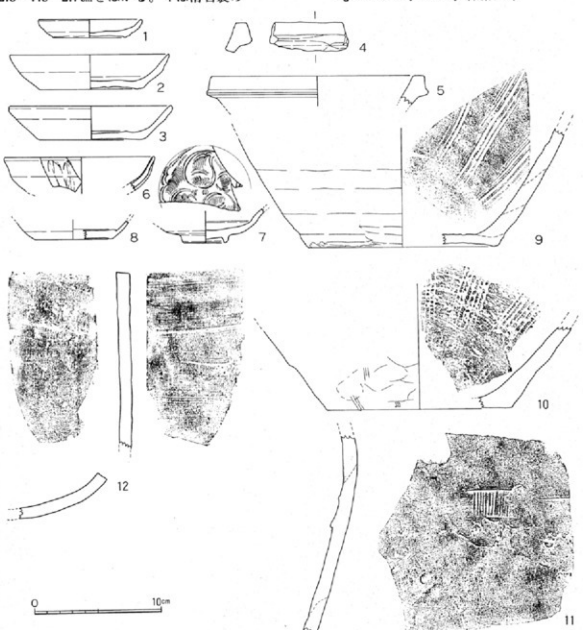


Fig.169　5526号遺構遺物実測図（1／3）

石錘である。石鍋を転用したもので，もとの石鍋の復原図を**5**に示す。**6・7**は**青磁**である。**8**は**白磁**の口ハゲの皿である。**9**は，**備前焼**のすり鉢である。内面には，5本を単位としたすり目を立てる。**10**は，**瓦質土器**のすり鉢である。内面は刷毛目調整し，すり目をつけるが，使用のため磨滅している。**11**は，**常滑焼**の甕の胴部である。**12**は，**平瓦片**である。上面には細かい布目，下面は横方向になでている。

出土遺物からみて，14世紀前半代と考えられる。

5527号遺構（Fig.168・170）

B区第4面O−30グリッド検出の井戸である。木桶を据えて井側とする。

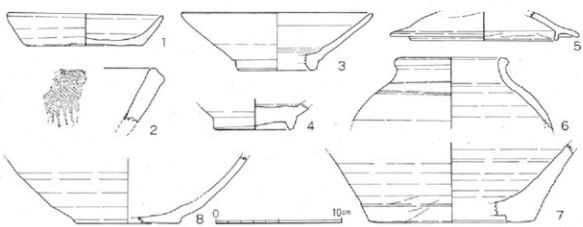


Fig.170　5527号遺構遺物実測図（1／3）

出土遺物を，**Fig.170**に示す。**1**は**土師器**である。底部を糸切りする。内底のナデ調整は，みられない。**2**は**瓦質土器**のすり鉢である。**3・4**は，**白磁**である。見込みの釉を輪状にかきとる。**5**〜**7**は，**褐釉陶器**である。**5**は壺である。鍔部から内側を，露胎とする。**6**は，壺である。**7**は壺の底部である。**8**は，**東播系須恵器**のこね鉢である。使用のため，平滑に磨滅している。底部に糸切り痕を残し，胎土もやや粗い点からみて，魚住窯のものと考えられる。

以上の遺物と，5526号遺構を切る点から見て，14世紀中頃から後半代の遺構であろう。

5529号遺構（Fig.171〜175）

B区第4面N〜O−26〜27グリッドより検出した井戸である。長径3.0m，短径2.1mの

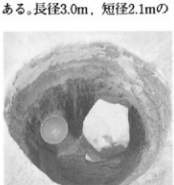


Fig.171　5529号遺構井側

Fig.172　5529号遺構（南より）

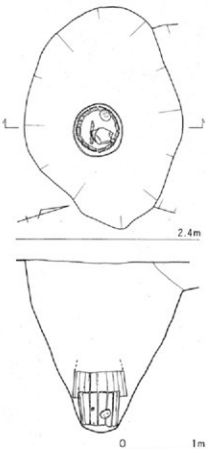


Fig.173　5529号遺構実測図（1／50）

←Fig.174　5529号遺構出土短刀

Fig.175　5529号遺構出土白磁碗

長楕円形の掘りかたを呈し，そのほぼ中央に木桶を据えて井側とする。井側の最下段には，ひとまわり小型の木桶を上向きに置き，水溜とする。

水溜中より，白磁碗と鉄製短刀が出土した。井戸を廃棄した際の儀礼にかかわる遺物であろう。

出土遺物を，**Fig.177**に示す。**1～3**は，**土師器**である。外底は回転糸切りで，内底にはナデ調整を加える。口径8.8～9.2㎝，器高0.9～1.3㎝をはかる。**4・5**は，**楠葉型瓦器**の椀である。内外面に細かいヘラ磨きが施される。**6**は，在地産の**筑前型瓦器椀**である。幅広く浅いヘラ磨きが施される。**7～13**は，**白磁**である。**7**は小壺の蓋，**9～13**は碗である。**10**の高台内には，「大」字を墨書している。**12・13**の見込みは，釉を輪状に掻き取る。**14**は，**陶器**の壺である。**15・16**は**瓦**である。内面には布目，外面には斜格子の叩き目が残る。須恵質に焼成される。**17**は，**滑石製品**である。方柱状に削り出す。石錘の未製品か。**18**は，井側内から出土した**焼石**である。**Fig.174**には，水溜内出土の**鉄製短刀**を示す。合口に造った柄木は残るが，鞘の木質はなく，本来抜き身の状態で，水溜中に納められたものと思われる。刀身は，ほぼ中程から切先にかけて，斜めに身幅を減らし，切先は急角度でそぎ落したようにつく。錆のためにはっきりとは観察できないが，研ぎ減りによるものであろう。

Fig.175は，**Fig.177－11**にも図示しているが，水溜中出土の白磁碗である。玉縁口縁の完形品である。

これらの遺物からみて，12世紀中頃の遺構と考えられる。

Fig.176　5532号遺構（北西より）

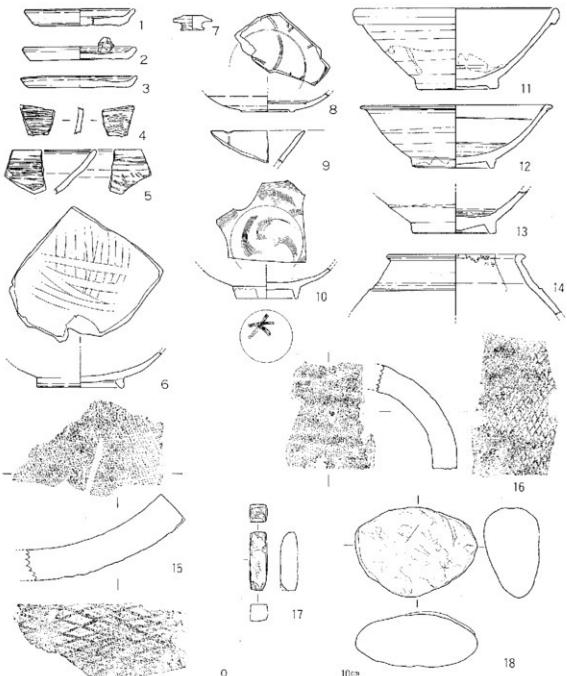


Fig.177　5529号遺構遺物実測図（1／3）

5532号遺構（Fig.176・178）

B区第4面，L−26グリッドより検出した井戸である。径約1.9mの略円形の掘りかたの底から，5531号遺構（井側）と共に検出されたもので，両者の切り合い関係は確認できなかった。出土遺物からみると，5532号遺構には含まれていない青磁が，5531号遺構からは出土しているので，5532号遺構が5531号遺構に先行するものと思われる。なお，井側は，木桶を据えたものである。

出土遺物を，**Fig.178**に示す。**1**は**土師器**の皿である。若干丸底気味につくるが，外底部は回転糸切りである。口径9.9cm，底径8.0cm，器高1.3cmをはかる。**2～5**は，**瓦器椀**である。図化したものは，

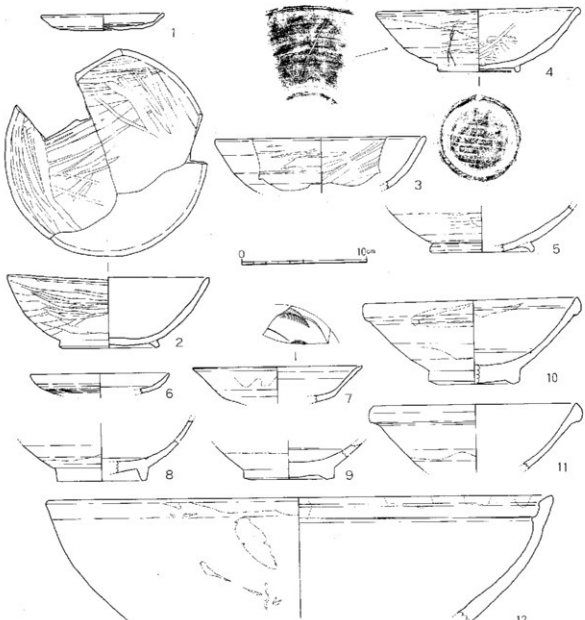


Fig.178　5532号遺構遺物実測図（1／3）

すべて筑前型瓦器であるが，楠葉型瓦器の小片も出土している。2は深椀である。内外面とも4分割のヘラ磨きを施す。4は浅椀である。外面は平行ヘラ磨き，内面はジグザグ状に方向の一定しないヘラ磨きを重ねる。底部は，回転ヘラ切りである。外底と体部外面に，X印状のヘラ記号を刻む。これらの瓦器のヘラ磨きは，幅広で浅く，単位がとらえにくいのが特徴である。また，いずれも高台は比較的高く，しっかりと整形され，径が広い。筑前型としては，古式の特徴を残していると言えよう。6～11は白磁である。6・7はⅢで，7の見込みには，櫛描文が入る。8～11は碗である。12は無釉陶器のこね鉢である。赤茶色の粗い胎で，かたく焼き締る。体部下位は，使用により磨滅している。

この他，白磁香炉，土錘などが出土している。

出土遺物からみて，おおむね12世紀前半代に位置付けることができるだろう。

5533号遺構（Fig.179・180）

B区第4面，L−24・25グリッドから検出した井戸である。長径1.78m，短径1.55mの楕円形を呈した掘りかたの中央に，木桶を据えて井側とする。

井側の木桶は2段分を検出した。さらに井側の最下段には，ひとまわり小さい桶を上向きに立て，水溜としている。

土師器（糸切り）・白磁・青磁などが少量出土した。

Fig.179　5533号遺構（東より）

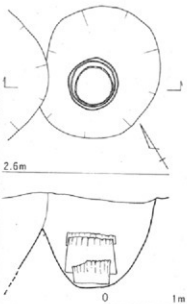


Fig.180　5533号遺構実測図（1／50）

時期を決定する根拠を欠くが，出土遺物から，12世紀後半〜13世紀前半代の井戸であろう。

5542号遺構（Fig.181・182）

C区第4面，P−Q−27グリッドで検出した井戸である。中世最末期の井戸であり，本来第1面よりも上から検出できてしかるべきものだが，第1面〜第3面で，はついに検出しえなかった。しかし，第1面上では，丁度この部分で，方形がかったプランを持つ撹乱坑（のようなもの）を検出しており，これが実は5542号遺構であったと考えられる。

5542号遺構は，石積みの井側を持つ井戸である。直径2m前後の円形の掘り方の最下部に，木桶を伏せておき，その上縁付近から石を積み上げる。大型の礫を用い，裏込めに小礫を用いるが，裏込めは厚くなく，ほとんど土砂で埋めこんでいる。

検出時には，井側内は小礫や大振りな礫で埋め尽くされていた。また，石積み自体も，検出面から若干掘り下げた段階から出土しており，井戸廃絶後，上からこのレベルまで石積みの石を抜き取ったものと思われる。大型の石を抜くのが目的であった様で，扶い井戸

Fig.181　5542号遺構・5543号遺構（南東より）

の中の作業で，崩れた石や裏込めの石などは，そのまま井戸の中に落とし込んだのだろう。そうして，上から石を抜きながら下り，井戸の底からは崩れ，落された石がたまって上って来て，ちょうどこのレベルで上からの掘り下げと下からの埋積が合致，それ以上石を抜けなくなって断念したものと思われる。同様の現象は，B～C－30～31グリッドの5666号遺構（石積み井戸，近世初頭）でもみられた。

出土遺物を，**Fig.182～185**に示す。**1～4**は，**土師器**である。外底部は回転糸切りし，内底にナデ調整を加える。**1・2**は皿で，口径8.4，8.6cm，底径6.8，6.0cm，器高1.05，1.2cmをはかる。**3・4**は坏で，口径10.6，11.0cm，底径6.8，8.1cm，器高2.2，2.7cmをはかる。**5**は，**青磁**の壺である。越州窯系のもので，時代的には先行する遺物である。**6**は，**朝鮮王朝の白磁**の皿である。見込みと畳付には，4ケ所の目痕がみられる。**7～10**は，**明代の染付**である。**7・9・10**は碗である。高台際で腰が大きく張り，そこからは体部は直線的にのびて立ち上る。**8**は皿である。高台は比較的厚い。全面に施釉した後，高台端部を削って露胎とする。**11・16～20**は，**瓦質土器**である。**11**は鉢であろうか。分厚い

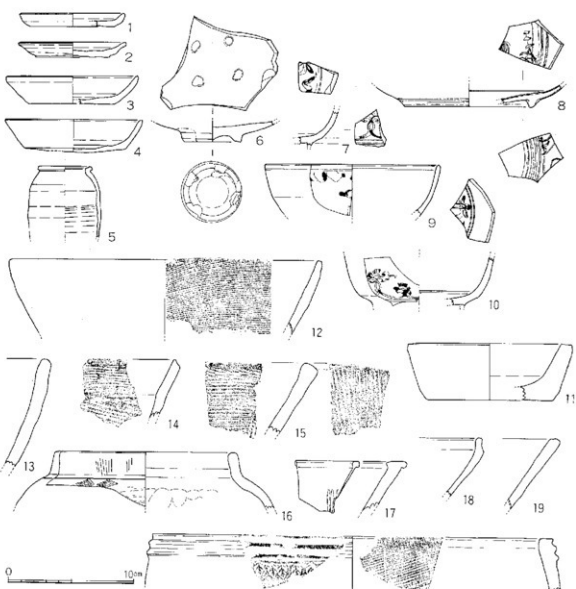


Fig.182　5542号遺構遺物実測図（1／3）

つくりで，石鍋を思わせる。ナデ調整される。**16**は，茶釜である。頸部に細い沈線をめぐらし，その下に菱形のスタンプ文様を２組づつ，数ヶ所に押す。**17**はすり鉢，**18・19**は破片のためすり目は残っていないが，すり鉢であろう。**20**は火舎である。口縁直下に２条の突帯をめぐらし，その下に木葉文のスタンプ文様を並べる。**12～14**は**土鍋**である。外面には，煤が付着する。**15**は，土師質土器のすり鉢である。内面のすり目が，わずかに残っている。**21**は**タイ陶器**の壺である。四耳壺になるものか。肩部の破片で，４条の沈線が巡る。外面には，灰緑色の釉がうすくかけられる。胎土は茶色でやや粗く，焼き締っている。**22～27**は，**備前焼き**である。**22～27**はすり鉢である。口縁内面は，斜めに面取りされ，隆起状に稜がつく。**28・29**は，壺の口縁である。玉縁状につくる。**30～35**は，**瓦**である。**30～33**は丸瓦で，内面には布目，外面には叩きの縄目をのこす。**34・35**は，平瓦である。弯曲の少ない扁平なつくりで，コビキ痕の条線が見られる。**36**は瓦質の**鴟**である。厚さ９㎝をはかる。**37～39**は，**石臼**である。**37**は，茶臼である。相対する両面から，3.5㎝程度穿孔する。穿孔の縁は，花弁状に彫りのこす。下面の目は細かく，８分割程度で刻まれている。下面の直径は，18.8㎝をはかる。**38・39**は，粉を碾く臼である。**38**には，粉の材料をおとしこむ穴が，貫通している。碾き目のついた面は平らで，粗い目が刻まれている。**39**は，半径約17.5㎝をはかる。目の立てられた上面は，ゆるい凸面となっている。目は粗く，周辺部は磨耗して目が消えている。

この他，鉄滓（碗形滓），初期唐津焼の小片などがまじっており，16世紀末頃の井戸と考えるのが妥当であろう。

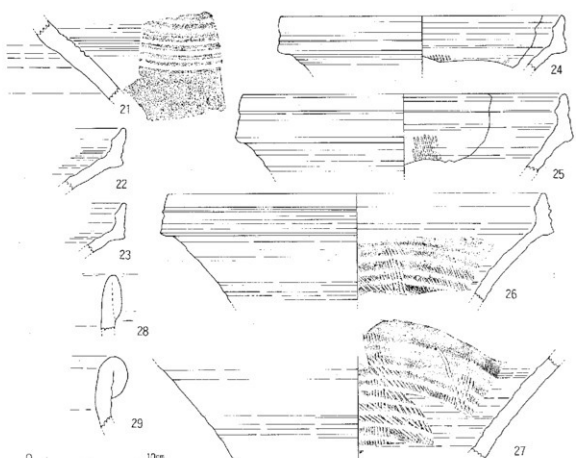


Fig.183　5542号遺構遺物実測図２（１／３）

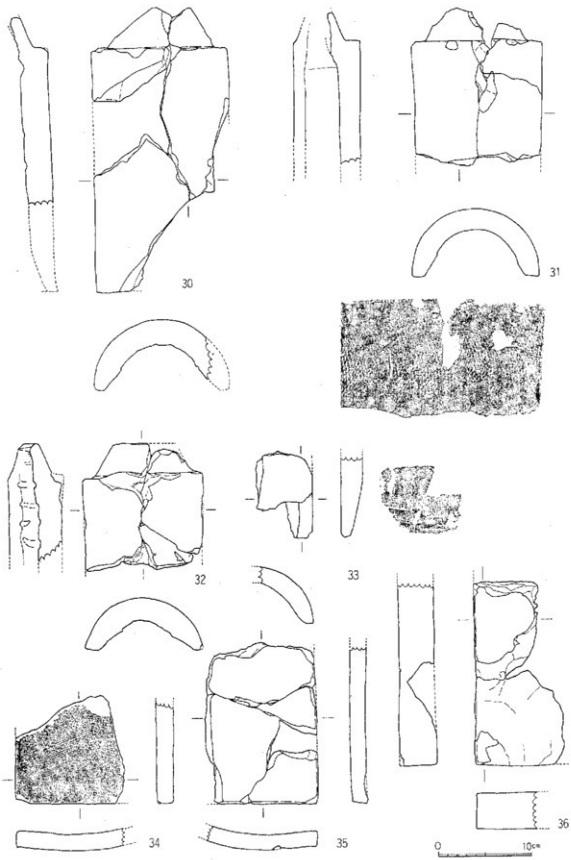


Fig.184　5542号遺構遺物実測図3（1／4）

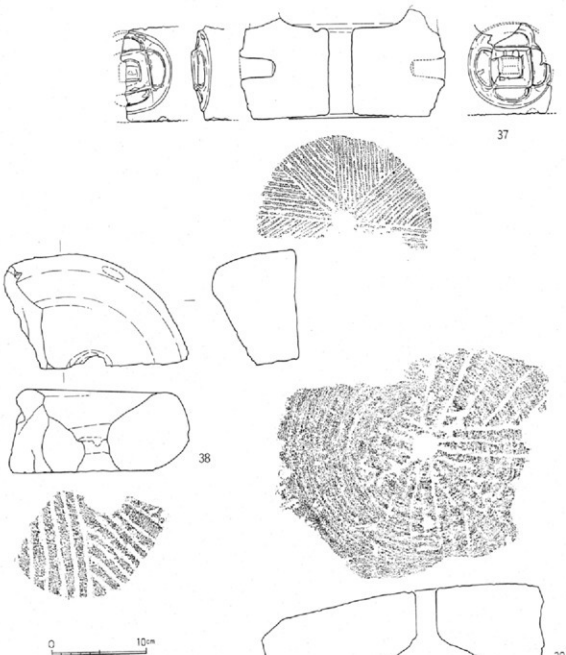


Fig.185　5542号遺構遺物実測図４（１／４）

5543号遺構（Fig.181・186～190）

C区第４面，P～Q－26グリッドより検出した井戸である。前項でのべた5542号遺構に切られる。径2.3mの円形の掘りかたを持ち，その中央に，径約80cmの木桶を伏せて井側とする。

井側下部より，褐釉陶器の短頸壺が出土した（Fig.188・190）。井戸廃絶時の祭祀に供されたものであろう。

この他，土師器（糸切り）・瓦器・白磁・青白磁・青磁・陶

Fig.186　5543号遺構井側（南西より）→

器・天目・瓦・石鍋などが出土している。

12世紀後半から13世紀初めにかけての井戸と考えられる。

5634号遺構（Fig.189～192）

B区第4面，C～D－20グリッドで検出した井戸である。径3.6m前後の不整形の掘りかたの底から，5635号遺構，5688号遺構などの井側と一緒に検出されたもので，調査段階では，切り合い関係は明らかではなかった。また，隣接する5636号遺構（井戸）との切り合い関係も明瞭ではないが，若干ながらも埋土に違いが認められ，それによる限り，5636号遺構が先行する様に思われた。

これらの井側は，出土遺物の上からも大差なく，遺物から前後関係を判断することもできなかった。

いずれも，木桶を伏せて井側とするものである。

Fig.190は，**青磁**の碗である。龍泉窯系の碗で，高台内に「一」と墨書されている。**Fig.191**は，**銅製**の和鏡である。遺存状態は良く，うすく錆がつくだけなのだが，文様の鋳出しが浅いため，見た目には文様は不鮮明である。拓本には，比較的良く表われている。鏡背の全面に菊花を散らし，中央下から右を大きくまわって上段に茎を立てた菊を描く。残念ながら，葉の部分が，錆のためはっきりしない。この部分に関しては，他の菊花の部分と比べて文様の彫が浅く，凹凸も滑らかであり，手磨れによる可能性も考えられる。面径11.2cmをはかる。

他に土師器（糸切り）・白磁・青磁（鎬蓮弁文など）・陶器・東播系須恵器・瓦質土器・瓦などが出土している。

Fig.187　5543号遺構出土短頸壺

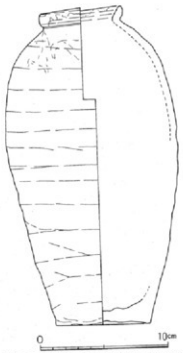


Fig.188　5543号遺構遺物実測図（1／3）

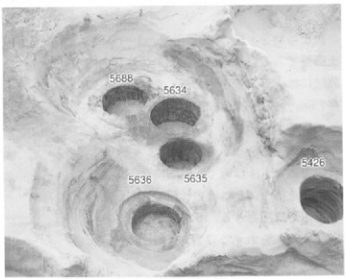


Fig.189　5634号遺構（北西より）

Fig.190　5634号遺構出土青磁墨書

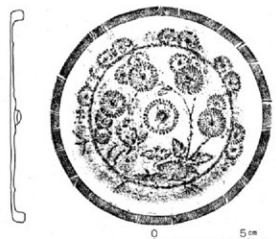


Fig.191　5634号遺構和鏡実測図（1／2）

Fig.192　5634号遺構出土和鏡

5653号遺構（Fig.193～195）

C区第4面，P－28～29グリッドより検出した井戸である。5652号遺構，5654号遺構，5680号遺構などと共に，かたまって出土しており，切り合い関係は確認できなかった。

出土遺物を，**Fig.195**に示す。**1**～**3**は，**土師器**である。外底部を回転糸切りし，内底部にはナデ調整を加える。**1**は皿で，口径7.6cm，底径6.1cm，器高1.6cm，**2**・**3**は坏で，それぞれ口径11.7，11.7cm底径7.9，7.3cm，器高2.6，2.4cmをはかる。**4**～**6**は，**青磁**である。**4**は碗で，外面に沈線による蓮弁文を描く。**5**は高台付皿で，内底部の釉を円形に掻きとる。**6**も碗で，見込みに印花文がみられる。**7**は管状**土錘**である。**8**は**軒平瓦**の瓦当である。

Fig.193　5653号遺構（北西より）

Fig.194　5653号遺構出土白磁壺蓋

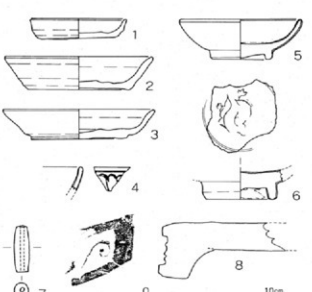


Fig.195　5653号遺構遺物実測図（1／3）

Fig.194は，白磁碗の底に書かれた墨書である。「壁」と読むことができる。

これらの遺物から16世紀代におくことができよう。

5858号遺構

(Fig.196～199)

C区第4面，S～T－29グリッドより検出した井戸である。径2.35mの略円形の掘りかたの中央に，木桶を据えて井側とする。さらに中央には，曲物を上向きにおいて，水溜にしている。

Fig.196　5858号遺構（南西より）

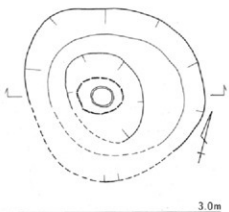


Fig.197　5858号遺構出土高麗青磁碗

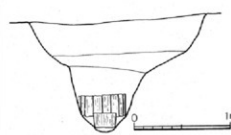


Fig.196　5858号遺構実測図（1／50）

出土遺物を，**Fig.199**に示す。**1・2**は，**土師器**である。ともに外底部は，ヘラ切りする。**1**の皿で，口径9.6cm，底径7.0cm，器高1.2cmをはかる。**3**は，**高麗青磁**の碗である。濃灰色の若干粗い胎に，濃緑色の釉を全面に施す。見込みには，重ね焼きの目痕が並ぶ。**4～7**は，**白磁**の碗である。**8**は，**陶器**の水注である。**9**は**平瓦**である。上面には布目が，下面には格子目叩きが残る。

これらの遺物からみて，11世紀後半の井戸と考えられる。

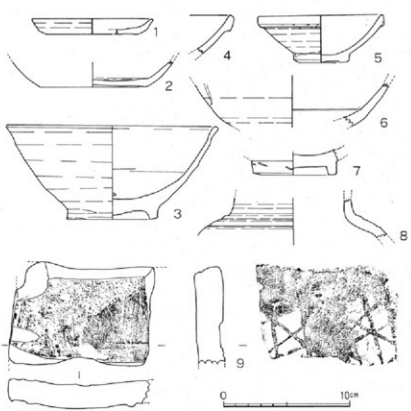


Fig.199　5858号遺構遺物実測図（1／3）